
エロゲに転生ってマジですか？そうですか

貧乏狸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エロゲに転生ってマジですか？そうですか

【コード】

N3882Q

【作者名】

貧乏狸

【あらすじ】

三十路を少しすぎたおっさんがあるゲームに転生する、そんなお話。

編集作業中

1～5まで編集終了

そのいち(前書き)

3 / 24 PM 22:06 修正完了

そのいち

とある薄暗いアパートに30歳ほどの独身男性が一人……パソコンの前で某掲示板に書き込みをしている。

端正な顔立ちにトレードマークの不精髭。

仕事から帰ってきてすぐ書き込みをしているのだろう、スーツを着用したままである。

「このメインヒロインどうやったら攻略できるんだよw」

なんてこった。

某掲示板で今年クソエロゲNo.1に選ばれたキングオブクソゲー。

「ストロングラバーズ」略してストラバ。

音飛び、セーブできない箇所、難攻不落すぎるメインヒロイン。

市場に出る前の期待度は上半期No.1とも噂されていたのだが……。

フタを開けてみればひどいものだった。

前評判が良かっただけに、被害者の数もバカにならない。

男、神山 武弘もこのキングオブクソゲーの被害者の一人であったが、彼はそんなクソゲーすらも愛おしく思っている。

「難攻不落ねえ……。燃えるじゃねえか！」

神山は掲示板内の【誰が】ストラバ難攻不落メインヒロイン攻略ス

レ【最初にクリアする！？】の書き込みをしつつ、過去のレスを流し読みしていく。

掲示板の中は阿鼻叫喚。

それもそうだろう、パッケージのど真ん中にプリントされているはずの、黒髪ロングのポヤポヤした表情メインヒロインが攻略できないのである。

物語の中核を担うキャラクターでもあるはずの彼女が攻略できないとはまさに詐欺。

憤慨する大きなお友達が出てきても、なんら不思議ではない。

「俺が一番にさっちゃんを攻略してやるよ」

このクソゲーが出て半年かぁ。

まだ誰もさっちゃんを攻略できてないと思うと、胸が熱くなるな。だから、だからこそ俺が一番に攻略することに意味も出てくる。

昔から俺はそうだった。

誰もが無理であろうと諦めるものを片っ端からクリアしていくと、いつしか周囲の人間は俺のことを天才や神童と呼ぶようになっていった。

初めから無理と諦めることが嫌いだった俺は、ただそれをクリアしていくために心血を注いだけだったのだが。

しかし、それも段々と変わってくることになる。

達成感や周りの反応だ。

人は周りに左右されやすい生き物である。

調子に乗っていると言われたならば、確かに天狗になっていたといわざるをえない。

人ができないことをやり遂げていく快感に酔っていたのかもしれない。

その達成感やクリアしていく快感、人の評価のおかげで尚がんばれ

るようになってしまう俺。

勉強にスポーツに恋愛に仕事。

ありとあらゆる点においても妥協したことは無い。

妥協しないで全力で当たるからこそ、クリアできてしまうのだが・
・。

しかしそうなつてくると、俺の中である一つの欲求が出てくる。

俺にクリアできない難関はないだろうか？と。

そう、退屈や飽きはもう嫌だと。

なんでも一人でできてしまう、それはとても悲しいことで。

己の人生において、遣り甲斐のあるものが無くなっていくのである。

だが、だが、だが！

ついに俺の前に立ちふさがるものが現れたのだ。

それがたとえゲームであろうともだ。

ストラバとの出会いは運命だったのかもしれない。

仕事帰りにフラックと寄った電気街の量販店。

買うものも特にはなく、店の中をぶらぶらとしているときに俺は見つけた。

パソコンゲームコーナーの投売りのワゴンの中にそれは置かれていた。

中央には黒髪の美しい美少女が。

その周りには一癖も二癖もありそうな、自然界ではありえない髪の色
の美少女のプリント。

俺はワゴンにフラフラと近づいていき、そして手に取った。

まあ暇つぶしくらいにはなるだろう・・・と。

この淡い思いがまさか現実になろうとは。

暇潰しで買ったエロゲ。

すべてのサブヒロインはクリアし、何度も何度も周回プレイを重ねた。

何度も何度も、メインヒロイン藤堂 沙紀、通称さっちゃんのフラグを立てようとするが、まったく立たないフラグ。

地雷原のようなバッドエンドを避けて漸くか……っと思うもそれはダメーで。

どうすれば、どうすればフラグが立つんだ！

初めはバグでメインヒロインを攻略できないんだと思ひ込み掲示板を覗いてみたがバグでも無く。

このゲームを始めるきっかけになったヒロインは、まだ一度も俺に微笑んではくれない。

諦める訳にはいかないな……。まったく、ゲームでこんなに熱くなれるとは。

「うお、もうこんな時間かよ。もうそろそろ寝るとするかね」

2度腰をトントンと叩き、伸びをする。

ふう……明日の仕事終わったら年末の休みだし……ストラバをぶっ続けでやって、さっちゃんを攻略してみせる。

何かの胸騒ぎだろうか。

ふと時計を見ると時刻4時44分。

時刻を確認したとたん、心臓に鋭い痛みを感じ、凄まじい衝撃が体を襲う。

目の前にフローリングが見える。

俺は・・・倒れたのか？

痛い、そして息ができない・・・。

もう・・・駄目・・・だ。

.....

暗い、暗いがどこか懐かしさを感じる。

ここは・・・水の中か？

目は開かない、しかし水の中にいるのはわかる。

暖かい、昔・・・遠い昔にこの感覚を体験したような気がする。

目も見えなく水中なのに不思議と不安は無く、心が安らぐ。

ここはどこなのだろうか？

意識がはつきりとしてきた。

やはり目は開かないし呼吸もできないが苦しさを感しない。

そこは不思議な空間だった。

とりあえず動いてみるか。

しばらく動いてみてはつきりわかったことがある。

足を伸ばし手を動かすも何かやわらかいものに包まれているようだ。

どうやらここに閉じ込められているようだ。

そっか、なぜだかわからないがここから出ないと駄目なのか。

居心地はすごく良い。

だが駄目なのだ。

もうここには居られない。

何かが、いや・・・それは本能か。

本能が俺を突き動かし、外に出ると俺の魂に訴えかけてくる。

感じたのだ、目には見えない何かを……。
どうすれば出られるのかわからない。
ただ精一杯体を動かすだけだ！

.....

「生まれました！！！」

それが俺、神山 武弘が藤堂 沙紀として生まれ、初めて聞いた人の喜びの声だった。

しかしそんな喜びも長くは続かない。

俺が（生まれた？何言ってるの？？？）と思っている間にも回りは騒然としている。

目が開かないのでまったく情報が入ってこない。

何が起こっている？なんてのんびり考えていると.....
ぐえ、息ができないいいいいい。

.....

俺が生まれてから五年たった。

生まれてすぐはなにが起こっているか解らずに目も開かない、息も出来ない。

体も動かなくてあまりの出来事に、パニックになって助けると叫ぼうにも吐き出せる気体がないのである。

もう必死。

読んで字の如く必死なのです。

「せ・・・先生、産まれた赤ん坊が息をしません！」

「すぐに気道確保！心肺は？」

なつなにやら不穏な気配が！

苦しい、なんとかしてくれよ早く！！！！

ちよっ、背中押しちゃらめえ。

「オギヤーオギヤー。」

「な、泣きました！赤ちゃんが泣きました。」

看護婦さんや先生、そしてぐったりしている母親をも涙した感動のエピソードである。

産まれてからは暫く目も開かず、2日ほど寝ては起きて口になにか入れられて、それを吸っては起きての繰り返し。

目が見えないので、辺りから聞こえてくる音を頼りに情報を集約させていく作業が、ここ最近の俺の日課になりつつある。

視覚からの情報がどれだけ大切かわかるね、本当に。

そして集めた情報を解析、分析していく。

なるほど、俺はどうやら転生したらしい。

らしいってのは視覚情報が0なので、触覚と聴覚を使つての判断である。

本当に転生というものがあるのか疑わしいが、どうやら俺は生まれたての赤ん坊のようだし……。

この目が開くようになるまではわからないかなw

そして今現在、俺はたぶん母？に抱かれながら母？と父？の会話を聞いている。

「あああああ、沙紀ちゃん生まれてきてありがとう。僕がパパだよ沙紀ちゃん！沙紀ちゃん！」

「昭彦さん！あんまりうるさくしたら、沙紀ちゃん起きちゃおうよ？」

まあ・・・。

俺は起きてるんだがね。

寝た振りをしているけど。

起きていようとするも全身がだるくてだるくて仕方が無い。

しかし転生ねえ・・・。

そんな厨二病な自体が現実で起きるのかどうか。

この2日間ずっと考えていたわけだが。

始めは夢かと思ったが、夢ではなく。

寝ても醒めても体がだるい状況は続く。

医者が父とおぼしき人物に、「一時はどうなることかと思いましたが、元気な女の子です」なんて言っているのを聞きちゃって。もう現実逃避したいです。

どうやら俺は女の子らしい。

つで俺の両親は母親が藤堂 茜

親父は藤堂 昭彦という名前です・・・。

俺は・・・俺は藤堂 沙紀という名前になったようだ。

っん？どこかで・・・どこかで聞いたことがある名前だ。

俺はこのどこかで聞いたことのある名前について思考を廻らしていると、茜さんが「この子全然泣かないし、本当にもう大丈夫なんですよ？」医師に問いただし始めたので、これはまずいと思い俺は羞恥心を捨て大きな声で・・・泣き真似を開始するのであった。

赤ちゃんはとつても大変なのである。
周囲も本人も・・・。
もう死んでしまいたいorz

- - - - -

色々あつて五歳になりました、ええ。
それは涙なくしては語れません。
むしろ語る事さえ憚られるようなry
どんと・たつち・みー！

それでもこれだけは聞いてください。
とてもとても重要な案件なのです。
もしかしたら俺はキングオブクソゲー。
そう！あのストラバのメインヒロインに転生してしまったのかもし
れないのである。

自分の名前と親の名前がもうね
そのまんま。

ストラバに出てくるキャラの名前そのまんまなのだよ。
5歳まで成長し鏡に映し出される己の姿は、紛う事なきエロゲのメ
インヒロイン。
パッケージにプリントされた美少女がそのまま幼くなった感じ。
嫌な予感がブンブンだぜ！

そして疑惑が確信に変わったのが昨日。
俺が5歳になり、親子でついに公園デビューを果たした藤堂一家。
（父親は俺をビデオカメラで撮影しに来ているだけだが・・・）
母親は若干緊張しているのか表情は硬いまま。

まあ、今まで属していなかったコミュニティに入っていくのだ。
緊張してしまうのも仕方ないことだろう。

なんて子供らしくないことを考えつつ、俺が母にお手本を見せるべく砂場で遊んでいるガキンチョ共の群れに走って行き、無事溶け込むことができた。

さあ行くのだ母上よ！

俺が突破口を開いてやったぞ、突貫するのだ。

そんな俺の姿に勇気付けられたのか、母親の方をみるとなんとかママさんの社交場に入っていったようだ。

俺のことで話が弾んでるのだろう、笑顔で遊んでいる俺とガキンチョを見ながら微笑んでいる。

まったく・・・世話の焼ける母親だな。

近くの砂場で遊んでいる子供を集めて、泥団子や砂のお城（俺流アーティスト）作ってみせる。

ははははは！すごかるう。

前世では浜辺で作った砂の王国（アラブの王族編）は、砂浜アーティストランキングでを総なめし、海外から見物客が来るほどだったからな。

ガキンチョ共はあつというまに虜になり、いつの間にか俺様ガキ大将。

ははは・・・は・・・は。

どうしてこうなったorz

砂のお城（初級編）をガキンチョ共にレクチャーし終え、ベンチで一休みしようときに離れた場所に、ガキンチョが二人ほどぽつんと遊んでいるのが目に入った。

一人はブランコ、一人は滑り台。

そんな二人はガキ大将（）である俺をちらりちらりと盗み見ている。

なるほど……集団の輪に入るのが苦手な子が、あるいはハブラれているのかな……。

おし、声をかけてみるか！

前世で天狗になっていたとき、調子に乗りすぎて周りから締め出しを食らったことがあるからな。

さすがの俺もあれはつらく、そしてきつかった。

なればこそ、ボツチにしておく訳にはいかないからな。

「おいそこのブランコと滑り台で遊んでいる幼女！こっちで最高にcoolなサクラダファミリアと一緒に建築しないか？」

って今は俺も幼女だったは（）。

滑り台とブランコからおどおどしながらこちらに歩み寄ってくる二人の幼女。

「えっと……サクラなんかは知らないんだけどいいかな？」

とポニテの幼女が俺に怯えながらも伺いを立ててくる。

まあこの年じゃあ、知らない子なんて結構怖いのもしれないし優しく優しく……。

「ああ、一緒にお城を建てよう」

俺のエンジェルスマイルは世界一いいいい。

幼女の警戒心をあつという間に取り払ってしまったのである。

さっきまでのおどおどしていた子はもう居ない！

生まれ変わったんや、そしてこの幼女はワシが育てた。

おっと変な電波を受信しちゃった

なんて一人でボケて一人で突っ込む。
この虚しさときたらorz

「僕もいいかな？」

とショートボブの少女。

おう、もう一人いたんだった。

完全に忘れてたわw

「オウ、皆で作るぜ！わからないことは俺に聞けええええ」

おうしつと。

いかんいかん、coolなサクラダファミリアは平常心でしか立て
れないのだ。

冷静になるんだ俺。

「うん」

「っという事なんで砂場に行こうか」

「う・・・うん。」

なんか・・・ショートボブが・・・。

涙ポロポロ流しながら頷いているけど、よくわからんからスルーし
て砂コネコネするお！

夕方になり皆帰りはじめる頃。

親に手を引かれて一人、また一人の人数は減っていく。

おっと、マイマザーは重役出勤すなあ。
母親がこちらに歩いてきている姿が。
もう公園は人も疎らだ。

解散だな、解散。

ビックリするほどユートピア。

サクラダファミリアの建築と、ガキンチョ共への指導に夢中になっ
ていたらいつの間にか夕方かw

「んじゃ、俺ん家の親来たから帰るな。」

砂場の子供たちに一声かけ、近くの水道で手を洗うために立ち上が
ると後ろから俺に何かが近づくと心配が。

「お・・・お名前、教えて・・・くれないかな」

「ん？ああ、まだ名乗っていなかったな。俺は藤堂 沙紀、ぴっち
びちの5才の幼女です」

「僕は、斎藤 哀歌」

とショートボブ。

「織原 有」

とポニテ。

うん、この容姿とこの顔。
今になってやっと気がついたよ。

織原 有・・・だと！

ストラバの・・・ストラバの・・・。

サブヒロインじゃねえかああああああ。

公園の邂逅から3ヶ月たった。

あれからも俺、哀歌、有で遊ぶようになり、公園の砂場で砂のお城（もう子供のお遊びではない）を作ったり、滑り台の上からスパーボールを転がしてボールレースさせたりとまったり遊んだりしていた。

公園でよく遊ぶようになってから、このよく遊ぶメンバーの間であだ名を付け合うことにした。

哀歌はあーちゃん、有はゆーちゃん。

なんで俺だけさ……さーちゃんじゃなくて、さっちゃんなんだ？
確かにストラバ本編内でも、さっちゃんって呼ばれてたけど・・・
なんか納得できない件。
まあ、いいけどな！

つで今日は哀歌の母親の提案により、有と俺は哀歌の自宅に招かれたのでほいほいとついて行ってしまっている次第であります。

先頭に哀歌ママ、有、哀歌、俺の順番でひよこひよこことアヒルの行列みたいにry

大分この女の子ボディーになれてきたのだが、まだ若干男性としての自我が残っているのか。

この女だらけの行列（うち幼女3名）の最後尾にいるわけなのだが
-----幼女をストーリーカーしている気分iorz

なんて落ち込んでいるうちに坂道に差し掛かったわけですよ。
そうしたらね、目の前の哀歌嬢が何も無い道で突然バランスを崩したわけなんだが。

「わわっわ」

ちよっ、こけるのはいいんだが何ゆえ後ろに倒れてくるんだw
人生は前進あるのみ！倒れるときも前にと坂本先生がry

「ッと」

咄嗟に抱き止めてしまったが、このくらいの年代だとやはり同年代の体重はきついもので。

登り坂ってこともあって一緒に倒れてしまった。

尻餅をついて倒れたが、ケツがいてえ。

二つに割れたんじゃないあ・・・。

ふと哀歌を見ると、項垂れまま動かない。

まさか変なところぶつけたのか？

大丈夫かと声をかけようとした瞬間、哀歌ががばりと顔を突然上げたんだ。

「む！？む(´▽`)」

当然抱きしめる形で受け止めた俺の顔があるわけで・・・。

なんぞ、なんぞ！？

俺の唇と哀歌の唇がゴツンゴ

ネジとドライバーのごとくくびったりくつついてるじゃねえかあああ。
ふう、ご馳走様です。

ナイス俺、ラッキースケベk t k r !

俺が・・・俺が主人公だ！【いいえあなたはヒロインです】（未来の自分が過去を振り返った時、消し去りたい黒歴史イベントになるのはまだ知るよしもない）

「うっ……ごめんなさい」

涙目でぺこぺこ謝る哀歌。

唇を押し付けられた形となる少女は、賢者の如く清みきった微笑みを浮かべ、哀歌に「あーちゃんと、キスしちゃったね」っと訳のわからないことをのたまうだった。

しかしその笑顔の裏では、ラッキースケベk t k r！今の俺が男だったら、フラグ立ってるじゃねえっ！？ナデポならぬ又チユポ！と邪な考えを微塵も顔に出さず、微笑みを浮かべたまま手をとって哀歌を立たせる恐ろしい幼女の姿が。

ラッキイイベントのみで終わらせる私では無いぞ！

見ておれ、まだ見ぬ新世界の魔王よ。

俺は……俺はまだ戦える。

緩みきっていた顔を引き締め、キリッとした表情に変えて。

「っであーちゃん怪我はない？」

っと聞いてみる。

するとどうだろう、あまりの俺の神々しさにぼへーと見ている哀歌が！

っていかんいかん。

いつまでもボケているわけにはいかんなw

突っ込みしてくれる人が居ないとマジ一人喜劇（・A、）

「おっおい、あーちゃん大丈夫か？」

どっか強かに打ったのか？

いやいや、俺を下敷きにしたんだから怪我はない……はずなんだがね。

(モブとはいえ、美少女！しかも主人公に絡まない美少女を、怪我などさせるつもりなどない！！只でさえ貴重な僕っ子) っ(こ
こまでは沙紀さんの脳内計算、わずか0.4秒) っ

「だ・・・大丈夫だよ。本当に！！」

「そっか、それじゃ、また転ばないように皆で手を繋いで行こっか」

「っ！！！！うん。」

「てなわけで、ゆうちゃんとお姉さん(哀歌の母です)も」

しかしエロゲの世界はすごいな。

哀歌の母親は最低でも 2歳なはずなんだが・・・中学生に見えるぞwww

うちの母親にも適用されることなんだが。

老化しないとかなにそれ怖い。

「うん」

「あらあら仲がいいのねえー。哀歌も、沙紀ちゃんと手を繋げてうれしそうだし」

やめてくれお姉さん。

この歳で百合にガチで目覚めたらどう責任とるんだよw

「かつ、母さんのバカ」

顔を真っ赤にして、ぷりぷり怒る哀歌・・・。

すごく可愛いです！

さっきのは撤回！！！！

お姉さん、いや義母さん、哀歌を俺にください。【これも未来では略】

そして哀歌の家で、トランプやおままごとをして夕食をご馳走になり、七時過ぎに哀歌の母親（お姉さん、義母どちらでも好きな方をry）が有と俺を車で輸送してもらいました。

10時くらいに見たいテレビを見終え、風呂に入り汗を流している時ふと思う。

そういえば、有とストラバ主人公のおままごと結婚式イベント。

俺と哀歌いたら起こらないんじゃないかね？とも思ったがどうせ知らないうちに会うだろう、と（主人公が来たら有が、いつヤンデレルートに突入するかわからないので、主人公が来たら、なるべく主人公に関わらないようにしよう、そうじゃないと、アパート刺身包丁エントで俺下手したらあぼんだしな。）思っている沙紀は、この時気がついてなかった。

すでにその両方に、深く関わっていることに……。

- - - - -

某掲示板でも鬼女と呼ばれているヤンデレ有ちゃん。

主人公の好感度の如何によっては、刺身包丁でめった刺しのバッドエンドが！！！！

最後まで生き残れるのか！？我らが難攻不落のヒロイン沙紀！

その上(前書き)

3/26PM4:09編集完了

それに

哀歌と有。

気の合う仲間とは本当にいいもので。

俺に二人の親友が出来てから、一年と少しの時が過ぎ、今でも一緒に遊んでいる。

住んでいる場所が田舎なので、娯楽が少なく、遊ぶ場所も少ないのでは？っと思いましたがそんなことはなく。

ある時は公園で泥だらけになるまで遊び、ある時は海や川へ冒険に出かけたりと、楽しい時間はあつというまに過ぎていく。

雨が降ればお互いの家に招いたり招かれたり。

雪が降ればずぶ濡れになるまで遊んだり。

初めのうちは保護者気分で、遊んであげているという気持ちでいたわけだが・・・。

一番張り切って先頭に立ち、はっちゃけていたのは俺ですorz
前世が都会育ちだった影響もあると思うが、自然の中で遊ぶのが楽しくて仕方ない。

なっ、なんだよ！そんな目で俺を見るんじゃない

どんな風に過ごしたのかは、興味なさそうだからこれくらいで。

蕾が芽吹く少し前の季節に驚くことがあったんだ。

聞いてほしい。

- - - - -

早くも、俺たちは小学校に入学する時期になりました。
最近の小学校は、指定の制服を着て登校するらしい。
前世の小学校は私服だったっけなあ……。

つで、制服の採寸を終えて注文もした。

後は届くのを待つだけなのだ。

しかし、小学で制服とか。

大きく成長する時期だから、頻繁に買いに行かないといけないな・
・すごく面倒臭い。

なんて考えごとをしていると、母親から声がかかる。

どうやらオヤツの時間のようです。

フヒヒ、サーセンw

すでに冷蔵庫に入っていたガトーショコラは、すでにこの腹の中で
すぜ！

冷蔵庫の中を、黒く濁った瞳で見ている母親をニヤニヤ見ていると
突然目が合う。

あれ、怒ってるの？

髪の毛が逆立ってますぜ？

ゆっくりと近寄ってくる母親に恐怖を感じる。

伸ばされた手は徐々に……………

ウワ、ハハウエ何をする。

ヤメツ……………。

……………

この1年と少しの間に、有や哀歌が我が家に泊まっていくなことも多
々あった。

もちろん俺もお泊りしにいったこともある。

そうになると一緒の布団で寝たり、一緒にお風呂に入るといったイベントが起きるのはなんら不思議ではない。

一緒に3人でお布団イベントは、とっくの昔に終わっているのだが……。

なぜか哀歌と一緒に風呂に入りたがらないのである。

それだけではない。

着替えも、俺や有は部屋で着替えるのに対し、哀歌は絶対に一緒に着替えをしないのである。

一緒にお風呂や着替えをしよう？と言ってみたのだが……。
泣いてだだをこねるのである。

「絶対に嫌だ」っと。

べっ、別にやましい気持ちなんてないからな！

ただ仲間はずれはよくないと思っただけだからな。

まあ生まれつき、体に何かあるのかもと思いつめたわけなのだが、まさか泣くほど嫌がられるとは……。

後で知ることになるのだが、事態はもっと深刻なものだった。

.....

姉さん、事件です！

入学式の前日にうちの母親主催で、哀歌と有、そして俺の制服お披露目会を開催したのだが……。

「沙紀ちゃん、そろそろ有ちゃんと哀歌ちゃん来るから着替えておいで〜」

小学の入学でこれだけ騒ぐんだ。
中学、高校はもっと騒がしくなるのかねえ。
俺は「はい」っと、気の抜けた返事を返し、自室へ着替えに戻るのだった。

俺が着替えを終えて、リビングに戻ると……そこには哀歌と哀歌の母親の姿が。

別にそれだけならば俺は、こんなにも驚きはしない……。
問題は哀歌の姿だ。

哀歌が……なぜか短パンばい制服を着て、モジモジしています。
うん、モジモジしてる哀歌も可愛ね！
って、そうじゃなくてだな！

哀歌が 男 装 しています。

その短パンの中心には、男性の象徴であるはずの膨らみが……。
俺が哀歌の姿にフリーズしていると、玄関のチャイムがなる。

遅れてやってきた有と有の母親。

親父がどうやら応対しているようだ。

リビングにやってきた有も俺と同じように、哀歌の姿を見てフリーズしてしまった。

「あ……あの、あーちゃんだよね？」

いつもは不思議キャラの有。

勇気あるなw

疑問に思ったことを口にする。

うんうん、なんとも子供らしい！

今の君は勇者に見えるよ。

「う……うん、ぼっ僕だよ」

有も・・・股間の膨らみに気がついたようで、目が釘付けに。
やはりあの膨らみは・・・。

哀歌よ、君は男装してるんじゃないやなくて・・・まさか、まさかの・・・。

「あーちゃんや、一つだけ聞いてもいいかい？」

俺の優しい問いかけに、顔が青くなっていく哀歌。

よく見れば、うつすらと目尻に涙が溜まっていくのがわかる。

「あーちゃんは、ズバリ男の子だろ！」

きつと今、俺の背後には某少年探偵のようにバーンっていう効果音がなっているに違いない。

服装見れば判るだろ、って突っ込みはなしの方向でお願いします。

うん、あれなんだ。

今までボーイッシュな子だとは思ってたんだよ！？

フリフリのフリルのついたワンピースを着こなしている、普通の美少女だと思ってたんだ。

想像してほしい。

諸君の男友達が、ある日突然女の子の格好をして自分の前に立っていたなら。

どうリアクションを取るかね？

それに加え、「実は僕、女の子なんだ」って言われたら衝撃的だろ？

うん、俺も衝撃的だった。

しかもそれが事故とはいえ、きつ・・・キスまでしてしまった相手ががが。

「う……うっうっうん」

あ、あれ。

哀歌が真っ青になって、ぶるぶる震えているジャマイカン。

「そっだよ！！僕は男の子だよ……！」

小さな手を強く握り締めているのか、ブルブルと震える拳は真っ赤になっている。

「母さんが……母さんが僕にスカートを着させてたんだ！でも初めは嫌だったんだよ？スカート着るのが」

突然叫びだした哀歌に、俺も有も啞然となるばかり。

「母さんは変じゃないよって！可愛いよって言ってくれたし、何よりこの格好だったから……さっちゃんとゆーちゃんに出会えたんだ」

正気を取り戻した俺は、泣きながら哀歌を落ち着かせようとするがそれでも止まらない。

「公園に行っても男の子にはいじめられるし、女の子の輪にも入れない……。そんな時、女の子の姿をした僕を、さっちゃんが誘ってくれたんだよ？すごくうれしかった……。夢なんじゃないのかって思うくらい！一緒に遊んで、またねって別れて。どれも初めての体験でドキドキして！」

「でもきつと、僕が男の子だってわかったら、遊んでくれなくなる

んじゃないかって落ち込んで……。今まで黙っててごめんなさい」

そして大泣きを始める哀歌。

もう色々とかオスW

哀歌のスイッチが入っちゃったよ。

テンパっているのか支離滅裂だし。

哀歌の母親から、仕切りに「美少年は女装をし王を墮とす」ってタイトルの乙女コミック進められると思ったら……。腐ってやがったのか！

どうしようか……。

俺は母親たちをチラリと盗み見る。

哀歌の母親は、親指立ててウイंकしてくるし。

うちの母親と有の母親は、ニヤニヤしている。

知ってたんだな、畜生め！

美幼女が男の娘ってわかったところでショックはショックなのだが。

急激に変わるわけではなく。

妹みたいな存在が、ただ弟に変わっただけさ！

なんだかねで哀歌可愛いし。

「あーちゃん」

とりあえず弟を慰めてやらないとな。

前世の母親がノーマルでよかった。

確実に黒歴史になる幼少期とか罰ゲームどころではないW

つと今は哀歌哀歌！

俺に声をかけられた哀歌はビクリと震える。

怯える哀歌かわゆす……。ハアハア。

じゃなくてだな！危ない危ない。

ここは一つ、ビシリと決めますか。

震える哀歌に抱きつく！

ここで、前世で飼っていたシベリアンハスキーのラッキーの死に様を思い出す。

段々と動かなくなり、老衰だがどこか幸せそうに俺の足に顎を乗せたラッキーを！

うおおおおラッキイイイイイ。

あら不思議、俺の瞳から涙がビツシリ。

「あーちゃん、うんあーくん！」

「あーくんが男の子か女の子なんて、関係ないよ？どっちでもあーくんだし。有もそうだと思うけど、あーくんだから一緒にいるんだよ？」

有も涙ボロボロ流しながら、うんうん頷いている。

チラリと母親ズを見ると、この幼い青春ドラマに涙を流しているよっだ。

ふっ、かかったな。

覚悟しな！哀歌よ。

俺のファーストキスを……。

黄金より貴重なファーストキスを盗んだ罪は重いぞ！

なにがラッキースケベだよ。

もう俺の中では立派な黒歴史……。

くそ！

これより我は修羅に入る。

上げては落とす最強の奥義を受けてみよ！

これでお前は……素晴らしいアッシー君（ ）としての生活を送ることになるだろう。

いつか来る主人公の襲来の際には、見事俺の身代わりとなって散ってくれ！

「あーくん」

哀歌が泣きながら、俺を上目遣いでみる。

くっ、かわいいじゃないか。

いかん！逝かんど、俺！！

なに考えててんだ！哀歌は男の子！男の子！男の娘！……おつと危ない危ない。

心を鬼にするんだ。

「あーくんが男の子なのはいいんだ」

でもねつと前置きをし

「事故とはいえ俺のファーストキス奪ったのはあーくん。罰として二週間に一度【つるっぱち屋】のたこ焼きを、俺がこの件を許すまですつと貢ぐこと！」

「それと俺の願いを色々聞いてくれること……。これからもずつと、いいね？」

俺は前世からたこ焼きが大好きで、関西人の友達からたこ焼きマイスターと呼ばれるほどたこ焼きが好きだった。

この世界に転生して、ついに俺はある店を見つけたのだ。

たこ焼きにつるさい俺を黙らせる最強のたこ焼き屋。

ガテン系のおんちゃん、素晴らしい手さばきで宝石のようなたこ焼きをクリエイトする姿を見たときは、「結婚してください」なんて言ってしまうほどで。

口に含んだ瞬間、世界の色が変わったね。
今の俺の小遣いでは、一週間に一度が限度なのだが……。
つるつぱち屋のたこ焼きは至高！（380円六個入り）
もし哀歌がこの提案を受け入れたら……。
いかん、今の俺はきつと恍惚な表情をしているかもしれない。

くっくくく、どうだ。

哀歌の小遣いでは、たこ焼きを買ってしまったら無一文になるだろう！

しかも、俺の許しがあるまでずっとだ。

自分で提案したが、なんて恐ろしい罰。

俺だったら脱糞ものだぞ。

さあ哀歌は、この提案を受けるか！？

にやける顔を押さえきれないが、それも仕方がないだろう。

二週間に一度のたこ焼きタイムホアアアアアアアア。

「うん！これからずっと。たこ焼きを買って来て、さっちゃんのおへ届けに行くよ。これからも、ずっとずっと！！」

ありゃ、なんで哀歌君そんなに笑顔なんですか！？

すごい嬉しそうにしてるけど。

こんな恐ろしい罰に笑顔なんて。

この子まさかDMなんじゃあ……。。

この子の将来が心配です。

必殺技のラッキーの涙【俺命名】が炸裂したからか？

女の涙……。効果は抜群だ！

しかし解せぬ。

ラッキーの涙は、哀歌を奴隷の如くこきつかうための保護者への必殺技であってなのだが。

お子様の哀歌にはあまり効果はないはずなんだけど……。

まあ、いいかw

すべては俺の計画通り。

俺は邪な笑顔をついに抑えきれず、本性を出してしまった。
仕方がないよね？

つるつぱちのたこ焼きを食べる自分を想像し、トリップ状態になっている沙紀をよそに、母親たちは怪しい相談をしていたのはまた別の話。

トリップ状態から帰ってきた沙紀は背筋に悪寒が走ったのだとか。

- - - - -

「あーくんが男の子か女の子なんて、関係ないよ？どっちでもあーくんだし。有もそうだと思っけど、あーくんだから一緒にいるんだよ？」

さっちゃんが、僕に抱きついて泣いている。

今までずつと騙してきたんだ。

大嫌いって言われると思っただ僕はとてもほっとしている。

さっちゃんの優しい抱擁は僕のモヤモヤを全部吹き飛ばして。

モヤモヤの代わりにドキドキを運んでくる。

こんな・・・こんなことなら。

僕はもつと早く打ち明けるべきだった。

同じ歳なのにとつても落ち着いてるさっちゃん。

かと思えば、三人の中で一番泥んこになつてはしゃいでたり。

言葉遣いは男の子っぽいけど、頼りになるさっちゃん。

でも・・・そんなさっちゃんを泣かしてしまっているのは僕だ・・・

ドキドキしていた気持ちも、急に冷めていく。

服装のことだってそう。

母さんに着なさいって言われたりしたけど、僕が嫌だって言えば無理やり着せられることは、今まで一度もなかったんだ。

わかってるんだ。

男の子の輪にも女の子の輪にも入っていけなかったのは、自信の無い僕が原因で。

さっちゃんと出会う少し前だってそう。

僕をいじめる男の子が居ない公園に遊びに行った時だった。

公園には女の子ばかりで男の子は一人もいなかった。

それで・・・それで僕は女装して近寄ってみた。

仲間に入れてもらえるんじゃないかと。

淡い期待は粉々にされてしまったけど。

結局、誰からも相手にされなくて・・・。

それでも、遊んでいる子たちの中に一人だけ男の子だと、仲間に入れて貰えないような気がしたから。【エロゲの法則っぽい補正は働いてないが運悪く哀歌の周りは女の子ばかりでした】

また女装して公園に行った時、さっちゃんとゆーちゃんに出会ったのは。

一人ぼつちの僕に声をかけてくれた時のこと、今でも忘れてないよ。女装は確かに母さんの影響もあるけど・・・。

全部、僕の打算的な考えだったんだ。

それすらも母さんのせいにして！

僕・・・本当に汚いや。

そんな汚い僕に、さっちゃんは微笑みながらこう言ったんだ。

「事故とはいえ俺のファーストキス奪ったのはあーくん。罰として

二週間に一度【つるっぱち屋】のたこ焼きを、俺がこの件を許すま
でずっと貢ぐこと!」

「それと俺の願いを色々聞いてくれること……。これからもず
っと、いいね?」

この世界に天使なんていないと思っていた。
でも今僕の前に確かに天使がいる。

胸が壊れたように凄くドキドキして。

体の真ん中がすごく熱いや。

どうしたんだる僕。

さっちゃんから目が離せない。

ボーっとしてた僕はさっちゃんがこちらを覗き込んでいることに気
がついた。

あわわ、早く返事返さないよ。

「うん!これからずっと。たこ焼きを買って来て、さっちゃん之所
へ届けに行くよ。これからも、ずっとずっと!」

僕の返事を聞いたさっちゃんは、これまでにない最高の笑顔を見せ
て僕の頭を撫でてくれる。

さっちゃん、さっちゃん、さっちゃん、さっちゃん!……!

僕がずっと届けるから。

僕がずっとお願いを聞くから。

これからも僕のそばに居て!

そう、これからもずっとずっと……。

ほんの・・・ほんの少しだけ、哀歌にヤンデレの素養がry。
哀歌はマジ天使。

- - - - -

「ありやま、こりや哀歌は沙紀ちゃんにメロメロね」

「青春よねえ・・・。うちの有ちゃんには、チャンスはあるのかしら？」

「あるんじゃない？まだ皆若いんだし」

そのさん

哀歌男の娘事件から5年経過し。

あれからたいしたイベントも起こらずに、穏やかな時が過ぎていった。

俺の身長も伸び、157センチとこの歳にしては、結構大きいほうだと思う。

有と哀歌は150センチに届くか届かないかといったところか。有には抜かれることはわかっている。

ゲームの公式設定だと、有は173センチまで伸びることが確約されている。

しかし俺もこんなくだらないデータを覚えているとはW
残念ながら俺の成長限界は157センチ……。

うん、あと7センチしか伸びません（・A・）

でもいいんだ。

藤堂 沙紀になった俺には、他の女子がそろそろ悩み始める重要案件。

特に二次成長に訪れる女の子の悩み。

これが大きいか小さいかで人生は左右されるといってもいい！

そう、うれしいのか悲しいのかはわからないがね。

俺は将来口リ巨乳に必ずなるのだ。

未だに断崖絶壁なんだけど、これ本当に大きくなるのか？

あまりにも大きくなりすぎたら、運動するときに支障をきたすかもしれないが……。

そうそう、最近の俺はもう完璧な女の子になりました。

心もね。

女であることにまったく違和感を感じない件。

言葉遣いだけはもう癖になってて直せないのだけれど。

今なら男相手にドキドキしたり、好きになったりするかもしれん。

っが、エロゲ主人公！

てめえだけは絶対ダメだ。

男なんて一皮剥けば、獣だってわかってるんだよ？

前世では俺もそうだったしね。

でもさ、エロゲ主人公は獣じゃない。

獣の皮を被ったナニカだ！

近寄っただけで、妊娠させられそうなオーラを出しているに違いない。

そうだ、そうに違いない。

相手が女だったらなんでもいい！って感じのハーレム野郎は抹殺対象です。

もし、もしもだが。

俺が男と付き合う時が来るならば、相手は誠実でイケメンでお金持ちで優しくてe t c e t c e t c.

- - - - -

もう少しで小学校の卒業式。

お別れ会なるものを在校生＋卒業する生徒が毎年開いて、演劇や合唱や演奏を披露するわけなのだが。

哀歌、また今年も演劇でヒロインを演じるんだな……。

哀歌の演じるヒロインは板につきすぎていてもうビックリだね。

4年生の時の哀歌演じるシンデレラが、あんまりにも似合いですぎていて一般の見学に来ている方や、保護者一同が劇が終わった後涙を流していたくらいだ。

その後ろでは、2年の時从今年来ている腐ったお姉さん連中が

(哀歌の母が、いいBLの創作物のネタになると同土に情報を流した)

「哀歌×王子」「いやいや、王子×哀歌だろJK」「ツンデレ王子総受けハアハア」とか言っているのは、かなりシニールだった。

今年の劇はシェイクスピア系ですか。

またマニアックな・・・。

小学生がやる演目じゃないだろWWW

劇の演目を決めている担任教師に一言言ってやりたい。

何ゆえ、お前がヒロインをいつも指名するんだ！

完全に趣味の領域です。

本当にありがとうございました。

お別れ会が終わって、その一週間後の卒業式も無事終了しました。長かったようで短かった6年間だったな。

小学校の前にあるクソ長い坂道はもう二度と見たくありません。

そうそう、俺は有や哀歌とは別の中学に行くことにしました。

有と哀歌は県立の中学へ。

俺は家から電車で1時間の私立中学に行くことになった。

えっ？同じ中学に行かないのだった？

またまた〜、ご冗談を()。

有と同じ中学に主人公と同じ学校になるわけだから。

俺、メインヒロイン()だよ？

同じ中学でフラグなんて立てちまったら貞操の危機だよ？

確か主人公が中学2年のときに、一個上のクールビューティーな先輩を無理やり襲い、逆に返り討ちうちされた描写もあったし・・・。

ルートによって違うんだろつが危険だしな。
君子危うきに近寄らずですよ。

そんなわけで、俺は親に頼んで頼み込んで隣街にある私立中学を受験したわけなんだが。

親の出した条件は、特待生としていけるなら可。

まあ、わかりますよ。

家では哀歌たちと遊んでいるとき以外、ごろごろ漫画読んでるかネツトゲーしているだけだったし。

そんなやつがいきなり偏差値高い私立中に行きたいって言い出したんだ。

勉強もしない怠けものに、発破をかけるチャンスと取ったんだろう。知っている事ばかりだったから、つまらないので勉強しなかっただけなんだけど……。

無理ならこの街の中学ってことになって、俺は転生してから初めて前世の知識を総動員してテストに望んだ。

ふふふ。

これで確実に特待生として入学できるだろう。

前世で 大を主席で卒業した俺の敵ではないわ W W W W

- - - - -

違う中学に行くことを有と哀歌に言った時、一悶着あったのはいうまでもない。

なんたって、二人には内緒にしてたしね。

なんで別の中学に色々理由を聞かれたりしたが、事前に用意してた理由を述べ納得してもらおうとしたのだが……。

そう簡単に納得してくれるはずもなく。

哀歌がピーピーと騒ぐのですよ。

「さっちゃん・・・僕のこと嫌いになったの？」

「違うっつての。まあ、色々あるんだ」

「やっぱり僕のことr y」

さすがに「エロゲ主人公が同じ学校に来るからです」.....な
んて口が裂けてもいえないしな。

今まで黙っていたことにも含めて。

二人はすごい怒っているし、どうすっかなあ。

涙目の哀歌をなだめて、がんばって3時間かけて説得しました。
もうなんか色々と疲れたよorz

.....

今は春休み。

学生って本当にすばらしいね。

親に飯食わせてもらって、しかもお小遣い付き。

こんなに自由な時間があっつていいのだろうか.....。

前世で会社を立ち上げたときは、本当にしんどかった。

飯を食う時間もあまりなく、下げたくない頭もいっぱい下げて.....

軌道に乗るまでは金もあまりなく.....。

そんな俺だからこそ、今のこの自由な時間がとても素晴らしく感じ
られるのだが。

よし今日は何するかなあ。

.....

俺たち三人組は春休みの間、今まで以上に濃い時間を過ごしたと思う。

一緒に買い物に出かけて、中学で必要になりそうなものを買いつけたり。

3人でお揃いの携帯を買いに行ったり。

つるつぱちでたこ焼きを食べながら、店主をからかったり。

公園で咲き始めた桜の花を眺めたり。

そんな平和な時間を過ごしていたのだが……。

姉さん、またもや事件です。

携帯を手に入れた哀歌が、暇さえあればメールしてくるのです。始めは一日に20通ぐらいだったんだ。

そう、「だった」。

うん、過去形なんだ。

携帯を手に入れて、「これでいつでも連絡取れるね」ってすごい良い笑顔の哀歌。

なぜか異常にテンションが高いが、どうしたんだか……。

俺はメールより電話派で、ボタンをポチポチ押すより、さっさと電話をかけて用件を伝えるのが好きなのだが。

哀歌が頻繁にメールを送ってくるのに対し、あまり返信を送らなかつた。

5通着たら1通返す感じで。

だってさ、「今日、お茶飲んでいたら茶柱が立った！」って送られてきても返しようにもないじゃんw？

つで「遊ぼう」とかはきちんと返信してたんだ。

一緒に携帯を買いに行ってから一週間後。

事件はついに起きた。

久々に俺は徹夜でオンラインゲームを堪能し、夕方に目を覚ました。

前日に有と哀歌に連れまわされ、しかも徹夜のネットゲー。そして夕方に目を覚ます、だらけた生活。

春休みこそ、有意義に過ごす！って自分で決めたマイルールは、早くも終わりを迎えたようです。

ふあああ〜と大きなあくびを一つ。

首筋をボリボリと搔きつつ洗面所を目指す。

もう夕方か・・・今日は何すっかなあ。

顔を洗って歯を磨き、パンをトースターにねじ込み考える。

パンが焼ける間、暇なのでテレビをつけるとアナウンサーが今日の出来事を淡々と語っていく。

どここの教師が生徒に手を出したとか、大物政治家が盗撮の容疑で捕まったとか。

どうでもいいニュースを聞き流していると、チーンと甲高い音がなる。

おし、焼けた焼けた！

カリカリに焼けたトーストにバターとジャムをさつと塗り、低脂肪牛乳をコップに注いで自室に戻る。

牛乳を飲みながら携帯に目をやる。

あれ？そういえば、俺目覚ましかけてなかったっけ？

確か昼くらいに起きるつもりだったので、タイマーをセットしておいたんだが・・・。

携帯を手元に引き寄せ開いてみると、画面は真っ暗。

あらら、携帯の電池が切れていたのか。

いそいそと充電器のコネクタを携帯に接続し、電源を入れると新着メール52件・・・。

つて、なんじゃこりゃあ！

メールボックスを開き、内容を見ると哀歌からのメールだ。

「遊ぼう」だの、「今なにをしているの」だの、「返事してよ」など

など大量のメールだった。

俺はそのメールを見て苦笑する。

もう中学生なのに仕方のない奴め。

ふー、こんなにメール着てたら電池も切れるよな。

電池のマークが残り一本だったし。

ため息をつき哀歌に寝ていた、悪いと返信しようとしたときだった。

ブブブつと携帯がバイブする。

おいおいw

またメールかよ。

しかも読み込みが長い。

ずっとセンター問い合わせになってるぞ。

二分ほど待ってもまだセンター問い合わせ中。

.....

携帯がフリーズしちまったw

どうなってるんだよ！

PCでもないのにフリーズとかもうね.....

不良品だったのかorz

とりあえずトーストをかじり牛乳を飲みながら待つ。

ひたすら待つ、待つ、待つ。

お、やっと終わったようだ。

携帯が振るえ、受信ボックスを見ると.....

新着メール81件.....ちよw

81件つてwww

センターに81件も溜まってたのか。

そりゃあ、フリーズするわな。

あまりの出来事に、牛乳を口と鼻から吹いてしまった。

クソ、鼻がツーンとする。.....(ノ、).....

牛乳を拭いてしまった俺はどこも悪くないと思っんだ。

メール欄の送信者の欄に 斎藤 哀歌 斎藤 哀歌 斎藤 哀歌 斎藤 哀歌

斎藤 哀歌 斎藤 哀歌・・・・。
あの野郎・・・。
覚えていろよ！！！！！！！

後日、哀歌にあつたときにOHANASHIしました。
ええ、もちろん肉体言語でな！！！！

そのよん

中学校の入学式の四日前に、学校側から手紙が届いた。なんか不具合でもあったのか？
こんな直前に手紙が俺宛で届くなんて……。
不吉な予感がぶんぶんするぞw

特待生としての合格通知は、結構前に届いている。なのでなんの手紙か、不思議に思いつつ開封する。

「ふむふむ」

なんでも入試試験の結果が、過去に例をみない高得点だったようだ。四科目A-L満点とか、やりすぎたかもしれん。

中学試験のくせに高校の模試レベルはあったからな。

学校側はそんな俺に目をつけ、新入生代表挨拶の要請をしてきたわけか。

入試試験は特待生にならなければと必死だったので、後のことを考えずに全力を出してしまったから。

まあいいか……。

面倒ごとに変わりはないけど仕方がないか。

天敵（主人公）エンカウトフラグを叩きつぶした代償と考えるべきだ。

手紙と一緒に添えられていた、新入生代表挨拶の内容を読んでため息を吐く。

心身ともに清く、正しく、美しくねえ……。

こんなの読まされるとか、結構な罰ゲームじゃね？

これ考えたやつ、大勢の人の前で読んでみるよwww
俺は嫌だね、もうなんでこんな厄介ごとばかりが……。

そつぶつくさ言いながらも、藤堂 沙紀は義理固いやつなので、四日後の入学式のための練習を暗い気持ちになりつつ始めるのであった。

そして、四日後の入学式の当日。

ぱらぱらと雨が降る中、傘を差して駅から両親とともに中学校に向かう。

車で向かってよかったのだが、母親に却下された。

「これから電車で通うんだから、慣れておいたほうがいいでしょうのこと。」

はぁ……。

本当はあと20分早く中学校に到着して、代表挨拶のカンペを見ておきたかったんだが。

バカ親父のせいで、結構時間いっぱいばいなのでできそうにないな。

出発する前の藤堂家

「ほぁぁぁぁぁ。沙紀ちゃん、こっち向いて。そつそつ、はい！」

笑って。スマイルスマイル。うっはマジでいいわ、ベリーキューリート。ハアハア、制服モードでお父さんの心を征服するとはやるん」ガラガラ、茜さんがログインしました。

「昭彦さん……ナニをしようとしてるんですか？」

「げええ、茜！ぶべらっ」

昭彦さんがログアウトしました。

生理的嫌悪感を感じる笑顔を浮かべて、親父が俺を机の影からこそこ隠れてビデオ撮影していた。

そこに化粧を終えてリビングに来た母親から、強烈なレバーブローをプレゼントされて天に召されてしまった。

親父が天に召されている15分間は、どれだけ揺すったり叩いたりしても起きることはなかった。

そのせいで出発時間が少し遅れてしまったのだ。

起こすために鳩尾に踵落としを食らわせたんだが……。

ピクピクするだけで起き上がることはなかった。

もう……親父の寝ぼすけさんめ

起きないんならもう一発いいよね？

しかしあの親父の俺への接し方。

小5の辺りから、俺を見る視線やボディータッチが段々といやらしさを増してきているように感じるんだが……。

気のせいだよな？

ただ、ただ愛されているだけ！

愛されてるな、俺。

娘として・・・愛されてるんだよな？

まさかくつろげる我が家で、貞操の危機に陥るようなことはないよな？

うん、絶対ない。

無いと信じたい。

なんて考えていると中学校の門が見えてくる。

へえ、結構大きい学校なんだな。

開校から25年経っているようには見えない真新しさを感じる。

学校の敷地内に入り、受付を済ませる。

その後案内役の教員に先導されながら団体さんについていき両親と別れ、体育館に入り指定された席に座る。

辺りを見渡してみると、周りでは小学校の頃からの知り合いと話しているやつが結構いるようだ。

ザワザワとやかましい体育館で誰とも話さずに一人寂しく座る俺。

ちよつと疎外感を感じるな・・・。

隣町から来てるやつなんて俺ぐらいだろうし。

知ってるやつなんて一人もいねえよ。

なんて軽く凹んでいると、どうやら式が始まるらしい。

司会役の教員が、話し込んでいる保護者や新入生にマイクを使って

「お静かにお願いします」と注意を促している。

入学式が始まり、校長が恐ろしいほど長ったらしい挨拶を始めて、PTA会長、市長などの電報などトントン拍子で入学式は進行していく。

そろそろ俺の出番か・・・。

そう考えると緊張してくる。

「続きまして、新入生代表挨拶です。新入生代表・・・藤堂 沙紀さんお願いします。新入生全員、起立」

おおう、ついにこのときが来ちまったよ。

あんなシラフでは読めない文をこんな大勢の前で、今から読まなければいけないとかもうね……。

清く、正しく、美しく！キリッ！つとか無理あるぞw

新入生全員が席を立ち、俺は床に敷かれたレッドカーペットもどきの上を歩いて壇上に向かう。

OH、緊張のせいで体がガチガチだぜ。

背筋はロボットのように直角だし、歩き方も絶対変になってるよ。皆の視線を感じるぞおお。

後ろのほうでなぜか「おおお」って感嘆の声が上がっている。

何が起きてるのか知らないが、後ろを振り向くわけにはいかず。

絶賛ロボット歩き続行中であります。

悔しい！

なんで俺が、こんなにがんばらなきゃいけないんだよ。

くっそ、今度の休みの日にでも、自分へのご褒美（）が必要だな。

哀歌をお願いしてエトワールのマロンケーキ（450円）を5個ほどおごってもらうことにしよう。

うん、そうしよう。

そうでもしなきゃ、このやりきれない思いは報われない！

ついに壇上に到着した。

座席から壇上まで20メートルも無いはずなんだが、ハーフマラソン並みの距離に感じたわw

俺は用意されているマイクの角度を合わせ、お辞儀をし挨拶を始める。

「新入生を代表して、ひとこと、ごあいさつを申し上げます。本日は、私たち新入生のために、このような盛大な入学式を挙行してい

ただき、厚くお礼申し上げます。私たち新入生一同は、勉強だけでなく、スポーツや行事、様々なことに全力であたり、己の心を鍛え、苦楽を共にし、心身ともに清く、正しく、美しく、学生としての本分を忘れずに、学生としての分を弁えて生活していくことをここに誓います。新入生代表、藤堂 沙紀」

言ったぞ、言つてやったぞ！

頬に急速に集まっていく熱。

俺、家に帰ったらマロンケーキと結婚するんだ……。

一人でくだらないフラグを立てている間にも、式は進行しているようである。

俺はお辞儀をし、司会役の言葉を待つ。

「藤堂 沙紀さん、素晴らしい挨拶ありがとうございます。一同、礼！」

ふう……。危なかったぜ。

読んでいる最中に笑ってしまいそうになった。

清く正しく美しくのくだりは、俺にとっては鬼門だったんだよなあ。

練習のときに声に出すと、なぜか俺の笑いのツボにジャストミートして笑ってしまったものさ。

本番で笑ってしまったらどうしようと思ったがなんとかあったな。

実は今でも、吹いてしまいそうなんだがなwww

きつと今の俺の顔はキリツとした顔になってるんだろうな。

緊張も忘れて笑い出してしまいそうなのを我慢してるわけなんだが……。

今日だけでかなり顔の筋肉が鍛えられた気がする。

よし、さっさと席に戻るか。

なんて・・・なんて美しい人なんだ。

私を差し置いて代表に選ばれるなど、どんな不届者かと思ったが・・・。

彼女なら選ばれるのも無理はない。

美しい顔はもちろんのこと、壇上に歩いていくときのピンと一本、芯が入っているような姿勢。

まったくぶれない重心。

そして、それらすら霞んでしまうような立ち上るオーラ。

彼女が壇上に歩いていく姿は、さながら戦国武将の一騎打ちに赴く武者を幻視させる。

威風堂々。

この言葉こそ彼女にふさわしい。

周りの生徒も、嫌、保護者や教員も彼女の圧倒的なオーラに飲まれて目が離せないでいる。

誰かが深く息を吐いている。

それは私なのか、それとも他人か。

息をするのも忘れて彼女に見入ってしまったているのだ。

無理もない。

そして、壇上で凜々しい顔で代表挨拶をする姿。

パーフェクトだ・・・。

まさしく私にふさわしい相手じゃないか!!!

式が終わり次第、声をかけてみよう。

.....

ふう・・・式も終わってやっと解散だよ。

さっさと親と合流して飯でも食いに行くか。

緊張してお腹ぺこぺこだよ。
待ち合わせの校門に向けて歩いていく途中に、後ろからいきなり腕を引っ張られてこけそうになる。

「君、ちょっとだけお時間を私に出来ないか？」

いきなりのことに「はうあ」と情けない声が出してしまった。
もう！なんだよ一体。

後ろを振り返ると、ダークブラウンの髪の毛のやけに気障ったらしい男が、俺の腕を掴んだまま突っ立っていた。

この野郎……。

さっさと飯に行きたいのに、なんの用だよ！

「手、離せよ。いつまで握ってんだよ！」

目と目が合わさり、なにも話しかけてこない男に苛立ちを感じ、手を強引に振り払い俺は踵を返して校門に向かおうとする。

「まつ、待つてくれ。少しだけ、少しだけでいいから私の話を聞いてくれないか！」

俺は足を止め、再度振り返ってまた男と向き合う。

「なんだ？用件を早く言え。ナンパとかならぶん殴るからな。」

ええい。

せっかく足を止めて用件を聞いてやってるのに……。
顔を赤くしたり青くしたりで本題を切り出してこない。

「わ……私の名前は本郷 武！君を私専属の女王様に指名したい。」

なつてくれませんかk」なんとおおおお「あべしっ」

なんで・・・なんでお前がここにいる。ストラバ主人公のライバル！
本郷 武は、主人公と同じ中学だったはずだ。

有たちの通う予定の（沙紀の中学の方が一日、入学式が早かったの
で、まだ有たちは入学していない）県立山王中学に行かずに、なぜ
ここにいるんだよ！

混乱のあまり、ついつい武のボディに会心の一撃をいれてしまっ
た。

崩れ落ちた武を放置して、俺は放心しながら両親の元へ向かった。
まさか・・・まさかいるんじゃないだろうな！主人公ううううう。

まだ見ぬ主人公に恐怖を覚えた俺は、ついつい回らない寿司屋で大
量に食べてしまった。

帰り道。

空っぽの財布をポケットに収めて、とぼとぼと泣きながら歩く親父
の姿は、どこか哀愁が漂っていたように思える。

「哀歌の好感度が一定以上に達したため、武が出現したようです。

主人公（哀歌）は同じ学校にはいません、あしからず」

その1

あの入学式からもうすでに二週間。

始めの三日間ほどは、クラスの皆はそわそわして、慣れてない環境と空気に戸惑っていたようだが、一週間ほど経ったころには慣れてきたのだろう。

仲良しグループができていたり、教室の片隅で趣味や小学校のころの黒歴史などに華を咲かせている生徒が目に入るようになってきた。俺も、隣の席の竹中 椿と仲良くなり一緒に行動している。

椿も俺と一緒に、離れた小学校から来たらしく、まったく知り合いがいなかったそうなの。

椿はすぐ垢抜けていて、このクラスの女子とじゃあ、ちょっとウマが合わないだろうとは思っていたのだが。

そんなこともなく、ほかのグループの子とも普通に話していて、俺もそれに乗っかって交友を広げていった。

俺のクラスの1年4組は、所謂特進クラスなので、卒業するまで三年間クラス替えがないのである。

友達……できてよかった、本当に。三年間ソロとか本当に無理です！

- - - - -

入学式の邂逅から、俺は武にロックオンされているようです。なぜか武に毎朝会うんだ。

いや、会って表現は違う。

うん、やっぱり違うわ。

待ち伏せされている！が正しい表現だな。

駅から出て学校に向かう途中に、三叉に道が分かれた場所があるんだ。

これ以降は三叉路と呼ぶ。俺命名！！！！

その三叉路を俺が通りかかると、HRまで20分は余裕があるはずなのに、パンを銜えた武がすごいスピードで「遅刻！遅刻！」とパンを銜えたまま俺に突っ込んでくるのだ。

こいつ……狙ってやっているな、絶対。

ラブコメ的展開を狙ってやがるなあああ！！！！！！

なになが遅刻だよw

こっから学校まで歩いても2分かからねえだろうが！

それに気がついた俺は、ヒラリと回避した。

ドドドドドと効果音でもつけていいほどの速度で横を通過していく。

猪かよお前w

武はそのまま電柱に激突し、カバンの中身をぶちまけて強かに打った顔を抑えて転げ回り悶えている。

しばらく転げまわった後に、キリッとした顔で立ち上がりぶちまけたカバンの中身をさっさと回収して去っていった。

ふと見ると、電柱の裏になにか落ちていた。

武の落し物かな？

覗いて見ると、二十年ほど昔に創刊されたであろう少女コミックが落ちていた。

タイトルは「恋の三角関係、出会いは突然編」と書かれている。

拾い上げてパラパラと流し読んでみると、どうやら主人公（女の子）がパンを銜えて学校に向かっている途中に、ツンデレなイケメンにぶつかることから恋が始まるストーリーのようだ。

あいつ……コミックの通りに行動してやがったのか……

俺はそれを見なかったことにして、そのまま学校に向かった。
もちろんコミックは電柱の横にお供えしておきました。
散歩中の犬が小便でも引つ掛けておいてくれるだろうよ。

それが始めての、朝の通学路でのイベントであった。

朝のイベントから一週間、毎朝武がパンを銜えて俺に突撃してくるのだ。

懲りない奴だなwww

始めは体をひねって回避していたのだが、毎回毎回来るので回避するの億劫になってくる。

なので突撃してきたら、出会い頭に顔面に回し蹴りを決めてやっている。

つで今日も今日とて、武が突撃してきて回し蹴りを決める。

本当にお疲れ様、俺。

蹴られた後に、悶えながら「ありがとうございます!!!」って大声で叫ぶんだよ。

もうやだこいつ。

周りにいる登校中の生徒はヒソヒソ話しているし……。

一緒に登校し始めた椿の生暖かい視線がづらい。

「仲……すごくいいんだね!」

って言われた俺は、ついに動く決意をする。

もう我慢できないでござる。

.....

次の日、いつもより一本早い電車に乗り込み、駅に到着。

三叉路へ歩きながら椿に、「今日は一緒に登校できない」とメール

をうち、三叉路の死角に隠れる。
まだ朝も早いので、ひんやりした心地良い空気が俺の体を包んでい
る。

三叉路に到着してから五分ほど時間が経過しただろうか。
おっ、武がやってきやがった。

こ……こいつ。

こんな早い時間からいつも待ち伏せをしていたのか！？

その情熱を別のところに使えよな！

やっぱりこいつはただの変態じゃない、ドの付く変態だわ。

あれ、いつもみたいにパンを銜えてないぞ？

っと思っていると、やつはいつも待ち伏せしているであろう定位置
？につき、流れるような動作でカバンから食パンを出しマーガリン
を塗っている。

もちろん、道の真ん中でだ。

なんだろう……頭がすごく痛くなってきた。

マーガリンを塗り終えて、武は頬を3回ほどピシピシ叩き、気合を
入れている。

手揚げカバンを脇の間に挟み、パンを口に銜えてクラウチングスタ
ートの構えを取る。

ちよwwww

いつもすごいスピードで突っ込んでくるのは知ってたが、さすがに
これはねえよ。

クラウチングスタートの体勢を維持したまま10分が経過。

通行人の人たちにすごい見られているよ。

そりゃあ目が行っちゃうよな。

道路のど真ん中でパン銜えたままクラウチングスタートの構え。

すごい見られている武はというと、まったく気にするそぶりすら見
せない。

本当に残念なイケメンである。

ゴミ出しに来ているおばちゃんたちが、武を指さしてヒソヒソ話し

ているよ。

二分経過

さて、今は人とおりも少なくなってきたし。

そろそろ武に引導を渡してやるか。

お前はよくがんばったと思うよ？

でもね、君のそのがんばりはね。

俺にとつたらすごく迷惑なわけ。

だから、だから。

二週間分の恨みを今ここで晴らしてくれる！

俺は、武の背後に気配を消して、そろりそろりと近づいていく。

愚か者の武は、眼前を鋭い目で睨んでいる。

ふふふ、俺が来るのを待っているんだろうなwww

後ろに居ますぜ！おやっさん。

あと・・・メートル・・・。

よしよし、まったく気がついてないな。

せーの・・・

武の耳元に顔を近づけて「ワッ」っと大きな声を出してやる。

完全に不意打ちが決まったな！

ビクビクビクつと海老ぞりになる武。

電柱の上にはいたカラスが慌てて空中に舞い上がる。

それと同時に武は「もげらー」と叫び泡を吹いて気絶してしまったようだ。

道の真ん中で気絶している武を放置して、俺はゆっくり学校に向かった。

ザマーw

おっと、驚かせてしまったカラスさんにご褒美だ。

武が銜えていたパンを粉々にして武の体に満遍なく塗してやる。

けけけけ、カラスに突かれるがいいわWWW

- - - - -

中学校のお昼休み

「沙紀ちゃん、今日武君休みみたいだけど、どうしたの？」

「なんで俺に聞くなあ……。まあきつと死神に囁かれて地獄に連れて行かれたんだろう」

「????？」

「あと黒いハンターにも狙われているかもしれないなw」

その次の日から、三叉路で武の姿を見ることはなかった。

そのろく

待ちに待った、5月連休。

ああ、ワクワクするなあ。

前世で趣味だったサーフフィッシング（所謂投げ釣り）に出かけようと、連休前からネットで近場にある砂浜を探していたのだ。

家から徒歩で15分ほどの場所にあるようだ。

添付されている写真を見ると、砂浜にゴミなどが落ちていることもなく、トイレに水道、売店と設備も充実している。

海水浴場のような場所は前から知っていたのだが、そんな場所は空き缶などのゴミなどが多く捨てられていたりするので除外した。

朝、6時半に起きて準備を始める。

クーラーボックスに氷を積み、手早く作った三人分の弁当とペットボトルをカバンにねじ込む。

えっ、なんで三人分も作ったのかって？

連休前に哀歌と有が、連休の予定を聞いてきたので「連休初日は釣りに行くから、その日以外なら予定はないぞ」と伝えると、哀歌が「なら僕も一緒に行く！」と言い出して駄々をこねる。

有も小声で「あーくんが行くなら私も……。それにさっちゃんと二人きりには……。」「となにやらブツブツ言っている。

断っても……。どうせこっさりついてきそうだな。

結局、3人で一緒に行くことにした。

はあ……。久々の釣りだったので、本当は一人でまったりと楽しみたかったのだが。

8時に、俺たちの出会った公園に集合と決めていたが、十分前に俺

は公園に到着した。

俺は何事も、早めに行動するタイプの人間なのである。

まだ二人とも来ていないだろうなと思いつつ公園を覗くと、公園のベンチに座っている二人が見える。

おうおう、俺より早く来るとは良い心がけだ。ほめて遣わす！

「おはよう、二人とも早いな。」

二人に挨拶しつつ、ベンチに腰掛ける。

「おはよう、さっちゃん！すごくいい天気だね」

今日も朝からテンション全開ですね、哀歌さん。

「おはよ〜」

つとばやばやした雰囲気です挨拶する有。有さんや・・・これから釣りにいくんだよ？何ゆえ純白のワンピースを着てきたんだ。

いや、すごい似合ってるからいいんだよ？その麦藁帽子もすごくいいと思うけどさ、本当にその格好で釣りするの？デートに行くわけじゃないんだから・・・ね。

俺なんて、某球団のキャップに上下ジャージだよ。

「よし、全員集合したし少し早いけど出発するか」

俺たちは海に到着するまでの間、お互いの近況報告をする。

有と哀歌は別々のクラスになったんだとか。

俺はふと、主人公の存在を思い出し、有にそれとなく探りをいれる。

「ゆーちゃん、ゆーちゃんのクラスにはかっこいい男子とかいないの？気になる男の子とか」

主人公が、かっこいいかどうかはわからないが、有が心惹かれる男がいたらそいつが怪しい。限りなく黒に近いグレーだ！

「む〜、特にいないかなあ・・・。そんなこと聞くさっちゃんはどっちなのか？」

おろ、質問に質問で返されちゃったよ。

「まあ、いることはいるんだが・・・。かなり変わった奴なら一人いる」

あれを、かっこいいのジャンルに入れていいのかどうか、悩むとこ

るだな。武だし。

顔だけは・・・顔だけは間違はなく美少年だしな。

天は二物を与えずって言うけど、イケメンでお金持ちで優秀・・・
。だがあいつは、三つ目まで与えられているからな。

ドの付く変態属性を。それがすべてを台無しにしている。

浜辺に到着し、仕掛けの準備を始める。

有も哀歌も初心者なので仕掛けを作ってやり、ゴカイのつけ方（変なつけ方をすると遠投した際に餌が外れてしまう）をレクチャーした後に、投げ方の見本を見せる。

うっは、テンション上がってきた。

サーフフィッシングの醍醐味は、広い母なる海に向かって、仕掛けを飛ばすときだと思うんだ。

ブオンっと音を立てて竿を振るい、仕掛けを飛ばす。

うん、腕は鈍ってないようだ。ジェット天秤が40mほど飛んだ辺りで失速し着水する。

哀歌も俺のやり方を見て、やり方を理解したのか仕掛けを飛ばす。しかし、20mも飛ばなかった。まあ、初めてにしては上出来だと思っ。

「さっちゃんはずごいね、僕じゃあとてもじゃないけど、あんなに飛ばせそうにないや」なんて笑顔で言ってくる。

よせやい・・・照れるじゃねえか。

俺と哀歌のやり取りを見ていた有が、なぜか禍々しいオーラを出しはじめて投げる体勢に入った。

ブンやブオンなどの音ではなく、リユンと竿から空気を切り裂く音と共に仕掛けが飛んでいく。

ちよ、なんでそんなに飛ぶんだよ。

着水地点を見ると、軽く150mを超えている。

物理の法則を無視した遠投を目の当たりにした俺は、竿を落としそ

うになった。

有も哀歌も俺も、釣具店で売っている竿とリールがセットになって3000円ポツキリのちよい投げ装備だ。

子供のおもちゃみたいなタックルで、飛ばせる距離であるはずもなく。

つてか、150mも飛ばしたら確実に世界新記録だろ。

ドヤ顔で哀歌を見る有、しかし哀歌は俺に釘付けで有の方をまったく見ていなかった。

シヨボンつとした顔になる有、褒めてほしかったんだな・・・有よ。

禍々しいを通りこして、空間が軋みだすようなオーラを噴出している有のそばにいるのがつらくて、二人から少し離れた場所に陣取り、釣りを再開する。

おっ、あたりだ！

竿先にコツコツと小気味いい振動が伝わってくる。

今だ！俺は魚が、針を飲み込んだであろうタイミングを見計らって、竿を大きく上げる。

YES！HITだぜ。

俺はあせらずに、ある一定の速度でリールを巻いていく。

早く巻きすぎると魚の唇が切れてしまっし、遅く巻きすぎると糸がたるんで針が外れてばらしてしまうので、遅くもなく早くもなく、逸る気持ちを抑えて一定の速度で。

「フィツシュオン！！！」

おおお、シロギスが二匹付いている。幸先がいいな！

有と哀歌の側に置いてあるクーラーボックスに魚を入れに行く。

哀歌がシロギスを見て、「さすがさっちゃん！」なんて言いながら釣り上げられたシロギスをつついている。

はしゃいでる哀歌にも、どうやらあたりが来たようだ。

竿が結構しなつているし、大物の期待が高まる。

釣り上げられた獲物は、黒くてぬめぬめのボディー、なんともチャームングな髭を生やした魚だった。

哀歌が「さっちゃん！ナマズさんが釣れたよ」なんて言つて釣り上げた魚に触ろうとするのを、俺は慌てて止める。

「バカ、そいつはゴンズイっていう毒持ちの魚だ。危ないから釣り上げて絶対に触るなよ？」と言いつつ、ペンチでゴンズイを針から外し、海に返す。

・・・海に淡水魚のナマズがいるわけないだろ！このバカチン

釣り開始から4時間がたち、お腹が自己主張を始めたので、一旦釣りを切り上げ飯にする。

売店の近くに長椅子とテーブルがあつたので、そこで昼を取つた。

弁当を食べ終え、今までの釣果を話していた。

有がシロギスを5匹、マゴチを一匹釣つたんだとか。

哀歌はゴンズイが入れ食い状態らしい。まともな魚・・・最低一匹は釣れるといいな。

俺はシロギス4匹といまひとつ。まあ昼からも、まだまだやるからもっと釣れるだろう。

飯を食べ終え、釣り道具を置いてあるところに戻ると、ブーメラン型の海水パンツを（通称Vパン）はいた男が立っていた。

ええ、どう見ても武です。

「沙紀さん！水臭いじゃあないですか。私に内緒で釣りに行くなんて・・・。そうやって私の心を釣ろうとしているんだね、まったくシャイな子だ」

なんて言いつつ、腹筋を始めた武。

ほら、有が汚物を見るような目で武を見てるよ。

俺は完全に無視を決め込み、後ろで戸惑っている哀歌と、冷たいま

なざしで武を見ている有にアイコンタクトで無視しろと伝え、釣りを再開した。

またさつきと同じ、二人と少し離れたポイントで針にゴカイをつけ、仕掛けを遠投する。

20分ほど経ち、シロギスを5匹とソマガツオ1匹を釣り上げた。ソマガツオを持って二人に見せると、哀歌が俺を褒め称え、有が黒いオーラを出す。

対抗心むき出しの有が怖いです。有の釣ったマゴチ(45cm)を、「あれはめつたに釣れるものじゃない」と褒めてみたが逆効果だったようだ。

居たたまれなくなつて、俺は自分の竿の場所に戻った。

そして午後3時、後一時間ほどたつたら切り上げて帰るかと考えていると、隣に人の気配を感じて振り返る。

「やあ、沙紀さん。釣られてばかりいる私じゃあない、今度は君の心を釣ってみせるよ」っと意味のわからないことをほざきながら、竿を持った武が姿を現した。

もちろん、Vパンのままだ。

またか、またおまえか。

武は仕掛けを遠投し、俺の横に腰掛ける。

おいおい、俺の横に居座るつもりかよ……。移動してもいいのだが、どうせ移動しても付いてくるだろうし……。

さすがに、こんなやつが隣にずっといたら頭がどうにかなりそうになる。

何より周囲の釣り人の視線がづらい。

こんな変態の仲間だと思われたら、二度とここに釣りにはこれないぞ。

なんとかこの変態を撃退できないか考えていると、ある名案が浮かび上がる。

トイレに行つたとき、トイレの横に設置されているベンチに、紫色のツナギを着て、薔薇薔薇しいオーラを纏つたいい男がいたの思ひ出した。

あの人、ストラバ本編に出てきていたベアー様だろ、絶対。

あの短髪の上に、薔薇の花を乗せている人物はベアー様しかない。ベアー様を使って、武を撃退する方法を思いついてしまった！さすが俺、天才に不可能はないんだよ！！！！

俺は早速、竿を置いて歩き出す。

すると武も、竿を置いて俺の後をこつそりつけてくる。

バカめ！ノコノコと俺についてきやがって。地獄への片道切符を切りやがったな。

トイレの付近まで来るとベアー様の姿が見えてくる。

俺はホツと息を吐く。彼がいなくなつてたら、この計画は失敗に終わつてたからな。

俺はベアー様に声をかける。

「あのすいません、もしかしてあなたはかの有名な薔薇騎士、ベアー様ですか？」

こちらに鋭い目を向けてくるベアー様。

「いかにも、俺は薔薇騎士ベアーだ。女の子の君が、俺に何の用だい？俺は騎士を目指すかわいい男の子しか興味がないんだが。」

ベアー様が冷たく言い放つ。ほんと女には容赦ねえなこの人。

「あなたにお願いしたいことがあります……話だけでも聞いてもらえないでしょうか？」

「いいだろう、話ぐらいなら聞いてやらなこともない。」

「ありがとうございます、実は私の後ろの電柱に隠れている、海水パンツをはいた、薔薇騎士にあこがれる少年が、どうしても……どうしてもあなたと剣（剣という名の自主規制）を交えたいようなのですが、彼は照れ屋でして……あなた様の方から誘つてやつてもらえないでしょうか？」

ベアーさんはそれを聞いて微笑み、「いいのかい？俺は騎士見習い

でも、ホイホイ食っちゃまう男なんだぜ？」っと聞いてくる。

「彼も騎士に憧れ、目指す身。なればベアー様ほどのお方にしごいて貰えれば、涙を流して喜ぶでことしよう」ふふふ、懲りない武にはいい薬になるだろう。

ベアー様は舌なめずりをしつつ立ち上がり、電柱の裏に隠れていた武を捕まえてお姫様抱っこでトイレに連行していった。

トイレの中から「たっ、助けてくれー」や「アー」って声が聞こえてきたが、俺はさっさと釣りに戻ることにした。

ポイントに戻った俺は、トイレで起きているであろう惨劇を忘れて釣りを始める。

すると哀歌がこちらに走ってくるのが見えた。なにやらかなり興奮しているようだ。

「さっちゃん、ゆーちゃんがすごい大きなお魚を釣り上げたよ！」なにが釣れたのかwktkしながら現場に向かうと、そこには2mはありそうな本マグロが・・・本マグロ!?俺はついに目がおかしくなったのかと思い、何度も目をこすったが本マグロがビタンビタン跳ねている。

どうやってマグロなんて釣り上げた!?この近海にマグロなんてそもそも生息してないし、いたとしても絶対に釣り上げるのは不可能だ。

投げ釣りの仕掛けは海底の魚を釣り上げるものであって、中層にいる魚を釣れるようになっていない。

なによりだ、道系なんて3号だぞワイヤーならまだしも、ナイロンのなんだぞ!手釣りでもないし竿は確実に折れるってのに、どうやって釣り上げたんだよ。

もうどこから突っ込んだらいいのかわからないよ、不思議少女、有にかかればなんでもありだな。

有は哀歌に賞賛されて、有頂天になっているようだ。

どうやって釣ったか聞いてみたいが、なにか恐ろしい予感がするの
で聞かないことにする。

周りに釣り人が集まってきた。

まあ、こんな2mはある黒々とした海のダイアが浜辺でビタンビタ
ン跳ねているのだから。

周りからは、「ちょままwwwwww」とか「なんぞこれ」と
か「ねえよ」とか聞こえてくる。

まあ、ありえないことなので気持ちはすごいわかるわ。

「しかしこのマグロ、どうやって持って帰るんだ？」

俺の一言に正気にかえる有と哀歌。

「こんな大きいお魚さん、僕じゃあ持てないよ……。」なんて哀
歌が呟いている。

このマグロ、絶対200kgはあるぞ。クレーンで釣らないと動か
すのは不可能だ、なんて考えていると有が動いた。

有はどこからともなく刺身包丁を取り出した。

……もう、どこから出した！？なんて驚かないぞ？突っ込まな
いぞ！もう慣れたわ、いい加減。

「大丈夫だよ！あーくん。血抜きをして、大トロと中トロの部分だ
け切り出すから。」

有はビタンビタン跳ねているマグロに近寄っていく。

マグロに近づくとつれてかわいい口を三日月型に歪め、刺身包丁を
天高く掲げる。

マグロのエラより少し右に、掲げた包丁を一気に振り下ろした。

ビチビチビチとマグロが、バイブレーションのように震え、血
が噴出し、砂浜を真っ赤に染め上げていく。

突然のことに、哀歌も俺も「ヒッ」と情けない声をあげて腰が抜
けてしまう。

俺たちの腰が抜けている間に、有は顔に付いた返り血を指でぬぐい、
清々しい笑顔でマグロを解体していった。

大トロと中トロの部分を切り出しクーラーボックスに入れる。

入りきらなかった分はコンビニでビニール袋をもらってきて、袋に詰めて持って帰った。

その夜、三人の家の夕食は刺身と寿司でテーブルがいっぱいになった。

余談ではあるが、トイレの横の草むらにボロボロの武が打ち捨てられていたが、誰にも助けってもらえずに、夜間パトロールの警官に保護されたとか。

そのなな

楽しい時間はすぐに終わってしまうもので、今日からまた学校が始まる。

家からのろのろと出発し、電車に乗り込み、満員電車で揺られながら学校に向かう。

電車の揺れに誘われて、ウトウトとしてる間に「次は、　　」。次は、　　です。お降りの際は　　。　　」とアナウンスが流れる。危ない危ない、次で降りないとな。

ポヘーっとしながら人ごみを掻き分け電車から降りる。

駅から出て椿と合流し、部活のことを話しながらゆっくり学校の方へ歩いていく。

「そういえば沙紀ちゃん、部活何に入るかもう決めてる？」

俺の通う、私立青山学園中等部では5月20日までに部活届けを出さなければいけないのだが、俺も椿もまだ出していない。

仮入部もできるので、冷やかに色々な部を回っているが、どれもこれもパツとしないものばかりだ。

「まだかなあ。今まで見てきた中で、候補を選ぶなら卓球部と美術部だな。なんとって幽霊部員でもいいみたいだし。」

まあ、帰りの電車があんまり遅くならない部活なら、なんでもいいのだが。

「じゃあ、まだ見ていない部活と一緒に見て回ろうよ！私、今日の放課後に一人で行くつもりだったんだけど沙紀ちゃんも一緒に」

回ってない部活ねえ。確かあとは水泳部と剣道部とアーチエリー部か。

「別にいいけど、俺は水泳部と剣道部とアーチエリー部に行こうと思うんだが、椿もそれでいいか？」

「うん、私は水泳部にはもう行ったけど、残りの二つは行ってないし……。そうそう、水泳部には武君が「水泳部は無しだ。絶対

行かんぞ」いるんだけど」

よし、候補がひとつ消えて、残りの二つの見学時間が大幅に伸びたな。いいことだ！

「沙紀ちゃんつて、なんでそんなに武君を避けてるの？顔もかつこいいし、勉強もすごいできるのに。結構武君に憧れてる子多いよ？」

「椿よ、君は今まで何を見てきたんだ？騙されてはいけない、顔は確かにいいが、人として失ってはいけないものを失い、得てはいけないものを得た武だぞ？俺にはただのドが付く変態にしか見えん」
「つい最近、浜辺で泳ぎもしないのにVパン姿で釣りをし始めたりとかな！！！」

「確かに、時々変な行動をするときもあるけど・・・私はいいと思うなあ」

なぜかうつとりしている椿。ま・・・まさかな、俺の周りで唯一まともな椿が、武にホの字とかないよな。

「時たまではなく、常に変な行動していると思うのだがな。」

椿はうつとりとしたまま、何を考えているのかわからないが、時折「イヤン、武君」とか言いながらクネクネしている。

俺の話をもったく聞いちゃいないよ。駄目だこいつ、早くなんとかしないと！

連休明けで、教師も生徒もまったくやる気が出ないようだ。

数学教師なんて「今日は自習にする！」って言って黒板に問題だけ書いて、アクビしながらクロスワードを解いて遊んでるよ。

仕事しろよwつて言いたくなかったが、言ったら俺も真面目に授業しなければならなくなるので言わないが。

黒板に書かれた問題をさっさと解いて寝ることにする。

6限目だし、起きたら放課後か。ちようどいいな、お休みなさい。

放課後、俺は椿と供にアーチェリー部に来ている。

6限目に熟睡していたので疲れはまったく無く、絶好調だ。

「すいませ〜ん、仮入部しに来たのですが見学していいですか？」
椿が近くで練習している先輩に声をかける。

「どうぞ、どうぞ、ゆっくり見ていきなよ」

俺と椿は椅子を出してもらい、先輩たちの練習風景を見せてもらっている。

「へえ、矢を撃つだけじゃなくて筋トレとかもするんだ」

俺はてつきり矢を放つところを見せてもらえると思ってたんだが、そうでもないみたいだ。

沙紀は、先輩が弓を引いて的に当てている姿に興味津々のご様子。

「ねえ沙紀ちゃん、私もあれ撃つてみたいんだけど一緒にお願いしてみない？」

まあ、人数があまり多くないみたいだし多少のわがままを聞いてもらせるかもしれないな。

「あの・・・私たちにも撃たせて貰えませんか？」

椿のお願いに部長さんが困った顔を浮かべて、「う〜ん危ないしなあ・・・よし、おーい副部長。この二人に構えや撃ち方、あと注点を教えてあげて〜」と大きな声で更衣室の方に呼びかける。

「ほいほい、呼んだかね」

奥のほうから、眼鏡をかけた小柄な女性が出てきた。どうやらこの人が副部長さんらしい。

弓の持ち方や、標準のあわせ方などを副部長さんに教わり、ついに実践。

日本の弓と違って、標準に合わせて撃つので、ド素人の俺でもなんとかの的に当てることができた。

3本撃ち終えたところで、なにやら周りがザワザワ言っているので視線をそちらに向けてみると椿の周りに人だかりができていた。

「すごい、すごいよ君。5本とも全部真ん中に命中してるじゃないか」

「椿ちゃんだっけ？君本当に素人なの？」

「もう一回、もう一回やって見せてくれ！！！」

椿の周りで興奮している先輩たちが、椿にもう一度撃てと促している。

椿はそれに答え、射出の体勢に入る。

あたりが静まり返り、15mほど先にある的に狙いをつけているのだろう。中々矢は放たれない。

突如、ヒュンッと音を立てて放たれた矢が、的に向かって飛んでいく。

矢は見事に的の赤い点をとらえ、椿はガッツポーズをしている。

椿はすごいな……まるでゴルゴ1だ。これからは後ろに立たないようにしよう！

この日から7年後、オリンピックで日本人初のアーチェリー金メダリストが誕生するが、それはまだ先のお話。

あれから結局、椿はアーチェリー部の先輩方に捕まってしまったので、俺は一人寂しく剣道部に向かっていた。

体育館の少し離れた場所にポツンと立っている小さい建物が見えてくる。

中からメインとか、はあああつとか大きな声が聞こえてくる。

扉を開け中に入った俺は、思わず顔を顰める。

確か剣道部は、部員が全員女子だったな。

部活紹介を全校集会の時に見たとき、部員に男子は一人もいなかったはずだ。

道場の中は、汗と清汗スプレーと香水が混じったなんともいえない匂いが充満していた。

おへええ、やばい！ここにいたら吐いちまう。汗の匂いだけなら全然平気だが、混じった匂いはマジで無理だ。

俺は踵を返し、外に出ようとしたときに突然肩を掴まれる。

「見学希望か！まあそう焦らずにゆっくりと見ていくといい」
振り返ると、そこには吊り目のいかにも「私はきつい性格をしています」って感じの女がいた。

俺はどうやら、魔界に足を踏み入れてしまったらしい。
肩をがっしりホルドされているので、逃げ出すことはできそうにないな。

肩を掴んだまま、俺を道場の片隅に連行した女は、俺に座るように促し「そこで見学している」なんて言って練習を始めた。

10分が経過し、俺以外に2人見学しているやつがいたのだが、そいつらは退屈なのか携帯を弄っている。

俺は正座をして見学をしているのだが・・・そろそろ足の痺れ&吐き気が限界突破しそうなので、退出しようと思って立とうとした時、怒声が響いて。

「そこ、さつきからなんだ。見学に来ておいて携帯ばかりいじくりおって・・・その根性叩き直してやる。防具をつけて竹刀を取れ。さあー！」

おいおい、あの吊り目、まさか見学者を叩きのめす気かよ。

他の部員たちは「素敵です、お姉さま」だの「私の根性も叩き直してください！」だの「今日のお姉さまも一段と凛々しいな」なんて訳のわからないこと言っていないで止めるよw

まあ、見学しに来ておいて携帯は無いよな。俺には関係ないし、ブルッっている二人には悪いが先に俺は退出させてもらうぜ、本当に吐きそうなんだ。

俺はしびれる足に力を入れ立ち上がり出口を目指す。

「おい、貴様・・・いい度胸だな。今、他の見学者に注意したばかりなのに席を立つとは。いいだろう、お前から先に根性を叩きなおしてやる」

あと少いで出口に到着し、外の新鮮な空気を吸えるという所で吊り目が俺の前に立ちはだかる。

NO~~~~。矛先が俺に変わってるじゃねえか。

頼むそこをどいてくれ。外の空気を吸わせてください、お願いします！もう吐きそうなんです。っと吊り目にアイコンタクトを送る。

「黙ってないで何かしゃべれ！言い訳くらいなら聞いてやるぞ」
しかしアイコンタクトは通じなかったようだ。

なんて言えば通じるのかねえ、この道場臭いです！ってさすがに言えないしなあ。

「吐き気がする」

俺は単刀直入に切り出す。

「なんだと貴様・・・もういつペン言ってみろ」

くっそ、早くそこをどいてくれよ。何回でも言ってもやるからさ。

「吐き気がすると言ったんだ」

これでいいだろ、さあそこを退くんた。

ここで俺が吐いたら、道場の匂いとさらに混じって全員もらいゲロ確定だぞ！それでもいいのか？

吊り目はコメカミをヒクヒクさせながら、「おい、楓。こいつに防具をつけてやれ。抵抗したら痛めつけてもかまわん」なんて他の部員に命令している。

えええええ、なんでそうなるのよ。ちゃんと訳を話したじゃん！
楓と呼ばれた部員は、俺を更衣室に連行し防具をテキパキと装着させる。

更衣室は道場よりかは幾分かましだったが、防具がすごい臭い。
少し回復したのにさっきより症状が悪化しちゃうよおお。

防具を装着させられた俺は、道場の真ん中に引っ張り出され竹刀を渡される。

前にはいつの間にかフル装備の吊り目が立っていた。

「さあ、どこからでもかかって来い。来ないのなら・・・こちらから行くぞ！」

くそ、どうしてこうなった。俺がなにをしたっていうんだよ!!!
であああっという掛け声を上げながら吊り目が俺に突っ込んでくる。

俺は恐怖のせいで吐き気も忘れ、「うわっ」っつと声を上げながらとつさに竹刀を前に出し、体を強張らせて目を瞑ってしまった。すると竹刀から手にすごい衝撃が走る、それと同時に前方から「ぐえ」っつと蛙がつぶれたような声が聞こえる。

俺は恐る恐る目を開けると、なぜか喉元を押さえて倒れている吊り目が見えた。

周りの部員たちは、「お姉さま、大丈夫ですか！」なんて言って吊り目の周りに集まってくる。

汗を掻いた部員が、一箇所に集まっているのですごい匂いだ。よくわからないが、どうやら吊り目は立ち上がれないらしい。

恐怖も薄れ、吐き気が復活してきたので防具を脱ぎ捨て、怒られていた二人の見学者にアイコンタクトで「このドサクサにまぎれて逃げようぜ」と伝え、さっさと外に出ようとする。

「ま……待て。最後に、最後に名前だけ教えてくれないか」
もう……ほんと限界なんです。勘弁してください！

「藤堂 沙紀」

俺はそれだけ言って、早足で道場を後にした。

道場から出てすぐにトイレに駆け込んで、胃が空になるまで吐き続けたよ、畜生！

もう二度とあの道場には行かないから絶対……。

田中 祥子 side

道場にいる3人の新入生。

2人の見学者の態度はひどいものだった。見学中に携帯を開き、それだけでは飽き足らず笑いながら談笑している。

その横には正座をし、姿勢を正して見学しているものがあるので余計に目につく。

「そこ、さつきからなんだ。見学に来ておいて携帯ばかりいじくりおって・・・その根性叩き直してやる。防具をつけて竹刀を取れ。さあ！」

ブルブルと震える新入生を見て、これで真面目に見学をするだろうと思っていた矢先に、真面目に見学していた少女が、険しい顔して立ち上がり出口に歩いていく。

はつきりいつて裏切られた気分だ。

真面目に見学していたので好印象だったのだが、注意をしている最中に、断りも無く退室しようとする姿を見てがっかりする。

彼女なら、きつといい剣道部員になれると思ったのだが・・・。

今年は・・・部員が一人も入らないかもしれない。

私は出口の前に立ち、彼女の行く手を阻む。

「おい、貴様・・・いい度胸だな。今、他の見学者に注意したばかりなのに席を立つとは。いいだろう、お前から先に根性を叩きなおしてやる」

はつきりいつて八つ当たりだ。

勝手に彼女に期待して、勝手にがっかりした自分の行き場のない気持ち、彼女にぶつけようとしている。

彼女と私の目が合う。

彼女は私の目をじっと見つめ、険しい顔をしているが、彼女の目はすべてを見通していると言わんばかりの覇気を宿している。

「黙ってないで何かしゃべれ！言い訳くらいなら聞いてやるぞ」

彼女は私の目を見つめたまま一言。

「吐き気がする」

彼女はそう言ってから他の見学者のほうに視線を向け、また私のほうに視線を戻す。

「なんだと貴様・・・もういつペン言ってみろ」

「吐き気がすると言ったんだ」

私は自分自身が許せない、こんなやつに私は何を期待していたのだ。もういい、たとえ素人相手でも全力で叩きのめしてやる！

「おい、楓。こいつに防具をつけてやれ。抵抗したら痛めつけてもかまわん」

私は楓に指示を出し、防具を体に纏いながら彼女を待つ。

しばらくすると防具を纏った彼女が、楓に手を引かれながら私の対面に連れてこられた。

楓が竹刀を渡し、準備が整ったので私は構える。

つが彼女は一向に構えようとしない、舐められたものだな私も。

「さあ、どこからでもかかって来い。来ないのなら……こちらから行くぞ！」

私はそう言っながら空きの胸を狙って突っ込む。

この距離になってもまだ動かないか！

もらった！っと思っただ瞬間、私の喉に鋭い痛みが走る。

あまりの激痛に私は喉を押さえてうめき声すらも出せない。

なにが、なにが起こった。彼女のほうに目をやると、彼女は突きの姿勢を維持したまま立っていた。

そうか……私は突きをもらって倒れたのだな。

見事な突きだ、私にまったく視認させない神速の突き。

構えを取らず、わざと胸に隙を見せて私を誘ったのだな。

絶対に負けないと慢心していた……私の完敗だ。

周りに部員が集まってくるが、何を言っているのかまったく聞こえない。

私は彼女を見つめ続ける。

まるで世界に私と彼女しかいないような錯覚に陥る。

そうこうしているうちに彼女は防具を脱いで、他の見学者に心配そうな視線を送っている。

そうか、やっと理解した。

彼女は他の見学者を庇うために……わざと私の注意を引いて他の生徒を守ったのだな。

彼女には、私が見学者を脅しているように見えたのだろう。

確かに彼女の言うとおりだ。

武芸を嗜む者が、高圧的な態度で武を持たぬものに接すれば吐き気を催すのも当然かもしれない。

彼女が出口に向かって歩き出す。

待つて、待つてくれ。まだ名前すら聞いていないんだぞ。

「ま・・・待て。最後に、最後に名前だけ教えてくれないか」

最後の力を振り絞り彼女に問いかける。

彼女は足を止め、「藤堂 沙紀」っとよく通る声で私に返し去っていった。

side end

ゲロをトイレですべて放出した俺は、帰りにアーチェリー部によって椿と合流し、駅までの道を一緒に帰っている。

「沙紀ちゃん、私アーチェリー部に決めちゃった」

まあ、そうなるわな。

なんだかんだで椿も楽しそうにしていたし。

「沙紀ちゃんはどこにするか決めたの？」

「ああ、美術部にするわ」

「ふん、っで剣道部の見学はどうだった？」

「あの道場には二度と行かん！」

そのはち

中学に上がって始めての中間テスト。

いくつかの凡ミスはあったが、平均点は92点だった。

まあ、まったく勉強もしないで、ずっとネットゲーをしていたのでこんなもんだらう。

他の生徒も中学初めてのテストが返ってきて、うなだれるものや喜んでるもの、友達とテストを交換して見せ合っているものなど様々だ。

そんな俺も椿とテストを交換して、椿がどんな答えを書いたのを見ている。

数学、結構いい点数じゃん！どれどれ、次は日本史か。

おいwなんだよこの答えは。

問2 豊臣 秀吉に関する問題です。ハ鳴かぬなら（

）ホトトギスハ空欄の部分に正しい答えを記入しなさい。

椿の答えを見た、日本史の教師は間違いなく切れただろうなw

椿の回答>鳴かぬなら 焼いて食べよう ホトトギス。

信長より恐ろしい回答だぞ。

何故こんな回答になったのか椿に聞いてみると、「どうしてもわからなくってさ、空欄で出すのもあれだしね。確か日本史のテストの前日に食べた焼き鳥がおいしくてつい」「なんていいながら、はにかんでいる。

なにが「つい」「だよ。

俺が担当教師だったら絶対に0点だったぞ？

そう思いつつ、もちろん口には出さないで他のテストを見ていった。

「やあ、沙紀さん。こんな所で会うなんて奇遇だね」

武襲来。こんなところもなにも、ここは教室で同じクラスなんだから毎日あつてるだろ。

どこが奇遇なんだか・・・頭の中にちゃんと味噌入っています

か？いや、こいつの中はきつと空っぽなんだろうけど。

「あー、武君！武君のテスト見せて見せて」

椿さん・・・武が来たとたんに態度が豹変するんですね、わかります。

椿は武からテストを受け取り、テストを見ている振りをして武をチラチラ見ている。

なんだか口の中が、摘みたてのブルーベリーを噛んだときみたいな甘酸っぱさを感じるのは気のせいだろうか。

「沙紀さん、今日はあなたにどうしても伝えたいことがあって、声をかけました」

おっ、新展開。今日の武はなんだかシリアスな雰囲気を出しているぞ。

いつもの変態的行動を起こさない。明日はブリザードでも来るんじゃないか？

武は顔を後ろに向けて、顔になにか塗っている。なんだか嫌な予感がしてきた。

武がこちらを振り向く。

頬になにか塗ったのか、ピンク色に染まっている。

「べ・・・別にあんたのことなんて、なんとも思っていないんだから！本当よ！勘違いしないでよね」

突然の武の発言に、俺も椿もフリーズしてしまう。

「どうでしたか沙紀さん、シリアスモードからツンデレモードに移行した私は？ギャップに萌えましたか？あるコミックではこのギャップ萌えで意中の女性を射止めている描写があったのですが・・・」なんていいながら詰め寄ってくる。

俺はあまりの気持ちの悪さに全身に鳥肌がたち、詰め寄ってくる武を巴投げで窓の外に放り投げる。

「ガラパゴス」っと叫びながら武は地面に落ちていった。ここは二階だし・・・死なないだろう。

床に落ちている、武が落としたであろうピンクのファンデーション

をゴミ箱に投げ捨て、俺と椿はまたテストの見せ合いを再開した。

放課後、クラブ活動をするために美術室に来ています。

普段は基本的に自由行動で、何かを作ったり、技術研究の名目でコミックを読みながらスナックを食べたりしているだけなのだが、今回は青山学園主催の展覧会があるので、それに出品するものを作りにやってきました。

こんなときに頼りになるのはよっちゃん（2年生）。

よっちゃんの本名は、立浪 義彦 通称よっちゃん。

よっちゃんは左手にいつもスカーフを巻いている。

なぜそんなものを巻いているのか入部してすぐにわかった。

彼はリアル厨二病なのである。

入部してすぐの頃、いつもすごくうまい風景画を書いているので、後ろのほうで勉強させてもらっていたのだが、突然よっちゃんは左手を押さえて苦しみだした。

ただならぬ雰囲気を感じた俺は、すぐに三年の先輩のところへ報告しに行ったのだが、「いつものことだよ、義弘君はたまにああなるんだ」と遠い目をして答えるばかり。

俺は心配になってよっちゃんのところに戻り、看病しようと思って近寄るが、よっちゃんはそれを拒絶する。

「今は・・・今は駄目だ！俺に近寄るな。静まれ、静まれ俺の左手よ、もう神は倒したはずだ。だから静まれ！」
どうしよう・・・反応にすごい困る。

しばらくするとよっちゃんは、ふう、と息を吐き、「心配かけたね、俺の左手には魔人が封じ込められているんだ、暴走すると危ないから、俺がああなったら近寄ってはいけない。危険だよ」と俺に語りかけてくる。

なるほど、彼は厨二病を患っているのか。先輩の反応も納得である。そんなよつちんだが、先輩受けはいいし、同級生でも人気がある。よく、先輩や同級生がよつちに人生相談をしているのをよく見かける。

「よつちん、展覧会に出品する作品が決まらないんだけど何を作ればいいかな？」

よつちんなら、きっといいアイデアを出してくれるはずだ。

「うーん、そうだな。基本、展覧会に出す作品はなんでもいいんだ。服に絵を描いてだしてもいいし、紙粘土をこねて動物を作ってもいい。俺の専門は風景画なんでの確なアドバイスはできないが・・・。沙紀の作りたいものでいいんじゃないかな」

むむ、なんでも作っていいと言われても、何を作ればいいかわからないや。

「頼む、よつちん。なにかお題を出してくれ」

お題さえあれば、なんとなかりそうだ。

「んじゃあ、アスキーアートのカラクターを紙粘土で作成するんだ！」

おお、これはまたマニアックなお題をちょうだいしてしまったな。しかしこれでなんとかなるな。

「助かった、よつちん。恩にきる」

俺はよつちゃんに礼を言い、美術室の倉庫から紙粘土を引っ張り出してきて作成にかかる。

ム力つくけど憎めない、やる夫を作り始める。

もちろんヘブン状態のやる夫だ。

針金にタコ糸を巻いて、紙粘土で少し肉付けをし、電車の時間になったので今日は帰るとするか。

次の日は、まだ針金に少し肉付けした状態の人型を透明のボトルに入れる。

綿を取った綿棒の先に瞬間接着剤を塗って、瓶の中の人型を固定していく。

完全に固まった頃合いを見計らい、瓶の中に紙粘土を押し込む。ピンセットで紙粘土をやる夫の形に削っていく。

ある程度、形ができたので、乾くのは明日になるだろうし帰ることにする。

また次の日も、瓶の中の紙粘土を削っていく。

今度は耳かきと千枚通しも使用する。

だんだん形ができてきたな。

そして一週間後、ボトルシップならぬボトルやる夫が完成した。

この達成感、今の俺もへブン状態だ。

よし、早速よっちゃんに自慢しにいくか。

.....

展覧会で俺の作品はユニーク賞を受賞した。

俺の渾身の作だったのに.....

最優秀賞はもちろん、よっちゃんの作品が選ばれました。

よっちゃんの日常

午前7時 起床

午前8時10分 学校に到着

午前9時5分 厨二病発動

「ライアスが来るまで耐えろ、俺の左手よ!」

お昼休み よっちゃんの人生相談室

午後3時 左腕の封印を解く

午後6時 ご飯を食べる

午後9時 テレビを見ながら尻を搔く

午後11時 スカーフをつけたままお風呂に入る

午後11時半 おやすみなさい

そのきゆう

もう六月も半ばかあ。

だんだん蒸し暑くなってきているな。

遠くで油蝉がミンミンと鳴いている。

半袖のカッターシャツを着て登校している俺と椿。

衣替えも終わり、そろそろ夏に入ろうとしている。

そういえば椿は、アーチエリーの新人戦に出るんだっただか。

六月半ばから七月にかけて、ここ一帯の地域で夏の県大会に出るための地区予選が、各クラブで行われているらしい。

美術部にはそんなのあんまりないからなあ。

「しかし、椿が新人戦に出たら確実に優勝だよな」

普通に3年の部に混じっても優勝しそうだよ、この子は。

「またまたあ、褒めてもなにもでないよ沙紀ちゃん！第一、勝負は水物。絶対ってのはないんだから」

5本撃って4本をど真ん中に確実にぶち込むお前が言うなよw

「まあ、ありがとうね。なんだかんだで本番に緊張しそうだし・・・
。 応援しにきてね、待ってるから」

なんて笑顔で言ってくるから顔が赤くなってしまふ。

「お、おお。もちろん応援しに行くぞ！よし、学校までダッシュだ」
赤くなった顔を見られたくなくて、俺は駆け出す。

「ちよ、置いてかないでよ」

つと椿も俺の後を追ってくる。

心地よい初夏の風が、俺の髪を優しく撫でた。

放課後、椿の練習を見ていたのだが、見ていただけなのはやっぱり暇なもので、よっちゃんの絵を書いているところを見に行こうと思
い俺は立ち上がる。

体育館の裏を通って美術室に向かっている途中、緑のジャージを着た女の子がうずくまっているのを発見する。（緑、赤、青とジャージの色があり、緑が一年、赤が二年、青が三年となっている）
どうやら泣いているようだ。どうしたんだ？

「君、どうしたんだ？大丈夫か」
目を真つ赤にして、鼻水をぐずぐず啜っている女の子に俺は声をかけた。

中島 葵 side

どうしよう、どうしよう、どうしよう。

私は取り返しのつかないことをしてしまった。

中学生になって、バレエ部に入り、部活の雰囲気にも慣れてきて、何もかもうまくいっていると思って気を抜いてしまった私はどうかしている。

二日前に戻るなら戻りたい。

二日前、練習しているときにネットが外れてしまったので、2年の先輩が脚立に登り、ネットを再びかけているときのこと。

私は、先輩が落ちないように脚立を支えていたのだが、私は隣で練習している女子バスケット部の中に、同じクラスの仲良しの子を見つけて脚立から手を離して手を振ってしまった。

そのとき、脚立が支えを失って傾いていることに、私はまったく気がついてなかった。

脚立が倒れ、先輩の辛そうなうめき声が聞こえてくる。

このとき、私は自分の血が引く音を確かに聞いた。

他の先輩たちもすぐに集まってきて、ひねった足を冷却スプレーで冷やし保健室に連れて行った。

保健室に連れて行かれた先輩は全治二週間の捻挫だった。

保険の先生は激しい運動はしてはいけないよと私たちに告げる。

それを聞いて、三年の先輩が涙を流しながらへなへなと床に座り込んでしまう。

「今年の地区予選どうしよう、5人じゃあ出場できない」
うちのバレー部は弱小で、そのせいか人気も無く、さらに弱くなつて人が減るといふ負のスパイラルに陥っている。

だから三年の先輩は最後の大会で活躍し、私たちの後続を残すために地区予選突破を目指すという目標を持ってがんばっていたのだ。大会は五日後、二年の先輩の足を見ると青黒く腫れ上がっている。とてもじゃないけど、無理しても出れそうに無い。
私は事の重大性に気がついて、土下座して謝った。

「ううん、いいよ。葵がバレー部に入ってくれてなきゃ今年で廃部になってたしね。まだ五日間あるし、練習しよう。出れそうな人に頼んで出てもらえば、まだ可能性はあるよ」
私たちは練習を再開したが、雰囲気は暗い。

先輩たちが、色々な人にあたってみるが、皆自分のクラブの大会でそれどころではなく、すべて断られている。

もちろん、私も見ているだけではなく、友達や隣のクラスの子などもあたってみたが、やはり無理だった。

先輩たちは今、体育館で練習している。
まったく諦めてないのだ。もう3日後に大会は迫っているというのに。

私は、先輩たちの夢と目標をぶち壊しにしてしまった。

もう・・・死んでしまいたい。

体育館の裏で、隠れて泣いている私に声がかかる。

「君、どうしたんだ？大丈夫か」

すぐく・・・すぐくやさしい声。

声の聞こえた方向を見ると、どこかで見たことのある顔の女の子がこちらに歩いてきている。

あっ、この人。入学式で挨拶していた人だ！

「だっ、代表！」

side end

俺の方を見て代表！と叫びながら突然立ち上がった少女に、俺は怯んでしまう。

ちよ、いきなり叫ぶなよ。

びっくりするじゃねえか！！しかも代表って（笑）

俺は同い年であろう少女を宥め、泣いていた理由を尋ねる。

少女は再び涙目になっていき、鼻をスンスン言わせながら語り始めた。

要約するところだ。

少女のせいで先輩が怪我を負う。

怪我が直るのには二週間時間が必要 人数が足りないので大会に出られないかもしれない ツテをあたって断られる 先輩の夢を壊してしまった私は生きている価値が無い 鬱だ、死のう。

まあ、なんて言えばいいのかわからないがご愁傷様としか言えないな。

「しかし、なんで君はこんな所で泣いているんだ？泣いている暇があるなら人を探すか練習してたほうがいいんじゃないのか？」

少女ははっとした表情になり、いきなり俺に変な質問をしてくる。

「代表は・・・代表はバレーをやったことあります？」

んん？なんだか雲行きが怪しくなってきたぞ。

「ああ、ママさんバレーならな」

町内会のおば様たちが一週間に一度、夜に近所の小学校の体育館を貸しきってママさんバレーに興じているのだが、俺も母親に毎週連れて行かれてかなりバレーがうまくなった。

まあ、ママさんバレーは9人編成なので普通のバレーと違うのかもしれないが、藤堂さん家の娘のアタックは企業団の人たちでもきつと取れないと、おば様たちから恐れられている程度の腕前はある。

「代表がもしよければ、出て・・・出てもらえないでしょうか」
なんか、断つたらこの子本当に自殺しそうだよ。

すごい迫力で俺に迫ってくる。

三日後かぁ、今日は金曜日だから月曜日か。

「三日後っていったら月曜日だけど、授業どうするの？」

一応、特待生なのでサボリとかはまずい。

「大丈夫です、バレエ部の顧問の先生に話せば月曜日の授業は欠席にはなりません」

おっ、もしかしてこれはまさかのラッキーパターンか。

授業を堂々とサボれて、しかもバレエをして遊べるとかなんというボーナスステージ。

二つ返事でOKを出してしまいそうになるが、なんでも安受けすると後で困ることになったりするので、「うーん」って考えるそぶりをみせてから答える。

「よし、今回だけが引き受けよう。ただし、大会が終わったらどんな結果でも、飯を奢ってくれよ」

俺は立ち上がり、少女に手を伸ばす。

「知っているかもしれないが、俺は藤堂 沙紀。君の名前は？」

少女も俺の手をとり、立ち上がって答える。

「私は中島 葵。本当に・・・本当にありがとうね沙紀さん」

潤んだ目で俺を見つめる葵。

こんなところを誰かに見られたら勘違いされるぞw

百合の花が咲く前にとつとと撤退だ！

その後、バレエ部の顧問のところに行き、美術部との兼任になるがバレエ部への入部届けを出して、練習するために葵と一緒に体育館に向かった。

三日後、俺はジャージ姿で駅の近くのバス停でバスが来るのを待つ

ている。

遠くからダークブルーの小さいバスが走ってくるのが見えた。

その小さいバスはバス停前で止まり、バスの扉がブシューという音と共に開く。

このバス・・・よく見たら学園の所有物がよw

バスの側面に青山学園中等部つと大きな字がデカデカと書かれている。

ほんと、私立つて無駄なところに金を使うよなっと思いつつバスの中に入る。

中に入ると冷房がいい感じに効いていて、待っている間に掻いた汗が一気に引いていく。

「おはようございます、皆さん」

俺はバスの中にいる先輩や葵、顧問の先生に挨拶した。

「おはよ〜。沙紀さん、なんだか疲れた顔してるけど、どうしたの？」

俺は・・・そんな顔をしているのか。

「ああ、朝に色々あってな」

そう本当に色々あったんだよ。

昨日は休日だったが、学校に向かいバレエの練習と最後の打ち合わせをしてユニフォームをもらい、帰宅した。

親に明日はバレエの地区予選があるので学校を休むと伝えて、何故こっとなったかを事細かく説明し、「明日はがんばってきなさいね」と母親に激励されていたわけだが。

そう、家には変なのが一匹いるよね。

親父が突然、「明日は沙紀ちゃんのユニフォーム姿を撮影・・・ゴホンゴホン、がんばってる姿を見に、お父さんビデオ片手に走り回っちゃうよおお」と叫びだし、「明日は、俺は会社には行かない！絶対にだ」とキリッとした顔で宣言する。

母親は、親父の頭をガシッと掴みアイアンクローを決めている。

「昭彦さん・・・少し頭冷やそうか」

ミシミシという音を通り越してメキ、バキッと何かが砕ける音が俺の耳にまで届いてくる。

「ぎゃあああ、痛い痛い痛い。しかし負けんぞおお。この激痛を乗り越えた先には、沙紀ちゃんのユニフォーム姿があああ。」
親父がそう叫んだ後にグシャリと生々しい音がなったが、俺はそちらに視線を向ける勇氣はなかった。

そして今朝、準備を整え忘れ物がないかチェックし、ご飯を食べて余った時間にニュースを見ながら寛いでいると、なぜか俺の鞆をもった親父がリビングに姿を現した。

俺の前に来ると、いきなり涙を流しながら土下座をし始める。

「頼む、沙紀ちゃん。この通りだ。ユニフォーム姿を撮影させてくださいませ。この機会を逃したらもうこんなチャンスは二度とこない。だから頼む」

親父・・・真性だったんだな。

俺はすぐに親父対策のもんすたー（笑）を召喚する。

「お母さーん、お父さんがユニフォームを無理やり着せようとするんだけど。助けて〜」と棒読みで母親に助けを求める。

5秒ほどたった後に、母親は包丁片手にいい笑顔でリビングに現れ、開いている手で親父の首根っこを掴みどこかに引きずっていった。

大会から帰ってきたら、母子家庭になっていそうだ・・・。

「ってなことが朝に起きたんだ」

俺は葵にそう言って苦笑する。

「沙紀さんの家は・・・家族仲がいいのか悪いのかわかりませんね」
葵もそう言って苦笑し、会話が途切れた。

いいやい、どうせ俺ん家の親父は変態ですよ！

「沙紀さん起きてください、着きましたよ」

およよ、いつの間にか俺は眠っていたようだ。

・・・電車やバスの揺れって、なんであんなに眠りに誘われるの
らう。

目を擦りながら会場になる体育館を見る。

ちよwデカっ！ドーム型の体育館は軽く見積もっても半径200m
はあるぞ。

どんだけ人來ること想定して作ったんだよw税金の無駄遣いすぎる。
大橋スポーツガーデンにようこそと書かれたアーチをくぐり、中に
入る。

ドームの中に入った俺たちは、コートに陣取り、荷物や飲み物
を入れたクーラーボックスを置いて場所を確保していく。

開会式の前に体を少しほぐしてから汗を拭きつつミーティングを行
う。

開会式が始まりそうなのでミーティングを終え、急いでほかの学校
の生徒が並んでいる列の横に並び、開会式が始まるのを待つ。

市長らしき人物が、長ったらしい挨拶を終えて、選手宣誓に入る。
選手代表は去年の優勝した学校の生徒が行うらしく、おかつぱの女
の子が高らかに宣誓をし、解散となった。

俺たちは第二試合からなので、試合までにまだ少し時間がある。
試合の組み合わせや時間が見れるパンフレットを持った先輩が
難しい顔をしている。

運が悪いことに、俺たちの始めの対戦相手は優勝候補の強豪らしく、
部長が皆に気合を入れる。

「地区予選はトーナメント方式だから、負けたらそこで終わりだ。

私たちは今まで何のために練習してきたか。もちろんバレーが好き
だからだが、ゲームをする以上勝ちを狙っていく。負けても楽しめ
たらいいやなんて考えは、私は好きじゃあない」

そう言つて一人一人の顔に目を向けていく。

今回、怪我で試合に出れないけど、サポートに回っている先輩にも
目を向ける。

「いいか、勝て！取れないと思つてもボールに飛びつけ！また来年

とか次があるといった甘い考えを捨てる。今日よりも明日なんじやとかアホなこと言っているじいさんもいたが、今日がなかったら明日なんて来る筈が無い。来年に部員が入るかどうかはすべてこれにかかっている。皆の健闘を祈る」

途中で電波なことを言ったような気もするが、気にしないでおく。

そうだよな、部長さんは唯一の三年生。

二年生は4人いるけど・・・同学年が一人もないし、今までががんばってきたんだろう。

皆引き締まった顔でアップを始める。

アップを終えた俺たちは、程よい緊張感を持って待機する。

第一試合が終わり、選手たちが自分たちの陣取っている場所に帰ったので、俺たちはベンチさっきまで選手がいたベンチに座り試合開始を待つ。

ジャージの中にユニフォームを着ているのだが、まだ脱がない。

ぎりぎりまで筋肉を暖めるためだ。

試合が始まりそうだ。

俺は急いでジャージを脱ぎ、対面にすでに並んでいる対戦相手を見る。

すごく・・・大きいです。

全員170はありそうだ。

女子中学生の規格から大きく外れた対戦相手は、俺たちを指をさしてクスクス笑っている。

・・・いい度胸しているじゃないか。

そりゃあ、万年最下位の相手じゃあ、やる気もでませんよね。

いいですよ、笑いたければ笑うがいいさ。

試合が終わった後に笑っていられるやつが何人いるか楽しみだ。

礼をし、一旦両チームともベンチに戻る。

俺は皆にある作戦を伝える。

前のミーティングで話した内容に近いのだが、ある一点においてまったく違うことがある。

俺の作戦を聞いた部長も、いい笑顔になって頷いた。

試合が始まり、相手のほうからサーブが飛んでくる。

葵がそれを受け、部長がネットの前に高々とボールをトスする。

ナイスストスだ、部長。

俺は少し助走をつけジャンプする。

それを見て相手は、ブロックするために腕を天高く伸ばしジャンプする。

かかったな、バカめ！誰がコートに向けてアタックすると言った。

顔面がお留守だぜ！

「ぶらあああああ」

俺はボールをブロックしに来たやつ顔面をめがけて全力で振りぬいた。

ボールはそのまま顔面に直撃し、相手コートにボールは落ちる。

審判は戸惑いながら旗を上げ、こちらにポイントが入る。

ボールの直撃を受けた選手は泣きながら鼻血を抑えている。

H A H A H A、痛かるう、痛かるう。

俺は持久力はまったくないが、瞬発力だけは常人の2倍はありと自負している。

魚で例えるならばまさにヒラメだろう。

ノックアウトされた選手は、結局交代させられた。

おいおい、もう交代か？控えの選手が多いところはいいねえ。

ママさんバレーじゃあ、嫌いな相手をつるべ打ちにするなんざあ、

日常茶飯事だぞ？まったくくらえ性の無いやつめ。

そして試合が再開される。

今度はこちらからサーブか。

部長は無難にアンダーハンドサーブでしっかり相手のコートを捕らえる。

しかしそんな緩々の球じゃあ、やっぱり返されるよな。

相手チームはレシーブ、トス、アタックと黄金パターンでこちらに打ち返してくる。

俺は防御がまったくできないので、ここは正規部員の方に任せるか。二年の先輩が決死のダイブでボールをなんとか打ち上げる。

そのボールを葵が俺に向かってトスをする。

そうなんだ、俺はアタックしかできないのだ。

レシーブするとボールはあらぬ方向に飛ぶは、トスは力の加減がでないので駄目。

唯一にして絶対の威力を誇るアタックしか俺にはない。

練習の時に部長に相談したら、アタッカーは俺一人になった。

ほかの面子は相手のクイック攻撃に対応するためにバラバラに広がっている。

防御の厚い布陣で守り、アタックは俺頼み。

俺は、葵が上げてくれたボールに向かって走る。

俺のボールの威力をさっき見ているので、ブロックに出ても押し切られると思ったのだろう。

今度はブロックに来ない。

つまらんな、しかしブロックしに来なくても結果は一緒なのだがな。

「いあほおおおい」

俺は大声を上げて全力アタックを繰り返す。

そのボールはまたもや防御しようとしていた相手選手の顔面に突き刺さる。

ふはははは、反応できまい。

俺のアタックを防御できるなんて思い上がらないほうがいい。

鼻を抑えて悶えている相手選手に俺と部長で声をかける。

「ごめんね、大丈夫ですか」っと俺も部長もニヤける顔を隠そうともせずに相手を見る。

鼻を抑えてる選手はそれに答えることもできずに悶えている。

相手チームは、こちらの意図がわかったのか険しい顔でこっちを睨んでいる。

気がつくのが遅いでござる。

試合開始直前の作戦タイム

「部長、確かに相手は強豪なんでしょう。だが、戦う前からニヤニヤと俺たちを見下す姿を見て俺は・・・俺はただ勝つだけでは腹の虫は収まりそうに無いです」

俺は部長にそう告げる。

「奇遇だな、沙紀よ。私もちょうどそう思っていたところだよ」

この大会にかける意気込みは誰よりも強いから。

「そこで作戦を変更しようと思うのですが、いいでしょうか？」

俺は部長に尋ねる。

「内容にもよるがな、言ってみろ」

「自分で言うのもなんですが、俺のアタックを止められる者は、全日本クラスの選手でもない限りいないと思うのです」

「ママさんバレーにはバレー部OBが結構いるが、そのおばさんたちですらびっくりするほどの威力があるからね。」

「そうだな、お前のアタックするときの手は、私の目では追いつけないほどに早いからな」

俺のかわいいおててにすごいダメージがくるんだけどね！

「それですね、そのアタックから放たれたボールが相手の体に触れてからコートに落ちます。どちらの得点になるでしょうか？」

部長はニヤリと邪悪な笑みを浮かべて頷く。

「なるほど、読めてきたぞ。まあコートを直接狙ったほうが確実にはあるが、お前のアタックなら某サッカー少年のシュートのように相手選手を吹き飛ばすだろうな」

「大佐！作戦変更の許可をお願いします」

俺は悪乗りして敬礼する。

「許可しよう、中尉。全力を持って相手の顔面にボールを叩きこんでやれ」

この部長、ノリノリである。

「YES、sir」

結局、高身長のリギュラーメンバーを排除した俺たちは、余裕で3セットをストレートで取った。

こちらの弱点は防御面なので、高いところからのアタックさえなければ、どおってことはなく。

試合が終了して最後の礼のときに、始めは18人ほどいた相手チームは今では8人しか並んでない。

そうか、10人も選手交代してたのか。

本来ならば交代できないのだが事情が事情だから審判が許可したのだ。

お互いに礼をし、その場を後にする。

相手チームのリギュラー陣が涙を流して悔しがっている。

おまえらの夏はこれで終わったんだよ！相手が悪かったな。

強豪チームに圧勝した俺たちの勢いはすさまじく、5戦してすべてストレート勝ち。

中々手ごわいエースが出てきても、早期にリタイアしてもらっているので楽勝だった。

・・・今日だけで何個、血まみれのボールを作ったかは数えていない。

しかし決勝戦で、俺たちはついに負けてしまった。

相手は紙のような防御力のチームだったのだが、恐ろしいまでの攻撃力を持っていた。

中学生でジャンピングサーブとかどんだだけだよ。

俺が防御をまったくできないのがばれていたのだ。

恐ろしいサーブで俺をつるべ打ちにしてくる相手チーム。

そうなるともろいもので、俺はまさにフルボッコ状態。

閉会式が行われ、準優勝だったので部長にトロフィーが送られる。

1位は当然、県大会に出られるのだが、なんと2位のところも県大会にいけるらしい。

そうだったのか、知らなかったぞw

なんでも一ヶ月後に行われるのだとか。

そこで1位か2位をとると今度は全国大会に進める。

夢が広がりますな、部長さん。

一カ月後なら、足りじいた先輩も直ってるだろうし、俺はお役ごめんだな。

大会が終わって焼肉店で打ち上げをしている最中、俺の右手がパンパンに腫れ上がり真っ赤になっているのに気がついた。

葵が腹を抱えて笑っていたので、ヘッドロックを決めて気絶させてやった。

次の日、その手をよっちゃんに見せたら「鬼の・・・手だと・・・!」

っと言っていたので、なんでこうなったかを説明してあげると、よっちゃんはバレーボールを何度も左手で叩いていた。

アーチエリーの試合に行っている椿を、朝から応援しに行っただけだったのだが、母親が学校に行きなさいと言ったので朝だけ登校し、昼は気分が悪いと嘘をつき、早退して試合を見に行った。ちょうど準決勝をやっている。

どうやら試合の勝ち負けを決めるのは点数で決めているらしい。椿がすべてど真ん中をぶち抜き、相手の選手は絶望的な顔をしている。

まあ、わからんでもないがな。

結局、椿は新人戦をぶつちぎりて優勝し、県大会出場を決めた。

椿と一緒に帰るために、学校から派遣されたバスに乗ったのがまずかった。

早退したはずの俺を見た教師が、母親にチクリやがった。

ルルン気分で帰った俺を待ち構えていたのは、仕事から帰ってきて着替えもせずに待っていた母親だった。

「言いたいことはわかるわね？沙紀ちゃん」

親父に折檻するときに見せる目をした母親にフルボッコにされました。

フルボッコにされた後、ふらふらと自分の部屋にたどり着き、ベッドに入り枕を濡らす。

親父は偉大だった。

あんな折檻されたらトラウマになるぞ。

その日は母親がらみの恐ろしい夢を見て、何度か夜中に目が覚めてしまった。

そのじゅう

期末試験も終わり、ついに夏休み。

あんなに楽しみにしていた夏休みも、始まってみれば暇なもので、一人でボーっとしている。

椿も有も哀歌もクラブにいつているので、一緒にどこかに遊びに行きたくてもいけない。

有と哀歌はテニス部に入っでがんばっているらしい。

・・・このクソ熱いのに、球拾いご苦労様です。

夏休みに入っでから3日目でこれだ、なにかすることないのかねえ。仕方が無い、ネットゲーで廃人並みのLV上げでもするか。

ネットゲーを始めてから2時間ほどたった。

ふと、時計を見るとちょうどお昼どき。

今日は平日なので、両親は当然仕事に行っている。

さて、なにを作っで食べようかなあつと冷蔵庫を漁っていると、ポケットに入れてある携帯がブルブル震えて着信を知らせる。

ほいほいつと言いながら携帯を見ると、美術部の部長から電話がかっできている。

「はい、お待たせしました」

俺は食材を探しながら電話に出る。

「沙紀さん、今日は暇かな？予定が無いなら2時くらいに美術室に来てくれ。なお、これは連絡網なので他の一年にも伝えてくれ。では」

つとよって電話が切れた。

俺にもなにかしゃべらせろよw

せめて、なんで美術室に集合するのか理由を教えてくださいよ。

まあいい。

さっさと飯を作って支度するかねえ。
つと、その前に電話しないと！

美術室に到着すると、美術部のメンバーが全員いた。

普段はほとんどこない幽霊部員の人も来てるよ。

総勢11人のメンバーだ。

俺も席に着くと部長が「よく来たね」つとやってくる。

しかし、なにが始まるんだ？つと思っていると部長が皆に話し始める。

「諸君、よくぞ集まってくれた。このクソ暑い中、汗をたらたらと流してここまで来てくれたことに感謝する。」
お辞儀して、黒板になにか書いている。

黒板にはデカデカと「毎年恒例！美術部のドキドキワクワク夏合宿という名のお遊びキャンプ！」と書かれている。

部長は書き終えて黒板をバンツと叩き、「新入部員以外は知っているとと思うが」つと前置きしながらメガネを上げる。

「毎年、美術部は予算が余って困っているんだ。使い切らないと予算を減らされる！だから前期分の予算をすべて使い切るために、夏合宿を行う！！！」

偉そうに新入部員に説明しているが、要は年末の道路工事と同じつてことだろ。

「テントはすでに美術部の備品の中にあるので、ここに十万円あるわけだが・・・今から町に遊びん・・・ゴホン、合宿に必要な備品を買いに行こうと思う。合宿は明後日に行うので、生もの系の食料は買わないように！私はゲームセンターに用がある！」

なんで美術部の備品にテントなんてあるんだ。

しかも部長、ゲーセンに遊びに行く気満々じゃねえかw
キリッとした顔で宣言することじゃないだろ。

学校も気がつけよw予算がひどい使われ方をしてるじゃねえか。

「ボーリング場についてもいいし、服屋に行くのもいいな・・・好きにしていそ！予算は一人九千円だ。合宿当日は、9時に学校の門に集合。以上だ！解散」
皆はお金を受け取り帰っていく。
暇だし俺も出かけるか。

くっそ、スクラッチクジで3600円使ってしまった。
4000円で20枚買って200円当たりが2枚だけ。
まったく、あぶく銭でこんなことやったらいけないな。
仕方ない、もう20枚だ！

・・・どうしよう、残り1800円。
もういいや、お菓子でも買って帰ろつと。

当日、学校の門に集合した俺たちは駅に向かっていく。
テントや鍋などの重い荷物は男性陣が持ってくれているので、俺は着替えの服やお菓子が入ったリュックを背負うだけ。
電車で揺られること4時間、あたりにはほとんど家が見えない。
ずいぶん緑豊かな場所だ。
電車から降りて20分ほど歩いたところで休憩を取る。

「ねえねえ、よっちゃん」
皆汗でびっしょりなのに、よっちゃんは汗一つ掻かずに涼しい顔をしてポカ리를飲んでいる。

彼は本当に人類なのだろうか・・・。
「どうした、沙紀。トイレならあっちだぞ」

よっちゃんはポツンと立っている公衆トイレを指差す。

「トイレじゃあないです！ キャンプする場所って川の近くって聞いたんだけど、その川に魚っている？」

川があるなら魚もいると思って、釣り糸と針を持ってきたんだよ。竿は木の棒かなにかで代用できるしな。

「おお、いるいる。去年は皆、遊びにお金をすべて使ってしまった。現地に着したのはいいが誰も食料を持ってきていなくて、現地調達のサバイバルになったからな。服を網代わりにして、魚を捕まえたりしたもんだ」

なんか、さらりと恐ろしいことを言われたような気がする。

今年はそんなこと起きないよな？

大丈夫だろう・・・去年の教訓が生かされているはずだ、きっと。

そういう俺はお菓子しか食料品を持ってきてないけどw

休憩時間が終わり、また炎天下の中を歩き出す。

1時間歩いてやっと山に到着。

しかし、地獄はここからだった。

山頂付近まで登るらしい。

登山開始から3時間、やっと目標ポイントまで到着した。

よっちゃん以外は全員瀕死の状態だ。

誰も立ち上がれるものはなく、よっちゃんが7個あったテントを一人で立てていく。

青中の義彦は化け物か！

立て終えたテントに俺たちはなだれ込み荷物を置いていく。

あー、もう無理！ 川に足をつけて休憩だ。

この部、ワンダーフォーゲル部に改名したほうがいいな。

時刻は午後6時、まだ外は夕暮れの状態。

さすが夏、冬だったら真っ暗で何も見えない時間だがまだまだ明るい。

男性陣が焚き火用の枯れ木を拾いに行っている間に、俺たち女性陣は交代で川に入る。

風呂代わりに川で汗を落とすためだ。

テントの中で持参した水着に着替える。

もちろん見張りも立っている。

さすがに覗きには来ないと思うが、念のためらしい。

女子が全員川で体を清めたあと、夕飯の準備をしようとしたのだが、枯れ木がまだ到着していないために火を熾せないでいる。

まだかなあ・・・。

10分ほどたち男性陣が帰ってくる。

枯れ木がきたので火を熾し、飯盒で米を炊いていく。

おお、炊けた炊けた。

辺りに香ばしい匂いが立ち込める。

このオコゲがおいしいんだよなあ。

生ものはまったく持ってきていなかったの（移動中に腐るから）、缶詰を開けておかずにする。

焼き鳥などをつつきながら、皆でわいわい言いながら食べた。

しかし、今年はちゃんと食べ物があつてよかったな。去年なんて、ここについて早々食料が無いことが発覚し、必死で食べるものを探したものだ」

部長はそういつて涙を流している。

3泊4日をよく生き残れたなw

「あ・・・部長。一つよろしいですか？」

副部長が部長に声をかける。

「どうした、副部長よ！お前もあの日のサバイバルを思い出したのか？」

「それがですね・・・食料、これを食べたらもう米が三合しかありません」

部長はお茶を飲んでいたコップを取り落とし、目が虚ろになっている。

「おうまいがあー、なんてこった。今年もか！今年もなのか！！！
またサバイバル地獄が始まるのかあああ」
おうふ、ついに部長が壊れちゃった。

「部長、安心してください。俺が1800円分のお菓子を所持している
ので、この人数なら1日は凌げるはずですよ」

俺はそう報告し、お菓子をさせる。

まったく、餓死したら洒落にならんぞw

間違いなく、全国区のニュースとして流れるな。

第一、去年も生き残れたんなら、今年も大丈夫だろ？

今回はまだ米が3合と、1800円分のお菓子、後は魚を釣れば完
璧じゃあないか。

つてか鍋とか持ってくる前に、それに入れる具材を持ってくるべき
だと思っただ。

・・・頭が痛くなるな。

「沙紀さん、君はすばらしい。俺と結婚してくれ！」

部長が駄目人間すぎる件w

去年に苦しい思いをしたなら率先して準備しろよまったく！

「だが断る！」

そして俺たちのサバイバル生活がスタートした。

次の日の朝、部員総出で釣りをする。

道具は俺が多めに持ってきていたので、仕掛けが駄目になってもま
だまだ余裕はある。

釣りをするのが始めての人には、俺がやり方を教えていく。

餌は岩の裏にいる小さな川虫だ。

ウグイや岩魚、川八ゼなどを釣っていく。

もちろん小さいやつはリリースしている。

釣った魚は、川の一部を大きい石で囲い、そこに魚を放している。

ある程度釣れたので、朝飯の準備に入る。

よっちゃんが十得ナイフで魚の内臓を取り除き、その他は魚を串に刺し焼いていく。

塩はあったので、それを振りかけてから食べる。

うまい！しかし米がほしいな。

魚ばかりだとやっぱり飽きてくるわ。

魚を食べ終え、皆で水着に着替えて川で泳いでいる。

あれ、よっちゃんがいない。

「部長、よっちゃんがいません」

「いつものあれじゃあないのかな？」

なるほど、今日も厨二病が発動したのか……。

川や海で遊ぶとやっぱり疲れるな。

テントの中で昼寝をしている人がちらほらという。

俺はまだ元気があったので、晩飯用の魚をがんばって釣っているところだ。

しばらく釣りをしていると、草むらがガサガサ音を立てて揺れる。

野生の動物か！？と警戒していると、何かを担いだよっちゃんが顔を出した。

「なんだ、よっちゃんか。ビビらせてくれる」

よっちゃんの担いでいるもの見てみると、なんだかもじゃもじゃの茶色っぽい熊が……。

え？熊！？ちょwなんで熊なんて担いでるんだ？

「よっちゃん……それもしかして熊じゃあないよね？」

俺はよっちゃんに半信半疑で尋ねる。

「違う！これはついさっきまで、熊という名前だったが今は違うぞ。

こいつの名前は食肉1号だ！」

さいですか、尋ねた俺がアホだったね。

そう、そいつは食肉1号ですね、本当にありがとございました。そんなやり取りをしていると副部長が顔を見せる。

「おおお、今年は熊か！でかした義彦。晩飯までにそいつを捌いておいてくれ」

副部長・・・驚かないんですね、あなたは。

ここは本当に美術部なのか・・・。

夕食が始まった。

部員皆で熊鍋をつつく。

熊の手の部分がうめえ、他の部位は硬くてあんまりうまくないが。新入部員は熊を見て初めは驚いていたのだが、他の先輩たちがまったく驚いてなかったので、そういうものなのかと自己完結したようだ。

部長が「去年は生きたままの瓜坊（猪のあかちゃん&子供は、スイカのような紋様があり形もあいまって瓜に見える）を義彦が連れてきたときはびっくりしたなあ。あのつぶらな瞳に見つめられて胸にグツときたが、あまりの空腹に結局鍋にしまったのを思い出すよ」なんて言っている。

猟友会の方々に見つかったら、頭を散弾銃で吹っ飛ばされるようなことをしていたんだな。

しかし、よっちゃんよ。瓜坊はまだわかるが、どうやって熊を捕らえてきたんだ。

まさか、金太郎みたいに相撲をとったんじゃないだろうな。

いや違うな、もし相撲をとっていたにしても熊が死ぬような相撲はもう相撲じゃあない。SUMOUだ！

どうやって捕らえたのか、よっちゃんに聞いても苦笑するばかり。

俺は熊が捌かれたであろう場所に手を合わせてから、再び熊鍋をつつき始めた。

夕飯後、川で体を清めテントの天辺にランタンを吊るし、俺の持つ

てきたお菓子を景品にして、ポーカーをして盛り上がった。
遊び終え、皆自分のテントに戻っていく。

男子は複数で一つのテントに入り、女子はペアで入っている。
相部屋？の先輩が寝てしまったので、目が冴えている俺はトイレの
ためにテントを出る。

用を足して戻つてくると、よっちゃんがテントから少し離れたところで
「静まれ俺の左腕よ！！」とかいつもの病気を発症している。
俺は見なかったことにしてテントに入り瞼を閉じた。

毎年恒例！美術部のドキドキワクワク夏合宿という名のお遊びキャ
ンプ！という名のサバイバルは終わった。

もうあれだ、来年は病気だと偽り絶対に行かないからな！

「っで、よっちゃん。あの熊はどうやって捕まえたの？」

「っく、それ以上聞くな！くそ、ライアスはどこにいるんだ。これ
以上左手を押さえておくことはできないぞ！」

この人、都合が悪くなるといつもこれだよ！

そのじゅうち

夏休みも残すところ後4日。

まったく終わっていない宿題の山を一瞥し、今日も蒸し暑いなど現実逃避しつつアイスクャンディーを舐める。

エアコンの設定温度を21度まで下げてはいるが、全然涼しくなっていない。

地球温暖化の弊害だな。

締め切った窓の外から、ミンミンと蝉の求愛活動が聞こえてくる。

駄目だ・・・まったくやる気が沸いてこない。

いやもう、明日は椿も部活は無いだろうし、宿題を写させてもらおう。

そう決めた俺は、早速椿に宿題を見せてほしいと手早くメールを打ち、送信ボタンを押して携帯をベッドに放り投げ、PCの前に座りネットゲームを始める。

俺は・・・明日から、明日から本気を出す！

次の日に椿から宿題を受け取ったが、まだ時間はたっぷりあると自分に言い訳をし、椿と一緒に町に遊びに出かけた。

遊びつかれた俺は、帰宅するなり飯を食い、風呂で体を清めてから布団に入る。

今日もまったく宿題に手をつけることができなかった・・・。

明日こそ、明日こそ宿題を片付けてくれるわ！

固い決意を胸に、俺はゆっくりとまどろみの中に落ちていった。

.....

結局、すべての宿題を写し終えたのは最終日の深夜であった。

学校が始まり、椿と共に学校に向かいながらくだらない話をしつつ歩く。

誰と誰が夏休みの間に付き合い始めたかの、武君とメールアドレスを交換したのはいいが内容は沙紀ちゃんのことばかりだ！などと言いながら、笑ったり、頬を膨らませたりと表情をコロコロ変えていく。

椿のマシガントークに適当に相槌を打ちながら、重くなった瞼に活をいれつつ足を出す。

昨日、深夜2時まで徹夜してたんだ・・・俺。

朝から元気ハツラツな椿の相手は結構つらい。

周りを見ると顔色が悪く、眠そうな顔をした学生をちらほら見かける。

君たちも徹夜組みか・・・。

フラフラとした足取りで学校に登校する生徒は、さながらホラー映画に出てくるゾンビのようだ。

俺もきつと、あんな感じになってるんだろうなあ・・・。

学校に着いたらHRが始まるまで寝るか・・・なんて考えていると椿から声がかかる。

「ねえ、沙紀ちゃん。私の話ちゃんと聞いてる？」

椿を見ると、いかにも「私怒ってます！」といった表情でこちらを睨んでいる。

「すまん、ボーっとしてて聞いてなかった。なんの話だっけか？」

椿の鋭い視線に怯んだ俺は、言い訳せずに素直に謝る。

「もう、だから二週間後の文化祭の出し物についてだよ。夏休み前に教室の掲示板にプリント張ってあったでしょ？夏休みの間に出し物の案を一人一つ考えてきなさいって」

ああ、確かにそんなの掲示板に張ってあったな。

中間テスト前にやるから準備期間が短いので、夏休みの間に出し物を考えろって担任も言ってたような気がする。

「出し物ねえ・・・椿はなにを考えてきたんだ？」

何も考えてきてない俺は、とりあえず椿の案を聞いてみる。

「私は皆が使つてない物やいらぬ物を持ち寄つて、フリーマーケットみたいにするばいいと思うんだけどなあ。売り子を交代ですれば、他のクラスの出し物とかも回れるだろうし。売れたお金で打ち上げとかもできるし！」

フリーマーケットか・・・。

家の親父は2000円くらいでなら売れるかもしれないな。

「つで、沙紀ちゃんはどうなのを考えてきたの？」

「つふ、俺か？俺はもちろん・・・。」

「遊ぶことに夢中で、文化祭のことを完全に忘れていたでござる！」

学校にたどり着いた俺たちは、「おはよう」と挨拶しながら教室に入った。

教室の中には日焼けで真っ黒になった男子が、窓際で夏休みに起きた出来事を話し合いながらワイワイと騒いでいる。

他には教室の隅の方で、一組の男女がいちゃいちゃとしている姿なども目に入ってきた。

周りの人間を近寄らせない、濃密な甘い空間を形成していた。

朝っぱらからなんて甘ったるい空気を出しているんだ・・・、教室の一角が異界と化している。

なるほど、椿が言っていたのはこの子たちのことか。

まあ、このくらいの時期になってくると付き合い始めたりする奴とも出てくるからな。

女子たちがそんなカッブルを羨ましそうに見て、キヤアキヤアと恋バナに華を咲かせている。

俺はそんな面々を尻目に、まっすぐに自分の机に向かい鞆を枕代わ

りにして眠る体勢に入る。

俺は眠かったらどこでも寝れる体質なので、喧騒とした教室の中でも余裕で眠れるのだ。

今は7時50分、担任が来るまであと40分あるな。

それじゃあ、お休みなさい……。

横の席の椿に肩を叩かれて、俺は目を覚ました。

時計を見てみると8時35分。

あら、もうHR始まつてるじゃん。

教壇にはすでに担任教師が立っていて、なにやら話をしている。

「それから、全校集会が終わったら1時間だけ文化祭の取り決めをして、今日は解散になる。連絡事項は以上だ。質問ある奴はいないか？いないのならHRが終わり次第、体育館に集合だ。学級委員、挨拶を頼む」

委員長が「起立、礼」と言ってHRが終わり、また辺りが騒がしくなる。

担任の話をまったく聞いていなかった。

いや、集会が終わった後で椿に聞けばいいし。

眠い眼を擦りながら立ち上がり、椿と共に体育館に向かって歩き出した。

全校集会は無事に終わった。

いや、無事ではないな。

校長の30分にも及ぶ長い話を立ったまま聞いていたので、何人かの生徒は貧血や暑さで倒れて保健室行きになった。

体育館には全校生徒が集まっていたので、500人ほどの人間が寿司積み状態だったのが悪かった。

それに加え、今日の気温は30。

そんな状態の体育館はいるだけで地獄なのに、校長の長話のせいで犠牲者はさらに増えた。

ドヤ顔で話を締めくくった校長は教頭にマイクを渡し、階段を下りて椅子にどっかりと座る。

夜道には気をつけるんだな校長よ。

生徒どころか教員すらも、明確な殺意の籠った視線をあなたに向けているぞw

教頭もそんな空気を敏感に察知して、話をさっさと切り上げて全校集会は閉会した。

教室に戻ってきた俺たちは、汗でびっしょりなつた体を下敷きで仰いで乾かしつつ、担任が来るのを話しながら待っていた。しばらく話をしていると担任が教室に入ってくる。

席を離れて話をしていたやつらは、慌てて自分の席に戻っていく。静かになったのを見て、担任は委員長に挨拶を促し、そしてHRが始まった。

「よし、朝に決めた生徒会の役員の話だが・・・藤堂を職員会議で推薦しておいたぞ」

えっ？なにそれ。

「先生、ちよつと待ってください。生徒会ってなんのことですか？俺はたまらずに担任に質問する。」

「何って、朝のHRで決めたじゃないか。各クラスに一人、生徒会に立候補しないといけないから候補を募ったが、誰も立候補せず。決まらないからクラスの皆で誰かを推薦しようってことになって、お前が選ばれたんじゃないか」

ちよw俺が寝ている間にそんなことがあったのかよ。

まさに寝耳に水。

なんだよそれは、椿は一言も言っていなかったぞ。

俺は慌てて椿の方を見ると、ツバキは顔の前で手を合わせて舌を少し出し、ウィンクしながら笑っている。

黙っていたんですね椿さん、後で母親から受けた折檻をあなたに体験させてあげるので覚悟して置いてください。

「それでだ、前期の生徒会は3年もいるが、後期は1・2年だけで生徒会を運営することになる。3年は受験で忙しくなるので生徒会には立候補できないからな。文化祭が終わったら、中間試験の前に選挙があるのでそのつもりで」

そう締め括った担任は文化祭の出し物について語れと委員長に丸投げし、鞆から「ドキドキ女子中潜入大作戦 幼女パンツもあるよ」と表紙にプリントされたライトノベルを取り出して堂々と読み始めた。

仕事しろよw

しかもひどいタイトルだな……。

いつかこの担任、ワイドショーを賑わすような犯罪を起こさないだろうな。

中学校の教室でそんなの読んでたらアウトだろ。

それにしても生徒会選挙か。

俺が生徒会に入ることはないだろう。

どうせ選挙で落ちるだろうしな、まあ心配はあるまいて。

文化祭の出し物の案を委員長が黒板に書いていき、出た案の中からこれかと思うものを投票して選ぶ方式で決められることになった。俺は無難なお化け屋敷に投票しておいたのだが、果たして何に決まったのだろうか。

「それでは、文化祭の出し物の集計結果が出たので発表します」
ガヤガヤと騒がしかった教室内は静かになっていく。

委員長はそう言うてから、黒板にサラサラと綺麗な文字を書き上げ

ていく。

どれどれ、何に決まったのかねえ。

黒板には「性別逆転喫茶」と書かれている。

ちよw誰だよこんなのに投票したやつは。

ネタじゃあなかつたのか。

「性別逆転喫茶が37票、お化け屋敷が2票、映画上映が1票。よつて性別逆転喫茶に決まりました」

委員長の言葉に周りが「ワー」といった歓声を上げている。

おいおいwクラス全体で40人しかいないのに、そのうちの92%が喫茶に投票したのかよ。

武以外はまともなやつしかいないと思っただけだ……どうやらその考えは改めないといけないようだな。

「それでは発案者の武君、概要をお願いします」

委員長はそう言っただけで自分の席に戻っていく。

なるほど、こんな変態チックな喫茶を考えたのはやはり武か。

武は教壇に進み出ると、気障たらしく髪の毛を掻き揚げながら話し始める。

「性別逆転喫茶とは、男子は女子の制服を着て給仕をする単純な作業だ。このクラスはちょうど男女比が1:1なので制服の交換には困らないだろう。コーヒーやオレンジジュース、コーラなどを一杯200円で販売しようと思っている。しかしだ、私はそんなことは、はっきり言っただけでもいい。発案者がこんなこと言っただけ駄目なのだろうがね」

武は目を瞑り、深く息を吸い込み胸に手を当てる。

「私はね、諸君。沙紀さんの制服を着たいのだよ……。それだけの為にこの案を出したといっただけでもない。私は着たい！Vパン一枚で沙紀さんの制服を……！」

教壇をバンッと拳で叩き、クラスメイトに熱く語っている武に、なぜか皆引き込まれている。

「諸君はどうだ！？気になる人や好きな人の制服を着てみたいと・・・香りを思う存分嗅いでみたいと思わないのか！」

手を上下させて激しいジェスチャーを繰り返す武。
なぜだろう・・・独裁者の演説を見ているようだ。

言っていることは変態そのものだが、クラスメートも武の変態発言にはもう慣れっこなので気にする様子がまったくない。

「しかしだ、それだと必ず制服を交換してもらえない者も出てくるだろう。そこでだ、一旦すべての制服を集めてから再分配！これで全員に行き渡るはずだ」

一人の女子生徒が手を上げて武に質問する。

「それだと、気になる人の制服が着れないと思います」

武はそれを聞くと、鬼のような形相で女子生徒を睨みつける。

「君にはその人に対する想いが足りないのだよ！たかが1/20の確立さえクリアできないような軟弱者め。そんな弱腰でどうする、必ず掴み取るという気概を見せてみる！ねだるな、勝ち取れ」
気概で確立突破できるとか無茶すぎるだろ。

女子生徒は武の言葉に感動したのか涙を流しながら頷いている。

「飲み物やコップを買う以外は特に準備するものも無いので、当日に制服を交換すること意外やることはないと思われる。以上だ」

武はそう締め括り席に戻った。

当日がすごい不安になってきた。

いくらなんでも適當すぎるだろ・・・。

文化祭当日。

青山学園中等部の文化祭は休日に行われ、一般開放されているので人でごった返している。

1年4組のメンバーは、朝の7時に学校に集合して制服を交換し、すでに準備は整っている。

交換するときに一悶着あったので、すべてが終わったのは8時45

分。

9時から始まるので結構ぎりぎりだったと思う。

前日に哀歌と有も見に来ると言っていたので、休憩時間を利用して一緒に回ろうと思っている。

そのときに椿を紹介しないとなあ。

有や哀歌には、椿のことを何回か話したことはあっても会ったことはないからね。

9時になり、文化祭が始まった。

生徒より一般のお客さんの方が多く来るだろうと担任が言っていたが、どうやら本当のようだ。

孫でも見に来たのだろう。

4人連れの老人たちが入店してくる。

「いらっしゃいませ、ご注文がお決まりになりましたらお声をおかけください」

そういつて女子生徒が対応している。

まあ、注文っていつても3種類の飲み物しかないわけだがw

「ええと、それじゃあコーヒー四つで」

「畏まりました、少々お待ちください」

そういつて注文をとった生徒は、カーテンで仕切られた敷居の中に入っていく。

基本注文は女子が取って、運ぶのは男子だ。

しばらくするとカーテンの中から、お盆を持った男子生徒が姿を現す。

「お待たせしました。ご注文のコーヒーになります、熱いのでお気をつけください」

老人たちはお絞りで汗を拭きながらコーヒーを受け取るうとした。

「ああ、ありがと・・・う・・・ね」

バシヤンと音を立ててコーヒーの入ったカップを取り落とす老人たち。

無理もない、ミニス力を着た(男子の体格だとミニに見える、女子

が着るとひざ上4cmくらいの長さ）脛毛丸出しの男子生徒がコーヒーを笑顔で運んできたのだ。

年を召された方々じゃあなくてもショックを受けるだろう。

俺ですら始めに見たときは吐きそうになったからな。

老人たちは結局コーヒーを飲まずに、呆けた顔をしてお金だけ払って出て行った。

3時間が経過しお昼休み、そろそろ有たちが来る頃だ。

携帯の電源を入れて、電話をかけると二人はもう校門まで来ているとのこと。

椿を連れて俺は二人を迎えに校門へ向かう。

合流した俺たちは軽い挨拶と自己紹介を済ませた後に、他のクラスの出店などで食料を調達してから屋上で昼飯を食べている。

椿と二人は短い時間ながら意気投合し、今では昔からずっと一緒にいた幼馴染のように仲良く話している。

うんうん、いいことだね。

今度4人で遊園地にでも一緒に出かけたいね。

ご飯を食べながらくだらないおしゃべりしていると、突然哀歌が箸を止め、神妙な顔をして椿に変なことを聞き始める。

「ねえねえ、椿さん。さっちゃんってやっぱりモテたりするのかな？」

急に雰囲気が変わった哀歌に驚きつつも、椿は質問にどもりながら答える。

「え、えっと。そうだね、モテてはいるのかなあ？どちらかといえば、男子より女子に人気があると思うけど」

有も済ました顔をしているが箸が止まっている。

耳がダンボのようになってますぜw

「ふうん、さつき廊下ですれ違った男の子……。さっちゃんに親

しげに話しかけていたけど、どういった関係なのかな・・・さつちやんとは？

「ああ、武のことか。」

「武君のこと？武君は沙紀ちゃんにゾッコンかな。沙紀ちゃんは全然相手にしてないけど、私は武君はすごくいいと思うんだけどなあ。かっこいいし、何より時折見せる真剣な表情とかドキツとしちゃう！」

椿はクネクネと体をひねりながら、盛られた焼きそばに箸を絡ませている。

ほんと椿は武がらみになると恋する乙女スイッチが入るよな。

蛇みたいに体をクネクネさせるのをやめてくれませんか？

「椿よ、トランクス一枚で「お昼ご飯一緒に食べませんか？」なんて迫ってくる男のどこにドキツとする要素があるのか聞いてみたいものだ。顔がいいのは認めるが」

顔がいいって得だね。

武みたいな変態行動を起こしても、ちょっと変なイケメンで通るのだから。

「その武ってクズはさつちゃんに、そんな変態さんみたいな格好で迫っているんだね。さつちゃんの匂いのする制服を着ていたし。ボクのさつちゃんに・・・絶対に許さない」

哀歌はブツブツと小さい声でなにかつぶやき、買ってきたお好み焼きに箸をザクザクと突き立て始めた。

「ごめんね皆。ボク、大切な用事を思い出したからご飯を食べたら帰るね」

哀歌は歪んだ笑顔を浮かべながら、お好み焼きを食べていく。

俺たちは急変した哀歌に戸惑いながらも、喫茶の交代の時間が迫っているので急いでご飯を食べるのであった。

「委員長、武君がいません」

「武君か・・・どっかでサボっているんじゃないだろうな」

放課後、体育館裏で尻に割り箸を20本ほどねじ込まれてヒクヒクしている武を用務員のおじいさんが発見した。

後日、警察が学校に来て関係者に聞き込みにきたり現場検証をしたりと、がんばって捜査を続けているようだが犯人はまだ捕まっていない。

そのじゆつに

季節は春、中学を卒業し明日は高校の入学式。

早いものだな・・・。

中学校生活では色々あったっけ。

文化祭が終わってから書記として生徒会に入ったり、大晦日に皆で除夜の鐘を突きに行ったり（武はもちろん勝手に着いてきた）、2年の後期には生徒会長を無理やりさせられたり、修学旅行で沖縄に行ったりと大変だったり楽しかったりと色々あった。

卒業式が終わった後、椿が顔をぐちゃぐちゃに歪めて抱きついてくるから（制服に涙と鼻水がいっぱいついた）、不覚にも俺も目から大量の汗が（なっ、泣いてないぞ！）出てしまった。

葵も泣きながら、俺に何かを伝えようと顔を下げたり上げたりしながら、こちらの様子を伺いつつキリッとした顔でこちらに近寄って来る。

葵は一度深呼吸し、顔を赤らめながら「第二ボタンを・・・ください」なんて言ってきやがった。

やめるよw俺は女だし、俺たちの背景に、真っ白な百合の花が咲き乱れてるだろうが！

「しょ・・・しょうがないなあ」なんて言いながらボタンを渡してしまった俺もどうかしているんだろう。

3人とも違う高校に進学することになったから、学生としてこうやって3人で集まれることはもうないだろう。

椿は他県のアーチエリーの強い高校に進学するようだ。

葵は青山学園高等部に。

俺は自宅から徒歩10分、自転車で4分の地元の高校に行くことになった。

そうなんだ、ストラバ本編で藤堂 沙紀その人が通っていた高校に

行くことになった。

そうあの虹色学園高等部にだ。

えっ？主人公と遭遇しないかって？

この世界はゲームの世界と少し違って武は俺と同じ中学だったし、そもそも俺が有と違う中学に行ってる時点で原作崩壊しているからな。

有も別に心引かれる男に、中学で出会ったわけでもなさそうだし・・・。

なにより武の件もあるから原作知識はまったくあてにはできない、だから別に怯える必要はないと踏んで虹学に進学することになった。まあ・・・大丈夫だろう。

本当の理由は家からすごく近いからなんだけどなw

高校入学式当日。

朝のイベント（もちろん父親関係）もサラッと消化し、高校に行く支度をしていると玄関のチャイムがなる。

支度を終え、玄関に向かい扉を開けると、そこには真新しい高校の制服で身を包んだ哀歌と有の姿が。

哀歌は最近、中性的だったのがだんだん男っぽくなってきているようだ。

肩幅や体つきが少しがっしりとしてきて、顔も男性的なイケメンに進化しつつある。

有もどこか儂さげな雰囲気的美少女だったが、中2あたりから前髪を少し切ってパツと見は活発な美少女になっている。

体つきも俺より女性的になって、前世の俺だとノックアウト確実な美少女になっている。

「おはよう、さっちゃん！迎えに・・・来た・・・よ」

花丸の笑顔で元気よく俺に挨拶をする哀歌だが、途中で呆けたように口を開き頬を真っ赤に染めて下を向いてしまった。

「おうおう、おはようさん。二人とも早いな、まだ20分は時間に余裕があるぞ」

有の方を見ると、まるで呪文を唱えるように小言でなにやらブツブツ言っていたが、すごい形相で俺を睨みつけ「おはよう・・・さっちゃん」つと言ったきり、またブツブツと何かつぶやいている。

少し聞こえてきた音声を拾ってみると、「ブラウスのボタンが・・・」や「スカートの丈が・・・」とか「きつと、さっちゃんはこれを狙って・・・」など聞こえてきたが何を言っているのやら。朝から有の機嫌があまりよろしくないようだ。

「上がってリビングで待っていてくれ、俺もすぐ行くから」とりあえずトイレとか済ませてリビングに向かうか。

.....

リビングに戻ると、そこには有と哀歌、そしてなぜか武の姿が。

「H A H A H A H A、沙紀さんおはよう。今日はまた格別にcuteだね。また同じ学校に通うことになるとは！これはまさに運命」両手を大きさに広げて天を仰ぎ見る武。

なにが運命（）だよ！お前が俺の進学先をこそそと調べてたのは知ってるんだぞ。

しかもなに勝手に家に上がってんだよ。

さも当然って顔してお茶飲みやがって。

「母さん、なんでこいつを家に上げたんだ！」

さっきからニヤニヤしている母親に、俺の怒りのボルテージが徐々に上がっていくのがわかる。

「なんでって、沙紀ちゃんのいい人じゃあないの？」

なんて言いながらウインクしてくる。

「違うに決まってるだろ！まったく・・・」

俺の言葉を聞いた母親はさらにニヤニヤが増していく。

「沙紀ちゃんはツンデレさんねえ、隠さなくていいから。入学式の

朝に迎えに来る王子様のような男の子。お母さん、この展開だけでもうくらぐらしちゃいそう」

さいですか、もう好きにしてください。

結局、高校に向かう道中は武も一緒だったのは言うまでもない。

入学式は体育館で肅々と行われ、たいしたイベントもなく1時間ほどで終わり、俺たちは掲示板に張られたクラス分けの一覧を見るために、大混雑の掲示板前の人ごみを掻き分け進む。

俺の名前はと……おお、あつたあつた。

学籍番号29102 藤堂 沙紀 1年4組

他の名前を見ると哀歌や有や武も同じクラスのようにだ。

後は知らない名前の奴ばかりで見知った奴はいなさそうだ。

さて、高校生活はどんなことが待ち受けているのだろうか。

クラス分けを見た俺たちは教室に向かって歩き出した。

そのじゆつに(後書き)

本編開始

プロット通りに進まないなんてよくあること。

もう適当に進めていくしかないかもしれないかもしれないかもしれないかもしれない。

しりょう

随時追加されていきます

人物

藤堂 沙紀 (とうどう さき)

転生者 元男 仕事は外資系のベンチャー企業を立ち上げて大成功。

若手のやり手だったが、エロゲをやりおえ寝ようとしたが心臓破裂で死亡。

前世は天才、超人と呼ばれていた。

この物語の主人公。

転生先はエロゲ ストラバのメインヒロイン。

恐ろしいほどの美貌の持ち主になる予定。

今はまだかわいいだけだが……。そしてこれはエロゲ！

勿論、男の主人公が出てくるだろうが沙紀は逃げ切ることができるのだろうか！（実はすでに、哀歌にフラグが立っているが！）

斎藤 哀歌 (さいとう あいか)

男の娘 性別は男

ストラバの主人公

ストラバはプレイヤーが主人公の名前をつけるので。（デフォルトが哀歌）

沙紀は哀歌がストラバの主人公と気がついてない。（沙紀は哀歌が女の子と思っているので、哀歌のことをモブと思っている「小学に上がるまで」

哀歌は沙紀が、自分のことを女の子の息子と知っているかわかったが、男だとカミングアウトすることができず、自分から離れて行くことを恐れ、スカートなどを着て誤魔化している（この頃の子供は性別が違つとなかなか輪にはいれない）

哀歌の母は腐気味の女傑で、にゅーふあっしょん（笑）に夢中で哀歌に女物の服を渡していた。

織原 有（おりはら ゆう）

性別女 将来的にヤンデレになる。

いつも一人のポニテっ子。本来であれば哀歌が寂しさのあまり一人の有に声をかけて、有と哀歌がおままごと結婚式をするはずだった（笑）

しかし沙紀の介入により少し変わることになる。 がしばらくすると哀歌を好きになる美少女。

主人公（哀歌）が別のヒロインルートに行くと刃物をもって主人公（哀歌）のアパートに押し掛けくる。

選択肢を間違えると生死をさ迷うルートもあるとかないとか。

本郷 武 ほんごう たけし

性別 男 主人公のライバルキャラ。イケメンで本郷財閥の跡取り。世界で自分より美しいものは無いと自負している。主人公がフラグ

を立てようとする相手に、猛烈なアタックを仕掛ける

。普段は少し気障だが気のいいやつである。そう、変態じゃなければ！ストラバ本編ではヒロインに告白する際、突如、上半身裸になり腕立て伏せをしながら「君のことが・・・君のことが好きだ！」
と言いつつ変態なのである

。本来ならば、有と哀歌と同じ中学に行くはずなのだが、なぜか沙紀と同じ中学に。余談ではあるが、某掲示板でストラバの人気キャラ堂々の？1である。

初代仮面ライダーと同じ名前なので、変態だし「変態ライダー」と命名された。

ベアー様

性別 男

駅のベンチや公園のベンチ、ありとあらゆる場所に現れる神出鬼没な男。

薔薇騎士同盟の盟主で、薔薇薔薇しいことが好きな人たちには大人気。

トレードマークの紫のツナギと、頭につけた薔薇が目印。

デビューしたての若い男の子を引き込み、ハーレムを目指す傑物。

同盟に参加している若い男の子たちの憧れの的でもある。

しかし女は大嫌い！

伊賀 栗男

性別 男

通称イガ栗

いつも女の子を追っているのか、なぜかヒロインたちの主人公への好意やその度合いを完全網羅している変態。

エロゲの
主人公の大親友を自負している。
しかしただのイガ栗である。

あいかわ
相川 春菜

性別 女

サブヒロインの一人。

通称ナツパ

あるルートでは主人公に強姦まがいのことをされかかるが武力で撃退した武士っ子。

某掲示板においてDSの大きなお友達に大人気のナツパちゃん。

ルート入りして×××するときのアブノーマルさはストラバNo.1
ただのDMである。

ついでに春菜の二つ下の妹もサブヒロインである。

ナツパは沙紀より一つ上です。

あいかわ
相川 夏菜

性別 女

サブヒロイン。

ストラバにおいてルート入りをするとはぼハッピーエンドになる。
初心者にお勧めのヒロイン。

有と春菜はまるで地雷原のようにバッドエンドが散りばめられているのに対し、誰に話すかの選択肢で「夏菜」だけを選んでいれば無事ハッピーエンドに。

モブ紹介

藤堂 茜&昭彦

沙紀の父と母

竹中 椿

沙紀の同級生兼友人

田中 祥子

中学生剣道では、禁じ手の突きを沙紀に直撃させられた哀れな先輩
剣道初段

立浪 義弘

通称よっちゃん、皆に好かれる頼れる先輩。

沙紀とは美術部で知り合った。

周りの人たちは彼が厨二病を患っていることを知っているが、皆そのことには決して触れない

そのじゅっさん(前書き)

もう文章メチャクチャ。

プロット完全無視。

適当に書いて投稿。

しかも不定期更新。

ほんとごめんなさい

アワワ、(、、；、；、(、) アワワ

そのじゅっさん

教室でHRが行われ、担任教師の挨拶も終了し今日は閉校となるよ
うだ。

HRが終わると同時に騒がしくなるクラスの雰囲気は軽いため息を
が出てくる。

まったく皆元気だな……。

こちらら朝から体力を激しく消耗したから騒ぐ元気なんてないわ。

俺がぐったりと机に突っ伏していると後ろから黄色いキャピキャピ
声が届いてくる。

うっせーwもう少しポリウーム落としてしゃべれよ。

気だるいながらも顔を上げ後ろを振り向くと、そこには女子の群れ。
なにこれ、怖い。

もう群れつてか肉壁！

女子が肉壁の真ん中にいる人物になにやら矢継ぎ早に質問を浴びせ
かけているようだ。

俺は好奇心に負け、立ち上がり肉壁に近づいていくと中心には武が。
「ねね、武君って誰かと付き合っているの？」

一人の女子が武に恋愛関係の話題を振ると、他の女子も興味津津な
のかしゃべるのをやめ辺りはシンと静寂が漂う。

武は教室をキョロキョロと見渡し俺を見つけるとニッコリ笑ってい
る。

「付き合っている方はいません、しかし結婚を前提としたお付き合い
をしたいと思っっている方はいます！」

キリリとした顔で応える武に周りの女子は胸にキュンと来たようだ。
モミクチャにされている武を尻目に、なんだか負けた気分させら

れた俺は哀歌と有を伴って帰宅しようとしたが、哀歌は職員室に呼ばれたようなので有と一緒に帰ることにした。

まあ、たまには女二人で帰るのもいいかな。

くっそ、なんで武はあんな変態なのにリア充なんだよ！

爆発しろ！！！！

入学してから4日経ち、衝撃の事実が発覚した。

エロゲによく出てくる主人公の友人ポジションの男がいるのである！その名も伊賀 栗男 通称イガ栗、主人公がイガ栗に話しかけると問答無用で各ヒロインの好感度や友好度を教えてくれる武とは、また違った意味での変態である。

しかし、皆知り合いや友人がいるのにイガ栗ときたらもう四日たつのに一人ぼっちなんだが・・・誰か声かけてやれよw

俺？俺はお断りさ！

よく考えてみるよ・・・。

何故イガ栗は主人公へ好意を持つヒロインの恋愛度指数を知っているか？

おかしいと思わないか？

俺の予想ではきつとストーカー的な何かをしているに違いないと思っっている。

一応メインヒロイン（ ）の俺はストーカー被害に合わない様に関わらないようにしている。

つと授業開始のチャイムか、どうせ担当教師の自己紹介と馬鹿話で終わるだろうから寝るか・・・。

授業が終わり移動教室なのでささっと支度して移動を開始する。

哀歌、有、武は英文？を選択しているので俺とは別のクラスだ。

この四日間なぜか俺に取り巻きの男子3人と女子4人ができてい

たので、そいつらと他愛の無い話をしながら移動している。

こいつらは中学の時に部活でバレー部だったらしく、中学の時の俺のバレーの試合を見に来ていたんだとか。

2年のときも人数が一人足りなかったもんな・・・怪我とかで！結局俺はまた出る羽目になったのは懐かしい思い出だ。

「沙紀さんのあのアタックのときのドSな目を見たさに応援に行つたからね、今度一緒に僕たちとバレー部の見学に行かないかい？」
この・・・物好き共め！

「すまん、高校では帰宅部予定なんだ。他を当たってくれ」

確か本編なら藤堂 沙紀はテニス部に入部してたんだっただか・・・。テニスの試合を見に来た主人公が転んで、藤堂 沙紀の胸に顔面ダイブするラッキースケイベントがあつたっけか。

もうこの世界に来て16年。

主要な流れは覚えているがさすがに細かい設定は忘れちまつたな。

おっと授業が始まつちまう、急がないとな。

お昼休み、哀歌たちと机をくっつけて昼飯を食べているのだが・・・

・イガ栗もなんで一緒にいるんだよw

「さっちゃん、この人はね」

哀歌の説明を要約するところなる。

教室を移動して英文？の授業が始まったが教科書を忘れたことに哀歌が気づく やべええ 横にいたイガ栗が「よかつたら俺の教科書をry」 机くっつけて意気投合 飯も一緒に食おうぜ！こんな感じで仲良くなつたらしい。

なんか1時間も経たない間に異常に仲がよくなっている二人を見ると、まさかこいつら禁断の関係じゃあつと勘繰ってしまうのは仕方が無いよね？

こうして武を含む5人の仲良し（）グループが出来上がった。

もう好きにしるよw

哀歌以外原作メンバーなのはどいうこった（・A、）
主人公がいなのがせめてもの救いです。

「てりやああああああああああああ」

鬼のような形相で俺に殴りかかってくるお団子頭の女。

俺は世紀末伝承者のごとき拳の雨を避けつつ考える。

どうしてこうなった・・・と。

出会いは唐突に、運命ではなく必然で。

だるい授業を終え、HRも終わり放課後の喧騒とした雰囲気の中、他のクラスメートは部活見学に行くらしく、哀歌たちも例外ではなく部活を見学しに行くので今日は一人で帰宅することになった。やっぱり俺も部活に入らないまでも見学しに行けばよかったな、と一人ごちつつ帰路に着く。

まあいいや、さっさと帰ってネットゲーで知り合った奴隷犬って名前のPCとボス狩りでも行くかっと思えているうちにもう校門まで出てきた。

ふと校門の横を見てみると門に背中を預けている人影が目に入ってくる。

よくよく目を凝らして見ると校門のすぐそばに剣呑とした気配を噴出している、武士のような綺麗系のお姉さまがあっちをキョロキョロ、こっちをキョロキョロ。

誰か探しているのかな？っと思っているとパチリと目と目が合う。

はて？どっかで見たことのある顔だが……。

誰だったかなあ……思考を巡らしているとお姉さまがツカツカとこちらに歩み寄ってくる。

俺の目の前まで来て止まり、俺を上から下まで値踏みするようにじろじろと見てくる。

ちよwなんて失礼な奴なんだよ！

なんか用っすか？つと口を開こうとしたところ、お姉さまが先に口を開いた。

「貴様の名前は藤堂 沙紀で違ういな？」

およおよ？何故俺の名前を知ってるんだろ？

「あつああ、間違いないが」

俺の肯定の答えを聞いたお姉さまがニヤリと笑い、腕を高々と上げてなにやら悦に浸っている。

どっからどう見ても危ない人です。

本当にありがとうございます。

危険人物と発覚したので、俺は「では！」と言ってトオセンボしていた危ないお姉さまの横を素通りしようとしたとき、肩をがっしりと掴まれてしまった。

「まあ、待て！時間はたつぷりあるから付き合ってもらおうぞ」

それはお前の時間だろうがw俺はネットゲーという用事があるんだよ！俺が IN しないと 奴隷犬が 死んじゃうん だよ！

「私の名は相川 春菜！我が友、田中 祥子の敵討ち……いや今はそれはいい。斎藤 哀歌を賭けて私と勝負しろ！」

おk、誰だかわかったわ。

頭の中にプリンと暴力が詰まっている、サブヒロインの一人 通称 ナツパカ。

脈暦もなくいきなり訳のわからんことを叫んでいるが……どうしよう。

肩をしつかりホールドされちまった。

脱出不可能になった俺を、売られていく子牛のように引っ張りなが

ら体育館裏に連行していくのであった。

ドナドナドーナ

冒頭に戻る。

くっそwどうしてこうなった。

田中 祥子？哀歌を×？田中って人が誰かわからないし（7話参照、
しっかり出てます）、哀歌を×だって！

こいつまさか腐ってるのか、ガチで腐女子なのか！

哀歌と誰を×ってんだよ……。

掛け算の上手なお嬢様め！

てかこいつ、どこで哀歌と知り合っただら？

考えている間もブンブンと俺の横を拳が通過していく。

うほ、あぶねええ。

俺が避けた拳が残像となって、後ろのブナの木に直撃しミシミシと
音を立てて折れていく。

当たったら確実に死ぬじゃねえかw

「どうした、避けてばかりではつまらんぞ。あの祥子を倒したんだ、

この程度ではあるまい！！！」

oh、だから祥子って誰よw

もうやだこのプリン頭。

脳みそやっぱり詰まってなさそうだわ。

もうマジで死ぬかもしれん。

破れかぶれでタツクルしてこいつを怯ませて、その間に逃げるか。

なあに、前世では韋駄天の神山って呼ばれてたんだ。

怯ませた隙に逃げるくらいはして見せるさ。

ナツパの荒ぶる拳を避けながら、決死のダイブタツクルを敢行する。

(´・`・´)っ *´、*∴。 . . . * . . . *

もうどうにでもなれ

俺の決死のダイブはナツパの腰には当たらず、あの……あれだ。

女性の大事な場所に直撃したわけなんだが。

目の前にはなぜかパンティー……。

ここに来てまさかのラッキースケベ。
やっぱり俺が・・・俺が主人公だ！

しかしいつまでもこうしているわけには行くまい。

これはまずいと思い抜け出そうとしたのだが、なぜか頭はナツパの足でがつちりホールドされてて抜け出せない。

くっそ、抜け出せないぞwww足離しやがれ！

「うあああ、いいいいい」

しばらくもぞもぞと、すごい地味だが白熱したナツパと俺の攻防は唐突に終わった。

ナツパが変な声を上げて絶叫したかと思うと、頭を捕まえていた足が離れ俺は自由を取り戻した。

素早くナツパから距離をとり、体勢を整えるがナツパが起き上がる気配がしない。

ピクリとも動かないナツパを不振に思った俺はナツパに恐る恐る近づきながら覗き込んでみると・・・。

そこには無様なアへ顔を晒して失神しているナツパの姿が！

おいwそんな顔いつまでしてんだよw

その顔は駄目だろw

板違いで削除されちまうよ(；。；。；。；。；。；)

俺は急いで失神したナツパを保健室に運び、帰路についた。

「ところで藤堂さん、春菜さんはどうして失神しているのですか？」

「わかりません、体育館裏で倒れていました」

「そう・・・ありがとだね。わざわざ運んできてくれて」

そのじゅっさん（後書き）

私の家の海釣り用のボートが今回の津波によって流されてしまいました。

実家も少し地震の被害を受けてしまったのでちょっと落ち込んでいます。・・・（ノ、）・・・。

そのじゆりよん(前書き)

微鬱注意

そのじゅっよん

とある月曜日。

太陽が表に顔を長く出しはじめ、蒸し暑くなり始める季節。

夕暮れに染まった住宅街を、普段は周りに何人かの取り巻きや友人を連れて帰宅しているはずの少女が、珍しく一人で帰宅している姿が見受けられる。

腰まで伸ばした、少し茶色が混じった髪とキリリとした表情が特徴の少女。

彼女こそこの物語の主人公である藤堂 沙紀である。

部活動が始まり、同じ帰宅部の有が体調不良で休んだことによって一人で帰っているのだが……。

このとき彼女が部活動をしていたなら……。

テニス部に顔を出していたのなら……。

正史では起こらなかつた悲劇が、彼女を襲うとは誰も予想できなかつたであろう。

そう、歴史が大きく変わっているこの世界で、転生者である彼女すらも……。

本来ならばテニス部に所属しているはずの彼女は帰宅部なのである。帰ったら何をするかな……。

つと彼女が考えながら歩いていると、前方に七つの影。

意識をそちらに向けるとガラが悪そうな男が7人ほど立っていたのである。

男たちはニヤニヤとしながら少女に近寄っていく。
嫌な予感がした少女はすばやく男たちから離れようとするが、それより早く少女の鳩尾に一人の男の拳が突き刺さっていた。
苦しそうに崩れる少女が意識が飛ぶ寸前に見たものは、真っ赤な夕日が地平線に堕ちていく美しい情景だった。

所変わってある高校の体育館。

イガ栗と呼ばれる少年と共に卓球をしている少年がいる。

彼こそエロゲ「ストラバ」の主人公、斎藤 哀歌。

イガ栗と共に卓球部に入り、ジュースをかけてラリーの応酬を繰り広げているときに胸騒ぎが起きる。

エロゲ主人公特有の固有スキル、虫の知らせである。

大好きなさっちゃんの身に何かあったのでは！？と心配になり、ラケットを投げ捨てジャージのまま体育館から飛び出していく哀歌少年。

イガ栗の「おい、どこ行くんだよ？」つという静止の声も聞かずに飛び出していったのである。

「おい、起きろよ。ちっ、さっさと起きろって言うてんだよ」

パンツという音と鋭い頬の痛みを感じた俺は目を覚ました。

痛てええええ、なんだなんだ？

辺りを見渡すと薄暗く、周りには草木が生い茂り、まったく整備されていらないであろう寂れた遊具がそびえ立つ公園のベンチに俺は寝かされていた。

そしてベンチを囲むように7人の男がニヤニヤと俺を見下ろしている。

ほえ？なんぞこれw

なんで俺・・・こんな世紀末モヒカンに囲まれてるいるんだろう。痛む頬を摩りながら記憶を遡っていく・・・。なるほど、俺はこいつらに気絶させられてどこかに連れ込まれたんだろう。

俺・・・もしかして拉致されちゃった？

つと一人で納得しているとさっき俺の頬を張ったであろう男が、俺に笑顔で話しかけてくる。

「おはよう、お嬢ちゃん。よく眠れましたか？ぎゃあははははは」

突然馬鹿笑いしながら俺の髪を掴み上げ、乱暴に腕を左右に振るの
で髪がぶちぶちと音を立てて千切れていく。

あまりの痛みに手を出して反撃しようとしたのだが、どうやら手を
ロープが何かで後ろ手に縛られているのかまったく動かせない。

「今からお嬢ちゃんを、俺ら7人でたっぷり可愛がってやるからな」

卑下た目と声を見聞きし、こいつらが俺に何をしようとしているの
かはつきりわかった。

モヒカンたちの目的がわかった俺は、急速に体から熱が抜けていく
ような錯覚に陥る。

歯がガチガチと擦れあい、これから起こるかもしれない陵辱への恐
怖と、モヒカン族の男の匂いに生理的嫌悪を感じる。

その間もぶんぶんと乱暴に頭を揺さぶられ、痛みと恐怖とパニック
で俺は、縛られてなかった足でモヒカン野郎の股間をおもいきり
蹴り上げた。

ブチっという音とともにブクブクと泡を吹き、白目になって崩れて
いくモヒカン。

「鉄ちゃん！鉄ちゃん、大丈夫か！！！」

他のモヒカン共が鉄と呼ばれているモヒカン野郎に集まって安否を確かめている。

モヒカンで鉄・・・またどっかで聞いたことある名前だ。

この世界に生れ落ちて何度目かのデジャヴを感じていると、鉄と呼ばれているモヒカンの取り巻きが、鬼のような形相で「よくも鉄ぢやんを」と言つて俺に殴りかかってくる。

顔面に右ストレートを受けた俺は「ッグエ」っと蛙のつぶれたような声を出しながら吹き飛ばされた。

10分ほどだろうか。

顔面から上半身を何度も何度も拳で強打され、鼻血や涎や涙が溢れるように流れ落ち、真新しい制服に染みを作っていく。

痛い痛い痛い、くそ。

殴られすぎて、ロクに頭も回らない。

なんて考えていると復活したのか、鉄？がフラフラと立ち上がり、こちらに向かつて歩いてくるのが見える。

他のメンバーも鉄に気がついたのか殴るのをやめて、鉄と何か話をしている。

そして話が終わったのだろう、こちらに向き直り憤怒の表情で俺に飛び掛ってくる。

「おとなしくしてれば、痛い目にあわなかっただろうに。おい、クソガキ。もう家に帰れると思うなよ、死ぬまで鬨りものにしてやる」

ポロポロの俺の制服を引き裂き伸し掛かってくる。

焦点が定まらない目で押し掛かってきた、情欲に支配されている鉄？の顔を見ると、薄ぼんやりしていた記憶からあることを思い出した。

有ルートの最終章、「有の過去」18話の回想シーンで有がモヒカン男にレイプされた話があったな……。

モヒカン、鉄ちゃん、寂れた公園。

このキーワードを繋げていくと、本編で有を襲ったモヒカンはこいつらで間違いないだろう。

確かギリギリで主人公に助けられて、今までの好きとは明らかに違う「愛」に変わった瞬間で。

そこからヤンデレになったんだな……。

俺にも、俺にも助けに来てくれるヒーローはいるのだろうか。

そんなくだらないことを考えている間にも、鉄が俺の首筋にキスの雨を降らせてくる。

気持ち悪い……。

鉄は俺のブラのホックを外そうと必死だが、中々外せないのに業を煮やしたのか前のパットのほうを掴み強引に引きちぎった。

こんなやつらに今から犯されちまうのか、俺は。

そう思うと涙が次々と溢れ出してくる。

いるんなら……いるんなら出てきてくれよ。

俺だけのヒーロー！

鉄が俺の乳首に口をつけようとしたときに、ヒュンという音とともに鉄の顔面にもものすごい勢いでゴツンと何かがぶつかった。

吹き飛んだ鉄は、顔面から血を噴出してピクリとも動かない。

その光景を放心したような顔である一点を見ているモヒカンたち。

モヒカンたちの視線を辿っていくと、鉄パイプを握り締め、汗でジヤージを濡らし、荒い息を吐きながら立っている少年の姿が。

そこにはいつもおっとりしているはずの幼馴染が立っていた。

「俺の……俺の沙紀に手を出すな!!!」

そうモヒカンたちに言い放ち、持っていた鉄パイプを振り回しながら、圧倒的な暴力で暴漢たちを吹き飛ばしていく幼馴染。

誰が考えただろうか。

この少年は4年前までスカートをはき、二人の幼馴染の後ろでおどおどしているばかりだったのだが。

虫も殺せぬような性格をしていたはずなのだが、今では血まみれに染まっていく鉄パイプで、無手の男たちを一方的に蹂躪していく。返り血を浴びてニヒルに笑う哀歌はともヒーローには見えなかったが、不覚にも少しかっこいいと思ってしまったのは俺だけの秘密である。

俺は・・・助かったのか。

ホッとした俺は哀歌が無双している様を見て気を失った。

「知らない天井だ・・・」

知らない天井、知らない部屋、知らないベット。

目が覚めた俺は、お決まりのセリフを吐きつつ起き上がるうとしたのだが。

全身に強烈な痛みを感じて、再びベットに潜りこむ。

腕には点滴が付けられており、頬やおでこにはガーゼや包帯が取り付けられている。

ここは病院なのかな・・・。

そっか、俺はレイプされかけたんだっとな。

恐怖がぶり返してきて、体が震え涙が出てくる。

しばらく震えているとドアがコンコンとノックされ、「入るよ」と声をかけられたので慌てて涙をぬぐい布団に顔を埋める。

くそ、誰だよ。

泣いているところを誰かに見られたくなくて、咄嗟に布団で顔を隠してしまっただじゃないか！

ドアがガチャリと開き、誰かが入ってくる。

「さっちゃん、起きてる？」

哀歌か……。

俺は少しだけ安心した。

これで入ってきたのが誰とも知れない病院の先生とかだったら、正直今の俺では怯えるばかりだっただろう。

たぶん泣いて目が真っ赤になっているだろうから、そんな姿を見られたくない俺は狸寝入りを決め込むことにした。

部屋に入った少年は、ベットの横に設置されている椅子に腰をおろし、眠っている幼馴染のはれ上がった腕を見て泣きそうになっ
てしまっ
まう。

「ごめんね、一人で帰してしまっ
て」

そう言いながら強く拳を握り締め、爪が手のひらに食い込み、床にポトポトと血が流れ落ちていく。

少年が部屋に入って30分は経過しただろうか……。

少女が寝返りを打った拍子に布団がめくれて、少女の包帯に包まれた顔が露出した。

「本当に……ごめんね、助けるのが遅くなって。怖かったよね」

少年は立ち上がり寝ている少女に近寄り「愛してるよ……さっちゃん」っと囁きながら少女の唇に己の唇を合わせる。

5分ほどの長い口付けを終え、少年は病室から立ち去るのであった。

どっどっ、どうなってるんだよ!!!

哀歌が俺を愛している?!

しかもあいつ、寝ている俺に（狸寝入りだが）キスしていきやがった……。

哀歌の突然の行動に驚きつつも、心臓がドクドクと脈打つ。

なぜか幸せな気分になっている俺は、自分の気持ちに戸惑うばかりであった。

3日後、無事退院できた俺は次の日から学校に行けるとのことなので、自宅で新品（新しく買ってもらった）の制服をハンガーにかけ学校の準備をしている。

そして犯人はというと・・・親や入院中に来た刑事の話によると、逮捕されたモヒカン族は強姦未遂と障害、拉致監禁の容疑で本来なら留置所に入れられるはずなのだが、哀歌無双によってボロボロになり警察病院に入院してるのだとか。

ざまあw

・・・つといえないほど今の俺は精神的に弱っているのだがね。しかし、明日どうしよう……。

哀歌の衝撃的発言と行動によって、あいつが俺のこと好きってことが発覚したわけなのだ。

前世でもそうだったが、自分に好意を持っているとわかった相手ですごく意識して、結局その相手を好きになってしまいう人間なんだよな、俺って。

顔を合わせる事が果たしてできるのだろうか……。

哀歌と目が合うと顔を真っ赤に染めてしまうかもしれない。

俺はそんなキャラじゃあ……無いと言い切れない自分もどかしい。

この三日間、哀歌のことばかり考えていたからな。ふと、髪をセットするために買った三面鏡を見やると、潤んだ瞳に真っ赤に染まった頬。

なんだよこれ、まるで恋する乙女じゃねえか……。

火照った体をどうにかするため、風呂にでも入って寝るかと思案している。と玄関のチャイムが鳴り響いた。

今の時刻は午後11時。

どこの誰か知らないが、なんて不謹慎な奴なんだ……。

そう思いながら鞆に教科書を詰め込んでいると、対応に出ているであろう母親が下の階から俺を呼ぶ声が。

へいへい、今行きますよつと……。

リビングにはなぜかボロボロの哀歌の姿が。

母親が哀歌の手当てをしているようで、救急箱から消毒液や絆創膏を取り出しテキパキと治療を進めている。

俺が来たことに気がついたのか、痛みでしかめっ面をしていた哀歌がとてもいい笑顔で俺を出迎える。

「こんばんわ、さっちゃん。こんな時間にごめんね？大事な話があるんだけど時間あるかな？」

「あつああ、時間なら腐るほどあるぞ」

哀歌の笑顔が眩しすぎて正視できずに下を向きながら、しどろもどろになりながらもなんとか返答することができた。

そんな俺たちをニヤニヤ見ながら、「ごゆっくり〜」つと変な含みのある言葉を残して母親はリビングから退出していった。

なんだろう……母親に対してイラ立ちを感じずにはいられないんだが……。

母親がいなくなったのを見計らい哀歌が口を開いた。

「さっちゃん、前からずっと好きでした！僕と付き合ってください」

そのじゆつよん（後書き）

後2話か3話ほどで第一章終わると思います。

ばんがいへん(前書き)

予約投稿ミスってる。

ばんがいへん

某市の河川敷において二人の少年が大きな声を出して殴り合っている。

時刻は午後10時。

まだ学生なのであろう、幼さの残る顔立ちによれよれのブレザー。制服を身に着けていることから察するに、二人ともまだ帰宅していないのが見て取れる。

この二人は・・・放課後から実に六時間以上も殴りあい続けているわけのだが、それでも尚止まる気配は無い。

何故この二人が殴りあいを続けているのか？

原因は八時間半前の昼食時まで遡る。

この二人の他に昼食を共にするものが三人いて、いつも五人で食事をしているのだが。

グループの中心人物である少女が入院しているため、四人で食事を取るのはこれで三日目になるのだ。

リーダーの欠けたグループの雰囲気は重い。

少女がいるときは、笑いが絶えず騒がしいほどであるのだが・・・。そんな重い空気を一蹴しようと、新入りメンバーでイガイガ頭の少年がおどけてみるが、空気は重たくなるばかり。

食事を取り終えたメンバーが解散し、次の準備に取り掛かり始めた頃。

一人の気障な少年が、少女の幼馴染の少年に黙って手紙を渡したのである。

これがピンク色の封筒に入っていて、可愛い便箋の手紙が中から出てきていたならば、周りの腐った少女たちから黄色い歓声が上がったことだろう。

しかし少女の幼馴染が手渡された手紙にはこう書かれていた。

「放課後 河川敷にて待つ 本郷 武」

夕暮れの放課後に、少女の幼馴染が河川敷に到着するとそこには手紙を渡した少年の姿が。

何故呼び出したのか問い質すと、気障な少年は深呼吸をして少し間をおき、語りだす。

今回の事件でどれほど少女を愛していたか自覚させられたと。

これからは少女を幸せにするために努力し、そして守り続けると。

いつもふざけている気障な少年とは思えない、真剣みを帯びた口調で語り続ける。

「だから私と同じ気持ちを持つ君に決闘を申し込む、私が勝ったならば沙紀さんに告白させてもらう」

「私は確かに沙紀さんに避けられて、一緒に登下校をできないでいたが……。なぜ沙紀さんを一人にした！君には失望したよ」

「これからは私が沙紀さんを送り迎えする。避けられてもいい、心は痛むが沙紀さんに害を及ぼす輩は私が排除する」

「沙紀さんは私が幸せにする、部活にうつつを抜かして大切なものを蔑ろにする君には諦めてもらう」

気障な少年の独白に、幼馴染の少年は驚きを隠せないでいた。

確かに気障な少年は、少女に少なからず好意を抱いているだろうと思っていたが……。

これではまるで、プロポーズを幼馴染にすると宣言しているようなものではないか。

もう言うことは無いといわんばかりに気障な少年はいつもおどおどしているだけの少年に踊りかかっていくのであった。

幼馴染の少年は唇を噛み締める。

気障な少年の攻撃と自分の不甲斐無さに顔をしかめるのであるが……。

少年にも言い分はあるし、幼馴染を救出したのも自分なのである。しかも散々な言われようである。

否定できないところも多々あるので、悔しさだけがこみ上げてくるのだが。

「お前に……お前に何がわかる!!!」

ついに幼馴染の少年が切れて二人だけの大乱闘が始まるのであった。まさに二人だけのビッグショー。

口汚く罵りあい、相手をぶん殴り続ける狂った祭りは七時間が経過し、ついに終わりの兆しを見せたのである。

一人の少年がぶっ倒れ、もう一人の少年もフラフラになり、両方とも顔面が岩のようにデコボコになっている。

倒れた少年はまだ諦めて無いのか、立っている少年の脚にしがみ付き立ち上がるうとする。

立っているほうも満身創痍で振り払う気力も残っていないのである。両者ともに相手を睨みつけ、最後の力を振り絞り、相手の鼻っ面に拳を叩きつけ……そして決着はついた。

勝者は痛む体に鞭をいれ、大好きな少女の下にはせ参じるのであった。

どちらが勝ったのかは、夜空に高く上っているお月様だけが知っている。

後日、この戦いを知った少女が腹を押さえて大笑いをし、決闘にタイトルを付けたのである。

「月下の戦い・・・キリッ！！！！とかテラ厨二病www」

これはひどい・・・！！

ばんがいへん(後書き)

完全に仕事遅刻な件

そのじゆつじ(前書き)

もう何も語るまい

一話から徐々に改装中。

ストーリーはほとんど変わらないので、見直す必要性は皆無です。

口がカラカラになり、自分の心臓の音以外、世界から音が消えてしまったんじゃあ、と錯覚してしまう。

いかん、いかんぞ。

冷静になるんだ、俺。

哀歌は真剣な気持ちで想いを俺に伝えたんだ。

ちょっとキスされ、好きだと言われたくらいで流されちゃ駄目だ。

確かにドキドキしたり、気になったりはしてはいるけど、お前は哀歌を好きか？と問われたらどうなんだろう……。

今は、気になる男の子……だけど恋と呼ぶまでには至ってない。

そう、気にはなるが恋じゃあないんだ。

そんな気持ちで付き合うのは、変ではないと思うがやっぱり相手に失礼だし……。

だから俺は……哀歌にごめんなって言う。

うつむいていた俺は顔をあげ、哀歌と視線を交わす。

真摯な目で俺を見据え、切ない顔で俺の答えを待っている。

その瞳が期待と不安に揺れているのがわかってしまう。
だからだろう。

俺の決心が鈍ってしまったのは。

「考える時間を………くれないか？」

………

「でね、斎藤君。あれから……」

保留という最悪な返答をしてしまった俺に、どつこつ言う権利が無いのはわかっている。
わかっているんだが……。

哀歌が他の女子と話していたりするのを目撃すると、妙にイライラしてしまう自分がいる。

武ほどでは無いが、哀歌はモテるのだ。

今まで全然わからなかったが……いや、まったく考えたことが無かったが正しいな。

端正な顔立ちと中性的な雰囲気。

そして穏やかで爽やかで優しい。

なんだ、パーフェクトじゃないか！

そんな哀歌がモテないはずがないのだ。

何故、哀歌が他の女子に好意を持たれているとわかるのかといえば……なぜだかわかる。

五感を超えた何か。

前世では、色恋の機敏をこんなに察知できるほど鋭くはなかった。女の勘（）とでもいうものか……。

とにかく、そういったものを感じられるようになった。
なってしまった。

哀歌がちよつと……嘘です、ごめんなさい。

かなり気になる異性になってからなんだ。

露骨に凝視などしたりしないが、いつのまにか目で追ってしまう。
あれだ……ちよつと哀歌の制服に綿埃がついていたから、少し気になってしまっただけなんだ。

決して哀歌を見ていたわけでは無いんだからな……！！
……。

やめよう、虚しくなるだけだ。

笑顔でクラスの子と談笑している哀歌を見ていられない。

(今までだって、哀歌は普通に他の女子と話していたじゃないか。

俺は・・・何を・・・)

胸にチクリと痛みを感じ、俺は席を立ってトイレに向かって歩き出した。

哀歌の告白があつてから、グループにも変化が訪れた。

武は今までが嘘だったかのように真面目になり、性格が別人のようになつてしまつた。

おふざけが無い武では唯のイケメンでしかなく、そんな武に好きですと迫られてもちよつと・・・ね。

ポケ役の武はどこへ行つた!!!

唯一のポケキャラがいないと、突っ込み役の俺の調子が狂うじゃないか!!!

今の武が変人を感じてしまう件について。

有も有で、なぜか俺を少し冷ややかな目で見るようになった。

昼ドラによくあるシーンを連想させる冷たい目。

決まつて俺が哀歌を盗み見しているときに、哀歌のそばにいる有と目が合った時なのだが・・・。

うん、なぜかつていつたけど理由はわかつてる。

有は哀歌のことが好きなんだね。

第六感が(哀歌関係に限る)覚醒した俺にはよくわかるよ。

もう目がね、「この泥棒猫!」 「雌豚が!私の哀歌を見るな!!!

!」って目なんだもん。

この冷ややかな視線、ずっと昔から誰かから受けてたような気がするんだが……気のせい……だよな？
気のせいだと信じたい。

そして……トゲトゲ頭が壊れました。

イガ栗は哀歌に話しかけると、「さんの好感度は22%です、次に嬢は……」と機械のように、突然訳のわからないことをのたまうようになるし。

ペット飼いたいよね？って話の途中だったんだけど……いい病院誰か紹介してあげてください。

哀歌が俺にすごい積極的になりました。
どれくらい積極的になったのかって？

昼食の際に、「ごめんね、さっちゃんに用があるから。皆で先に食べてて」と言っただけの手を引き強引に屋上に連れ出し、二人つきりで飯を食うようになるくらい積極的になった。

初めは俺も二人つきりになるのに、少なからず抵抗があったので「今回だけだぞ？いいな」って抵抗してただけど……。

最近、「し、仕方がないな。お前がどうしても言うんなら行ってやらんこともないぞ！！！」と言っただけで行ってしまう俺がいる。

もう俺が俺でなくなっていくorz

母親にこんなの見られたら一生からかわれるぞ！

一緒に屋上で昼食を取るようになってから、不穏な噂が俺の耳に入ってきましたとも。

ええ、不穏な噂なんです。

噂の出所は不明。

まったく夕チの悪い噂だね。

とあるクラスのたとある男女
昼食時間になると二人で屋上に消える……。

この高校、少し前まで屋上で不良がタバコを吸いに集まっていたらしい。

つで溜り場となっていた不良の先輩方が問題を起こして、強制的に卒業（退学）させられ、もう一人も残っていないのだとか。

その影響か、今では開放されている屋上には誰も近寄らないのですよ。

その誰も近寄らない屋上に、昼休みに揃って消える男女。

これを見て皆どう思ったのか。

付き合ってるのか？とかは可愛いほうで、屋上で×××してるんじゃないか……なんてひどい噂まで流れた。

ちょっと残念な気もするけど（ガラガラの屋上で食べるのは開放感があつてry 決して哀歌と二人つきりになりたいわけじゃry）、哀歌に「変な噂流されているから皆でご飯食べよ？」と説得したのだが……。

まるで計画通りって歪んだ笑顔を見せるだけで、まったく聞いてくれなくて。

しかし哀歌よ、有が「私も行く」って言ってるのにガン無視とか……。

チラッと有の方を見ると、真っ黒なオーラを出し鉄製のシャープペンシルを握り潰す姿が。

今日も役目を果たし終える前にシャーペン二等兵が殉職していく。なんて惨いw

そうそうナツパ。

ナツパはたまに襲撃してくるのだが、哀歌を盾にするとまったく手を出してこなくなるのが判明しました。

どうもナツパの奴、哀歌にホの字のようで。

前回恐ろしい目にあっただので、咄嗟に哀歌の後ろに避難したら攻撃してこなかったのである。

成熟した木を素手で真つ二つにしてしまうような化け物だからな。

つつい哀歌シールドを展開してしまった俺に罪はないと思うんだ。

哀歌を目の前にしたナツパは、顔を赤くしてうつむくばかりで攻撃してこないのである。

しばらくすると、「うぐぐ、卑怯なり藤堂 沙紀！正々堂々とくく」と長つたらしいお説教をしてくるのだが、右の耳から左の耳へ素通りしていきませ旦那。

そのまま言わせておくと、「覚えていろよ」とやられキャラ丸出しの捨て台詞を残して去っていくのであった。

ナツパの襲撃は週に一度のイベントになりつつある。

- - - - -

あの告白から1年が経過し、今の俺は心が荒れに荒れている。

1年間、本当に平和に過ごしてきたので、イライラすることはあっても荒れることは無かったんだ。

原因は目の前にいる一組の男女。

桜が舞い散り始める季節。

去るものあれば来るものあり。

別れがあれば出会いも当然あるわけで。

新学期が始まり4日ほど経ったある日。

教室についた俺たちは、朝のHRまで10分ほど余裕があったので、
各々好きなようにすごしていた。

有と哀歌は何か話しているし、イガ栗は「　　さんの好感度はくく
く」っと壊れたロボットのようになっている。

っん？武は・・・窓際で空をじっと見つめている。

あいつに一体何があったのやら、厨二（思春期）なのかなwww
つと、HR始まる前にトイレトイレ！

- - - - -

トイレから帰ってきた俺が最初に見た光景は、哀歌に腰に腕を回し
頬にキスする女の姿だった。

後ろにはレイプ目の有が幽鬼のように佇んでいて、その横でイガ栗
が「　　さんのry」と繰り返している。

あれ、キスしているあいつは- - - - -サブヒロインの
相川 夏菜じゃあ・・・

そのじゆん(後書)

今後とも(一、二、三)おつてく

そのじゆづろく(前書き)

なんて言ったらいいのか・・・。

ほんとすいませんw

次回最終話

(ー、ー、)

そのじゆづろく

騒がしい教室の中で少年と少女の周りだけは別世界で。
俺はその光景をただ黙って見ているしかなくて・・・。
幼馴染は顔を真っ赤に染め上げて目をパチパチさせている。
少女は少年の首に腕を巻きつけて動こうともしない。

おかしいな。

なぜこんなに切なくなるのだろうか。

どうしてこんなに悲しい気持ちになるのだろうか。

・・・ああ、そうか。

考えるまでもなかった。

本当に今更だよね・・・。

こんなことが起きて始めて気がつくなんて。

散々返事を遅らせて、気を持たせたのが悪かったのかな・・・。

いつも笑顔で語りかけてくる幼馴染。

昔は自分の弟みたいいな存在で、危なっかしくて見守っていたけど。

いつの間にか守られる側は俺になっていて・・・。

いつもは素直なくせに、変なとこだけは頑固で。

狸寝入りしている俺の唇を、勝手に奪って告白までしてくる変態だ
けど。

俺がレイプされかけた事件が起きてから、部活もやめて家まで送っ
ていってくれているし。

なよなよしてた性格も変わって、強引に俺を屋上に連れ出して弁当一緒に食べたり。

強気な幼馴染も悪くないと思っている俺がいて。

.....そんなあいつがキスしている。

俺じゃない他の女と。

だからなのだろう。

俺の目頭が熱くなっているのは。

なんだよ.....。

.....お前は俺のことが好きなんじゃなかったのかよ！

もういい。

もういいよ。

だからもう.....見せ付けないでくれ.....。

そんな光景を見ていられなくて。

いてもたってもいられなくて。

俺は教室から飛び出し、HR前の人の少ない廊下を全力疾走で走り抜けた。

.....

このとき沙紀は気が動転していて、手に持っていた携帯電話を落としたのだが.....。

そのことに気がつかずに教室から走り去ってしまったのである。

カツン.....と音をたて落下した携帯は、中学に入る前に買った哀歌や有とお揃いの携帯で、5年経っても買い換えてなかった思い出のたくさん詰まった携帯電話。

ちなみに有と哀歌も買い換えていなかったりする。

しかし、この置いてけぼりにされた携帯が重要な役割を果たすとは、神さえもわからなかったであろう。

エロゲにはフラグは付き物なのである。

この携帯のおかげで、一人の少女の命を救うことになるとは誰が考えよう。

携帯電話一つ落とすだけで様々なフラグを立てる沙紀は、やはりメインヒロイン（ ）と呼べるだろう。

教室のど真ん中でキスをしていた片割れの一人。

そう、我がエロゲの主人公。

斎藤 哀歌その人である。

実は斎藤君はサブヒロインの一人、相川 夏菜により催眠術をかけられていたのだ。

その催眠術は術者を恋人と思い込んでしまう恐ろしい催眠術で。

哀歌は沙紀とキスをしていると錯覚しているわけなのだが……。

一体教室で何があったのか？

沙紀がトイレに行くために教室を出たあたりまで時間を遡る。

HRまであと数分。

当然教室には生徒がたくさんいるわけで。

そんな教室に一人の訪問者が現れる。

ガラガラと扉を開き、現れたのはセミロングのお嬢様然とした少女。その少女はもちろん夏菜である。

夏菜は教室の入り口でキョロキョロと教室内を見渡し、お目当ての人物を探し始める。

中学の時に出会った優しい先輩を。

哀歌と夏菜の出会いには中学の時の卓球部。

夏菜が小学6年の頃。

日本でオリンピックが開催され、ミ－ハーな両親に手を引かれ、当時人気のあつた卓球少女の試合を見て憧れたのがきっかけだった。

私もあんな風に活躍してみたい。

中学生になったら卓球部に入ろう！

そう決意して卓球部に入ったのだが・・・。

卓球部に入ったのはいいが、運の悪いことに同学年が一人も入部しなかったのだ。

年上しかない環境。

真面目に練習せずに遊んでいる先輩たち。

あのオリンピックの選手みたいに強くなりたい！と思って入部したのだが・・・。

現実と理想のギャップ。

ここに同級生が一人でもいたならば・・・。

一緒にがんばろうよ！と少女マンガのスポーツコミック張りの熱血な展開もあつたかもしれないが・・・。

先輩相手に真面目にやれとは言えず、また先輩相手に練習に付き合つてくれとも言えず。

そういうしているうちに孤立してしまう。

当然である。

彼らと自分の目指す目標は違うのだから。

始めのうちはそれでもめげずにがんばった。

ただガムシヤラに一人でできることを。

当然といえば当然なのだが・・・。

卓球とはシングル、もしくはペアとする競技である。
練習相手がいなくては一人でできることも限りがあるのだ。

一人では打ち合いもできずにラケットの素振りしかできなくて。

それでも諦めずに壁に向かってピンポン玉を打ち、一人ラリーをしていたのだが……。

まったく上達しない。

しているかもしれないが対戦相手がいないのでどうしようもない。
そしてついに心が折れる時を迎える。

もうやめよう……そう思っていたときに一人の先輩から声がかかったのだ。

声をかけたのは哀歌である。

いつもは有とペアで練習しているのだが、前から一人で壁にピンポン玉を打ちつけ、一人ラリーをしている変わった後輩が気になり声をかけたのだ。

弱った相手を籠絡する、まさに外道主人公である。

「どうしたの？暗い顔をして。僕でよければ相談に乗るよ」

その誘いはまるで悪魔の囁き。

普段なら知らない人間に、自分のことをぺらぺら話す性格ではないのだが……。

心が弱っているところに甘いマスクと優しげな微笑のコンボ。

男女問わず落ちてしまっただろう。

この人に相談してみよう……。

優しい問いかけに抗うすべなど夏菜は持ち合わせていなかった。

もしこの場に沙紀が居て、哀歌がストラバの主人公とわかっていたらこう言っただろう。

「逃げてええええ。そいつは主人公よおおお」つと。

当然そんなことを知る由もない夏菜。

心に溜まりに溜まったものをすべて吐き出さんという勢いで、泣きながら己の現状を哀歌に語る。

すべてを語り終え、「卓球部をやめようと思っっています」と哀歌に伝え、膝を抱えて蹲る。

哀歌は後輩の吐露に苦笑を浮かべ、自然な動作で抱きつき、頭を撫でながら

「僕でよければいつでも練習に付き合うよ。だから……だからもう一度がんばってみようよ。今度は一人じゃないから」

つと優しく語りかけながら、咽び泣いている後輩を宥めるのであった。

本当に……哀歌は恐ろしい子!!!!

この出来事があって以来、笑顔で卓球に勤しむ彼女の姿が体育館で目撃されるようになるであった。

一連のやり取りによって、夏菜が哀歌に依存気味の恋をしてしまうのは仕方がないのかもしれない。

夏菜との関係で知り合った春菜に迫られるようになるのはまた別のお話。

ちなみに哀歌と有は真面目に練習していたのだが、有の哀歌に発するラブラブビームによって、ふざけた男女のカップルが一緒に練習をしているように見えていたのだとか。

なので夏菜から見れば不真面目組みに属していると思われていたのである。

その時の夏菜の哀歌に対する第一印象は女顔のチャラ男である。

今となつては白馬に乗った自分だけの王子様なのだが……。
人とは心の有り様によって極端に評価が変わるものである。

そして卓球少女に憧れた夏菜に転機が訪れる。
哀歌に恋をしたのだ。

部活に行けば先輩に会える！

哀歌と同じ時間を過ごせるのが嬉しい。

今日は先輩とどんなことを話そう。

早く授業が終わって放課後にならないかな……。

などなど常に考えているわけで。

昔の志はどこへ行ったのか……。

完全にアホの子である。

夏菜は卓球部に入った本来の目的を完全に忘れて、初めての恋に夢中になるのにさして時間はかからなかった。

閑話休題。

こうして楽々と攻略されてしまったヒロインの一人が、二年の教室に単身で赴き、愛しの先輩に会いに来たのだ。

「センパイ」

つと甘つたるい間延びした聞き覚えのある声が教室の入り口から聞こえてきたので、そちらに視線を移すと虹学のブレザーに身を包んだ後輩の姿が。

手を上げながら笑顔でこちらに近寄ってくる後輩に苦笑が漏れる。

夏菜が虹学に入学してから4日。

毎日一緒に帰ろうとメールが着ていたのだが、沙紀と一緒に帰りたいがために断っていたのだ。

まさか教室まで押しかけてくるとは思ってもいなかった。
もうすぐHRが始まるのに・・・しょうがないなあ。

ため息を一つ吐き、入り口で立っている後輩を手招きしてこちらに
呼ぶ。

手招きに応じて笑顔でこちらに歩いてきている後輩の手に、催眠術
専用の小道具が握られているなど哀歌が知っているはずもなく。

.....

催眠は数瞬の間に実行された。

夏菜の手に握られた小さな小さな香水の瓶のような何か。

哀歌の顔めがけて三度、謎の液体をシュシュッと振り掛ける。

真横に居た有もまったく気がつかない早業である。

当然哀歌は気がついていない。

謎の液体を吸い込んだ哀歌はトロンとした瞳になる。

虚空を見つめ、心ここにあらず状態の哀歌の様子を見て歪んだ笑顔
を見せる夏菜。

ふふふ、この日の為に練習した甲斐はありましたね。

ああ、ついについにことが！

長い、長い一年だった。

先輩が中学を卒業してからの一年は本当に長かった。

先輩と同じ学校に通っている姉は、大はしゃぎで先輩の学校での様
子を語る。

私は知っている。

この姉（蛆虫）も先輩を慕っていることを。

しかし姉では先輩の心を掴めないこともわかっている。

本当の不安は別にある。

そう、中学の頃から先輩が話題に取り上げていたあの女。

藤堂 沙紀。

先輩曰く、別の中学校に通っている幼馴染で・・・かわいくて、かつこよくて、綺麗で頼りになるお姉さんのような存在だと。

その女のことを話すときの先輩の顔はとても……とても嬉しそうで……。

嬉しそうな先輩の顔を見ると心が引き裂かれたような錯覚を覚える。

そんな先輩の幼馴染が、今では同じ学校に通っていると姉から聞いたときは卒倒しそうになった。

先輩は・・・先輩は私の物なのに。

どうすればいいのだろうか。

自分は中学3年。

このままでは先輩を奪われてしまう。

早く・・・早く1年が終わればいいのに。

そんな時、中学の図書室で催眠関係の古い古い本を見つけたのは本当に偶然だったんだ……。

ニヤける顔を隠そうともせず哀歌の耳元で魔法の言葉を囁く。

「先輩の想い人である私が来ましたよ。さあ先輩。目を覚ましてください。さあ」

空ろになっていた哀歌の瞳に色が戻る。

その様子を見た夏菜は……。

「先輩、キスしてください」

殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる。

こいつが、こいつがアー君になにかしたんだ絶対。

でなければこんな……こんな雌豚（夏菜）にアー君がキスするはずがない。

絶対に何かしたんだ。

中学の頃からこいつはアー君に擦り寄って……。

私と二人だけの時間を奪った。

いつも壁に向かって一人ラリーしていたくせに……。

一人ぼつちを装ってアー君に近寄る醜い雌豚め。

後ろ手に持った鉄製のシャーペン握り締める。

アー君は……アー君は私だけの大切な人。

これ以上アー君にこの雌豚の匂いを付けさすわけには……。

背後から雌豚に近寄る。

気づかれないようにそっとそっと。

あはは、首にシャーペンをぶツ刺してあげるね。

でも今は駄目。

アー君に豚の汚い血が付いたら大変だから。

そんな時、誰かが落とした携帯に着信があったのか、どこかで聞いたことのある着メロが流れる。

ああ、そっか。

これはアー君と同じ着メロだ……。

気がついたら私はシャーペンを床にとり落としていた。

「はあはあ」

あれからどれくらい走ったのだろうか。

心臓は激しく脈打ち、喉が渴き呼吸が荒い。

体は悲鳴を上げているが、そんなのお構いなしで尚走り続ける。

今更・・・今更自分の本当の気持ちに気づいちゃった。

そっだよ！

俺は哀歌のことが・・・哀歌のことが好きなんだ。

でも、でもよ。

手遅れかもしれない。

哀歌のあの子を見る目は・・・。

恋している目だった。

そっだよな・・・いつまでも告白に対する返事もしないで。

そりゃあ1年も経てば諦めるよな、諦めちまっよな。

馬鹿じゃん俺。

何でもっと素直になれなかったのかな・・・。

せめて・・・言葉で伝えられなくても態度で示せていれば。

哀歌が目の前にいるとどうしても素直になれなかった。

昔は全然平気でパシリとして命令したりしてたのに。

よくよく考えれば俺・・・ツンツンしすぎていたのかもしれないな。

きっと哀歌は素直な子が好きなんだと思う。

あの夏菜ってサブヒロインは明るくて素直で絵に描いたような大和撫子。

対する俺は偉そうな態度。

人をパシリにするような高慢ちきな女だもんな。

見限られて当然だ。

体が限界を迎えもう走れそうにない。

走るのをやめて空を見上げる。

くそつたれ！

憎たらしいほど快晴で。

俺の心とは正反対で。

ハハハと乾いた笑いを無意識のうちにあげてしまっ。

この一年、哀歌との関係は急接近。

それももう終わりなんだけど。

哀歌はあのサブヒロインの子と教室の真ん中でキスしてたし。

嬉しそうな顔していたな。

なよなよしてたくせに大胆になりやがって……。

そんな教室での一幕を思い出すとキリリと胸が痛む。

今から何しよっかな……。

教室から飛び出して町へ繰り出したのはいいがやることがない。

制服だし、警察に見つかったら色々ややこしいだろうが今日は学校に戻る気にはなれない。

どうするかなあと歩きながら考えていると懐かしい場所にたどり着いた。

有、哀歌と出会ったあの公園だ。

ずっと零れていた涙を制服の袖でごしごしと拭い、砂場に向かって

歩き出した。

いつまでもグチグチと俺らしくもないな……。

よし！

久々に世間のド肝を抜くような砂の芸術を作り上げるか!!!

頬をパンと叩き気合を入れ、中東の石油王の城の建設に取り掛かった。

何かしてないと心が押しつぶされそうになるから……。

チャッチャラッチャッチャララチャララ

この……この着メロは……。

ぼ、僕の携帯の着メロだ……。

出ないと。

早く出ないと……。

あれ？なんだろう。

頭が霞がかつたような気分だ。

僕は……何をしていたんだっけか？

そう考えていると唇に生暖かい感触により思考がはつきりしてくる。えっと……確か教室でさっちゃんにキスしてって言われてキスをして。

嬉しくて、僕の想いがついにさっちゃんに届いたんだって。

チャッチャラッチャッチャララチャララ

それでそれで。

あれ？

おかしい。

なんでいきなりさっちゃんが目の前に現れたんだろう。
僕のさっちゃんリーダーではさっちゃんはトイレに行ったよつな気がするんだけど。

チャツチャラツチャツチャララチャラ

さっちゃんはまだ僕にくっついてキスをしている。

さっちゃん……。

……。

違う。

これはさっちゃんじゃない。

匂いが違う、味が違う、感触が違う！

これは、これはさっちゃんなんかじゃない。

病院でキスした僕は覚えている。

離れる！偽者め。

僕は偽者のさっちゃんを突き飛ばす。

すると霧がかつていた脳がクリアになり、僕とさっちゃんしかいなかった世界は壊れた。

辺りは騒がしい、いつもの教室で。

およ？

あれは夢だったのかな？

しかし立ったまま眠ってしまうなんて疲れているのかな……。

偽者とはいえさっちゃんと夢の中でキスしちゃうなんて。

……下半身……僕の息子さんか怒っているよ。

うわわ、教室のど真ん中でそれはまずいよ！

つてやばいよ！

なぜか皆が僕を見ている。

まさか……見られた？

そういえば教室に来ていた夏菜ちゃんはと。

眼下にはビククリした表情でこちらを見ている夏菜ちゃんが。なぜか倒れているけど・・・なにしてるんだろ。卓球部で一人でがんばっている頃の夏菜ちゃんはどこへいったんだろ。

中学の時に相談に乗ってあげてから、僕の近くに来るとよく転ぶようになった。

何もなかったところで転ぶから、咄嗟に抱き上げていたけど・・・。高校生になっても何もないところで転ぶなんて、ホント夏菜ちゃんはドジっこさんなんだね。

チャッチャラッチャッチャララチャラ

そくだ、それより早く携帯に出ないと。

慌ててポケットの中に手を入れ、自分の携帯を取り出すが待機状態で。

あれれ、僕じゃないとすると。

初めて二人っきりの屋上でお弁当を食べたときに、さっちゃんの好きな映画のオープニングテーマの着メロと一緒にダウンロードして着信音にしたのを思い出す。

僕じゃないとするとさっちゃんか。

音の発信源を探すと床に転げ落ちている、僕の大好きな人の携帯電話。

今ではもうかなり古い機種になっているけど僕も同じ機種だ。色違いではあるけれども。

しかしなぜ・・・さっちゃんの携帯が床に。

床に落ちているさっちゃんの携帯を拾い上げる。

そういえばさっちゃんは・・・。

さっちゃん、さっちゃんが教室にいない!!!

僕のさっちゃんリーダーが反応しないなんて。

さっちゃんはどこへ行ったんだ？

もうHRが始まっちゃうよ……。

キョロキョロしている僕に近寄ってくる一人の男の影。

「斉藤君……君は……いやもういい。見損なつたよ」

た、武君!?

なんだかとても怒っているように見えるけど……。

武君の瞳には憎しみと悲しみを織り交ぜたような……冷たい目で僕を見据えている。

そんな……そんな武君は……。

パンっ。

僕の頬を思いつきり……ビンタした。

四月とはいえまだ肌寒く。

春一番の風は朝方は心地よい風なのだが、夕方の風は秋を思わせる。

なぜだか心が切なくなる風……。

そんな風が吹いている。

もう午後4時か……。

公園の大時計にちらりと目をやりながらため息を吐く。
砂のお城を作っては壊し、作っては壊し。

一心不乱に中東のお城を作っていたつもりなんだが。
雑念が混じっているのだろう。

何を作るにしても、作品には作り手の心が大きく反映されるのだ。
何度作っても完成するのはどこか歪な城で。

ああ、もう時間も時間だし帰るか。

鞆は学校だし・・・携帯はどこかに落としてきたようだし。
まあ・・・どうでもいいけど。

そう思い立ち上がるうとしたときに俺の背後から声がかかった。

「さっちゃん・・・」

そう・・・今は一番聞きたくない声だ。

「探したよ、さっちゃん」

ザクザクと砂利を踏みしめながら後ろから近寄ってくる一つの気配。

「く、く、来るな」

後ろを振り返りたい衝動を押さえ込み、振り返らずに哀歌に静止を
促すが聞きたくないようだ。
どんとんと近寄ってくる。

ザクザクという音が段々と近づいてくるのに比例して、俺の心臓の
音もどんとん大きくなっていった。

「な、何しにきたんだよ・・・こんな所に・・・」

「さっちゃんにどうしても伝えたいことがあって」

落ち着け、落ち着けよ俺。

どもりながら震えるような声しか俺は出せなくて。

どうせ・・・あの一年の子と付き合っから。

もう一年前の告白はなかったことにしてくれって言いに来たんだろ・・・。

「僕は・・・」

.....

やあ皆さんこんにちは。

藤堂 沙紀です。

今日は何の日か知ってますか？

12月24日。

ええ、もうお分かりですね？

性夜・・・もとい、聖夜の一日前です。

今現在、俺は幼馴染と一緒にお互いに渡すプレゼントを買いに来てるわけなのだが・・・。

隣に立っている少年。

..... 斉藤少年と手を繋いで買い物しているわけなのですよ。

えっ？

四月はカオスだったのになんで仲良く恋人同士みたいに買い物してるのかって？

秘密だ、秘密！！！

色々あつたんだよ!!!

何があつたかは勝手に想像でもしてくれ。

そこを聞くのは野暮つてもんだ。

しかしなんだ。

恋人同士みたいだけど、正確にはまだ付き合つてはいないんだなこれが。

まあ、原因は俺なんだけど・・・。

どうも哀歌を前にするとやはり素直になれない。
できるだけ態度では示しているんだけど・・・。

「ほら、さつさと来いよ。ドンくさい奴だなまったく」

つと言いながらさりげなく哀歌の手を取つたり。

「なんだよ、その服。そんなださい服着て・・・仕方がないな。俺がお前に似合う服選んでやるよ!」

つと買い物に誘つたり。

学校から帰るときも

「俺と一緒に帰りたい? 相変わらず一人で帰れないとか・・・お子様なお前と一緒に帰ってやるよ」

つと言いながらにやける顔を隠そうともしないで一緒に帰つたり。

完全にキヤラ崩壊orz

もうすでに俺じゃないよね?

たぶん椿とかが、今の俺に会つたらずつとニヤニヤしながら俺をい

じり倒すだろう。
くそw

「どうしたのさっちゃん？難しい顔をして」

「あ、ああ。ちょっと考え事をな」

「そ、そうなんだ」

くそwくそw

なんぞこの甘い空気は。

すれ違った人たちが砂糖はいてるよ。

「さっちゃん、あの・・・」

「っん？」

「安物なんだけど・・・受け取ってもらえるかな？」

つと言いながらなにやら俺に小さな箱を差し出す哀歌。

およ？これはまさか・・・。

受け取った箱を開けると・・・中には確かに安っぽそうなオモチャの指輪が入っている。

「えっと・・・これは？」

「僕からのプレゼントだけど・・・どうかな？」

それは人工石でできたオモチャのような指輪だけど・・・それはと

てもとても……

「すげえうれしい」

.....

12月25日。

いつもならもう一人の幼馴染も一緒に家に集まってパーティーをするのだが。

今回は二人つきり。

この二人つきりの甘い空間は……

襲撃者によってもろくも崩されることになるとは……。

キヤキヤウフフ。

まさに今の俺たちの状態である。

エッチなことをしているわけではないが、哀歌と俺は二人でいちゃいちゃしつつ、とても幸せな時間を過ごしていたのだ。

そんな時だった。

玄関のチャイムがなったのは。

血塗られた狂気の宴。

聖夜祭の本当の幕開けの合図。

クリスマス当日に、哀歌が俺の家を訪ねてきたのも要因の一つだったのかもしれない。

変な気を利かせた母親が、俺と哀歌を二人つきりにするべく、親父

をどこかに引つ張って出かけていったのだ。
去り際に

「まだ学生なんだから・・・赤ちゃんは駄目よ？」

つと怪しい発言を残して去っていったのである。

家には哀歌と俺しかない。

当然玄関に correspond に出るのは俺なわけで。

「はい、只今参りまーす」

つと言いつつ玄関に向かう俺。

つたく、誰だよ。

こっちはイチャイチャするのに忙しいんだよ。

若干苛立ちつつも声には乗せずに心の中で毒づく。

そして玄関を開けた瞬間 - - - - -

グサッ

俺の腹に強烈な痛みと熱さが駆け巡った。

.....

えっ？

何が起こっているのかまったくわからなかった。
痛みと熱の発信源を見るとそこには真っ赤な……。

真っ赤な液体が噴出していた。

突然の事態に脳の情報処理が追いつかない。

俺の……俺の目の前には。

先に真っ赤な絵の具を塗ったような刺身包丁を持つ……もう
一人の幼馴染の有が……

その刺身包丁を振りかぶり、そのまま俺に突き刺した。

ああ、体から熱が……命が抜けていく。

倒れ付した俺に跨り、なおも俺の胸や腹部に包丁を刺す有。
なんで……なんで……なんで。

薄れゆく意識の中で、最後に見たものは。

涙を流しつつ笑顔で俺に包丁を突き刺す有の姿を。

俺の聞き間違いでなければ……有は確かに「ごめんなさい」と
……。

そのじゆつろく(後書き)

無理矢理すぎわろたw

次で第1章終わりです。

2章はプロットもないまま適当に書いていこうと思っていましたが。。。

らすとく

どこかのマンションの一室、10畳ほどの寝室に一人の男が倒れている。

シンと静まりかえった室内の温度計は15度を切っている。

しかし男はスーツを着たまま身じろぎもしない。

寒くないのだろうか？

そんな男の部屋に突如一筋の光が走った。

つけっぱなしのパソコンから放たれる眩い光と共に男の体に変化が訪れる。

光の粒が男の体と融合し、身じろぎもしなかった男が寝返りをうったのだ。

体が冷えるのだろうか？

男は己の体を抱きしめ、ブルブルと身震いをしている。

当然である、季節は12月。

時刻は午前4時45分。

スーツ一枚で暖房もつけずにフローリングの床に寝転がっているのだから寒いはずである。

- - - - -

寒い・・・体が冷える。

覚醒に向かつてゆっくりと意識が浮上してきた男は重い瞼をゆっくりと開けた。

「あれ・・・どこだここは？」

見慣れない・・・いや、懐かしく感じるがここは俺の部屋だ。

何故そう感じるかはわからないが、とにかく自分の部屋であることはわかる。

おかしいな・・・確かぬいぐるみが・・・

何かを思い出そうとするとズキンと痛む後頭部。

痛みをごまかすようにぼりぼりと頭を掻き、どうして自分は床などで寝ていたのか思いを巡らせるがまったく思い出せない。

しかし不思議な・・・不思議な夢を見たものだな。

冷たくなった手にハアッと息を吹きかける。

果たしてあれは本当に夢だったのだろうか。

妙にリアルな夢・・・。

17年分の一人の女の子の生涯を夢で見るだろうか？

しかもそれを自身として体験するなど・・・。

「そつだよな・・・夢・・・だよな」

馬鹿馬鹿しい。

いくら夢中になっているエロゲだからといって俺がメインヒロインとして生きているとか・・・

「笑えないな、マジで……疲れてるのかな俺」

しかし、どうしても俺は床なんかで寝ていたのだろうか。
ひきつけでも起こして倒れたんじゃあ……。
そのあたりの記憶がぼんやりと脳の中から無くなっている。

「……今度病院にでも行って検査しないと、こんな時間
だし今日は会社も休もうつと」

鉛を巻き付けたようにダルイ体に活を入れ、暗い部屋を眩しく照らしているパソコンの前に這っていく。

とりあえずPCを落としてスーツのままでもいいからベットに入っ
て寝るか……。

つと考えながらパソコンの前に到着したときだった。

起動したままのエロゲをシャットダウンしようとスクリーンセーバ
ー状態のパソコンのマウスを触れるとそこには……。

自分の頬が温かくなっていることに気がついた。
頬を暖めている液体の正体は涙。

ボロボロと出てくる涙が頬を通過し、顎の先に溜まりポツポツとフ
ローリングを濡らしていく。

アレ？

どうしてだろう……涙が止まらない。

22インチのディスプレイ内には……
主人公視点から見た、メインヒロインとその家族が笑顔でふざけあ

っている立ち絵が映し出されていた。

パソコンをログオフにするつもりでここまで来たはずなのだが――

フラフラとパソコンの前に置かれた椅子に座り、マウスを操作する。

一旦ゲームデータをセーブし、ゲームのオプションを開き「タイトルへ」をクリックする。

「初めから」「続きから」「エクストラ」「特典パスワード」

「ゲームを終える」といったあたりなタイトル画面に移行したのを確認して、矢印を「特典パスワード」にもっていきクリックをする。

なぜそこをクリックしたのかは本人にもわからない。

今まで散々謎のパスを試したことはあったが一度もパスが通ったことは無かったのだから。

しかしなぜか今やらないと駄目な気がする。

「パスワードを入力してください ヒント：クリスマスプレゼント」

背景画面はどこかで見たことのある……いや、自分を誤魔化すのは辞めよう。

本当は何かを予感していた。

背景画面を見ると胸が締め付けられるようなこの感覚。

それは俺の……藤堂 沙紀の部屋背景画面。

親や友達からもらったパンダやペンギンのぬいぐるみ。

ブルースカイのカーペットに薄緑のカーテン。
高校に持っていった鞆に壁にかけてある制服。

夢の中で体験した俺が住んでいた部屋だ。

早くなる動悸に震える体。

プルプルと震える指先でパスワードの欄に指輪と入力し、エンターキーを押すとピンポンと軽快な電子音がスピーカーから流れてくる。

画面が切り替わり、再びタイトル画面に戻ったのだが先ほどとは違うコマンドが現れていた。

「さっちゃん」っというコマンドが……

「うそだろ、こんな、こんなことって……」

「さっちゃん」をクリックすると、いつものストラバのオープニングが始まった。

それをスキップで飛ばし、始まったゲームを進めていく。

それはいつものストラバと少し違う……どのルートとも違った一人のためだけのルート。

主人公は公園で二人の少女と出会い、仲良くなっていく。

主人公のしていた女装がばれたり、少女にたこ焼きをおごらされたり、釣りに行ったり、お揃いの携帯を買ったり、違う中学にいったり、恋したり。

メインヒロインの行動に一喜一憂で単純な主人公。

高校生になり武と戦ったり、沙紀に告白するもいい返事はもらえず落ち込んだり。

好きになってもらおうとがんばって空回りしたり。

そしてきたるは12月25日。

前日に3ヶ月分の小遣いで買ってプレゼントした指輪がどす黒い血で染まっている。

そう、玄関で大量の血を流し倒れている沙紀を目撃してしまった悲劇のクリスマス。

そこからの主人公は転落の人生を歩んでいく。

最愛の人を失ってから三年目、ついに主人公は自らその命を絶つてしまう。

そしてエピローグ。

スタッフロールには斎藤 哀歌の文字が流れている。

最後になぜか誰かの電話番号が。

時刻は午前9時。

急いでその電話番号に電話をかけ、ブルルルとコール音が耳に響いてくる。

そして電話がつながり「斎藤 哀歌さんをお願いします」っという
と。。。。

「おかえりなさい、さっちゃん」

綺麗な。。。鈴のような女性の声が俺の耳に届いた。

「えびろーぐ」

ある男性とある女性は出会い恋に落ちた。
それは前世から続く大恋愛。

二人は結婚して子をなし、一人の子供ができた。
子の名前は有。

愛や優しさ、喜びや美しさが有る子供になれと名づけられた。

そしてその子が高校に上がる年に、父は病によって倒れてしまう。
危篤状態の父への面会。

医者はこちらが最後になりますと言って家族の面会を許可する。

初めは娘と父が短くではあるがやり取りをし、泣く娘に笑顔を見せる父親。

それから男性は妻である女性に二・三質問をし、妻の返事を聞くと
笑顔でこう答えた。

「攻略するはずだったのに、される側だったなんてね。しかしよく
俺を待っていられたね、初めの告白からずっと」

一体、何十年この子を待たせたのだろうかと苦笑する夫。

「ふふふ、待ってる恋人はね・・・とっても強いんだよ？」

それを最後に男は息を引き取った。

神山 武弘 享年49歳

ストロングラバーズ

沙紀ルート

完

らすとく（後書き）

一応完結。

ちよつとはしよつた部分があるのですがそこは読者さんの想像で補完してください。

暇なときや時間があったら更新するかも？完結だけどw

駄文に最後まで付き合ってくれて感謝です。

そのじゆうに 派生エンド前編（前書き）

前後編。

これが終わったたらラストの派生ルート二つで完全に完結すると思います。

最近仕事が忙しすぎてリアルに倒れそう。
ブラック企業を越えた何かになりつつある。

そのじゅつに 派生エンド前編

高校入学から一週間。

無事平穩に過ぎていくと思われていた俺の高校生活は、本当にあっけなく崩れ去る事となった。

学校が始まって一週間が経ち、新しく仲良くなった奴らと親交を深めるために一緒に部活見学を行っている途中に、女の子の小道具が満載のポーチを教室に忘れたのに気がついて、慌てて取りに行ったのが運命の分かれ目だった。

教室に着いた俺が見たものは・・・頭が少し禿げかけた、下半身に何も身につけてない小太りの中年教師が、俺の机に股間を押し付けて恍惚の表情をしているというとてもない光景だった。

「せ、先生。何やっているんですか!？」

声をかけずにさっさと他の教員を呼びにいか、警察に電話をかけていればまた違った未来があったかもしれないのだが、このときの俺は怒り心頭で変態汚物教師の壘行をただ黙って見ていることができなかつたのだ。

「と、と、藤堂?」

ちよ、下半身がスタンドアップしているだど!!!

「.....ッ!」

半裸のままズツと近寄ってくる変態に声にならない悲鳴を上げた俺は、あからさまな欲望と狂気の感じられる教師の目を見て腰を抜かしてしまった

ハアハアと言いながら近寄ってくるそれはまさにゴキブリ以上。

「見られたからには・・・仕方が無い。先生が特別レッスンを実施してあげよう」

そう言いながら鼻息を荒くしてにじり寄ってくるおっさんから少しでも離れようと、抜けた腰のままハイハイで逃亡を試みたが歩きとハイハイでは結果は言わずもがな。

やばい、ホントにやばいって。

捕まったら陵辱確定とかコレなんてエロゲ？

・・・この世界はエロゲの世界だった。
現実はいつだって残酷である。

ガシツと俺の腰を腕でホールドした変態が、四つん這い状態の俺の尻をロツクオン。

「ハアハア沙紀タン捕まえた。君が入学してからずっと目をつけていたんだ」

「は、離せよ！このド変態」

「ツツツツ！う、嘘だ」

パンツの上からナマモノをグイグイと押し付けていた変態だが、突然腰の動きを止めて俺からザザツツと距離を取ると鋭い視線をこちらに向け、なにやら警戒し始めた。

「ば、馬鹿な。僕の沙紀タンが沙紀タンが男の魂を持っているなんて。よくも僕の純情な心を弄んだな！くそつくそつくそつくそ！！！！！」

バンバンと床を強く蹴りながら癩癩を起こした禿げ親父に啞然とする俺。

「はっ？」

「ぼぼぼぼ僕は魔法使いなんだ、貴様が女の皮を被った男だつてことは魂を触れて見ればわかる。よくも今までだましてくれたな、許さない、絶対に許さない」

・・・この汚物はレイパー予備軍だけでなく電波男でジャンキーでもあつたのか。

訳のわからないことを叫びだしたこのおっさんに、貞操の危機だけでなく生命の危機も感じられる。

と、とにかく逃げないと。

このままここにいたら犯されるか、それとも殺されるか。

どちらにしても明るい未来はなさそうなので、人のいるところに逃げないと！

貞操と命の危機に火事場の馬鹿力なのか抜けた腰が復活し、ブツブツと独り言を呟いている変態を尻目に俺は扉に向かって走り出した。

「コイモツコイヘテラテラマツコイモツコイ・・・消え去れ女男め！貴様はこの世の全魔法使いを敵に回した！！！！」

廊下まであと少しというところで後方から変態の叫び声が聞こえ、その瞬間に俺の足元に見たことも無い紋様が浮かび上がり、それがカッと眩しい光を放ちそれを最後に俺は意識を失った。

身を切るような冷たさを背中に感じ、ハッと飛び起きるように目を
覚ました俺が目にしたのは、どこかで見たことのある懐かしい部屋。

「じじは・・・」

確か俺は変態教師から逃げていて、眩い光に包まれて意識を失って
しまったのだ。

まさかここは変態教師の部屋で、俺は拉致されてしまった・・・
っという可能性はとりあえず無さそうだ。

特に衣服の乱れもないし、体に違和感もない。

それにこの部屋は・・・前世の俺が借りていたアパートの寝室にそ
っくりなのである。

そして何より俺の前で顔を青くして床で寝ている・・・っというよ
り倒れている男が一人。

どう見ても前世の俺です、本当にありがとございました。

死人のようではあるが、確認したところ息もしているし脈もある。
とりあえず床に仰向けで倒れている元の自分をこのままにしておく
のは忍びないので、引きずりながら何とか寝床までたどり着き、元
の自分をベットに寝かしつけて掛け布団を被せた。

一仕事終えた俺はフウと息を吐き、勝手知つたる元我が家の台所で紅茶を入れて一息つくと妙に冷静になつてきた。もう何がなんだか。

転生という奇妙な体験をしている俺でもこの不可思議な現象はちょっと……。

今更ながら何故自分がここにいるのか考えてみるも答えは見つからない。

大体にして前世の自分に出会うとか。

まして今の自分はゲームの中の登場人物。

ありえない、ありえないでしょ。

自分は今ベットで寝ている男の魂が転生した存在ならば、あいつをあのまま放置していたら死んでいたのだろうか？

この室温だ、あのままフローリングの床で寝ていれば死んでいてもおかしくない。

だとすると……。

そう考えた時に俺の灰色の脳みそがSFな展開が起きるのではと警鐘を鳴らし始めた。

つまりは俺がベットまで運んだという事象により、過去に変化が起きてタイムパラドックス的な何かが起こり、俺という存在が消えてしまうのではないかと。

……無いな。

もしそうだとするならば俺が元の俺をベットに運んだ瞬間にそれが起きているはずだ。

こうしてお茶をまったり飲んでいられるはずもない。

しかしどうしよう。

今の俺は藤堂 沙紀であって神山 武弘ではないのだ。

両親もいれば友人もいる。

きつと皆心配しているはずだ。

なんとか、なんとかかしてあの場所に帰らないと。

肌で、いや、気配でわかる。

この世界は俺の住んでいた世界ではないのだと……。

結局一人でああでもないこうでもないと考えていたのだが、色々
ありすぎて疲れた俺は元の自分が寝ているベットに潜り込んで瞼を
瞑るのであった。

- - -

太陽が天高く昇り、時刻は午後1時を少し回った頃に俺は目を覚ま
した。

隣に誰かの体温を感じながら寝ぼけた眼を擦りつつ、はて?と思
いながらそちらに目をやると……。

程よい暖かさの正体が、男、であることを確認し、盗撮上等の
変態親父がまた忍び込んだのかとありそうな答えを導き出した結果
- - -

隣でイビキを掻いて寝ている男の横腹を「どっせーい！」と気合を
入れながら蹴りを一発。

「ぎゃー」っという断末魔と共にベットから転げ落ちる男の声を

聞いて、やっと完全に意識が覚醒した俺は昨日起きた出来事を思い出して・・・。

隣で寝ていたのは元の自分だった、完全に忘れていたわWWW

12話派生ルート後編

文字通り、飛び起きる羽目になった前世の俺が、藤堂沙紀である俺を見て「ちょ、起きたら目の前に美少女がいるとか・・・これなんてエロゲ？」とお決まりのセリフを呟き、啞然としている。間抜けな顔で目をパチクリさせながら「夢を見ているのか？」と頬を抓っている。

まあ、そうなるよなw

前世の俺も今の俺の同じ思考回路を持っているのだ。気持ちにはわからなくてもない。

ボヘッと俺に見とれている前世の自分に「気持ちの悪い奴だな、鼻の下伸びまくってるぞ。ドスケベめ!!!」と言ってやろうと思っただが、こいつは俺でもあるのでブーメランとして返ってきてかないから余計なことを言わずにさっさと説明に入ることにする。とりあえず自分がどういった存在かを事細かく説明し、何故ここに飛ばされてきたのかは不明だが、たぶん魔法使い()を自称する高校教師が関わっているのではないかと事実と憶測を交えながら淡々と伝えていく。

説明を聞き終えた武弘(前世の俺のことは面倒なのでこれからは武弘とする)がこちらを胡散臭げな目で見ていたので、中学の時にやらかした黒歴史と、初めての恥ずかしい告白や過去に付き合っていた女性の名前を挙げることによつてやつと信じてくれたようだ。途中で顔を青くして、「わかった!お前が俺だつてことは十分わかったから、それ以上言わないでくれ!!!」と必死で俺の口を大き

な手のひらで塞いできた。

傍から見れば、三十前の男が制服を着た女子高生に襲い掛かっているように見えないこともない。

まあ、両方俺なんだけど……。

「ちょ、苦しいからいい加減に放せって、鼻と口を一緒に押さえたら息ができないだろうが！！！」

「す、すまん。暴かれたくない過去が10代の女の子の口からペラペラと出てくるからつい……」

顔を青くしていたと思えば今度は頬を赤く染めてやがる。

本当に忙しい奴だなw

「大体だな、お前は俺で俺はお前で。黒歴史ウンヌンは俺にもダメージが返って来るんだよ。言わせんなタコが！」

そうだね、うん。

きっと今の俺はお前より顔が赤くなってると思うよ。

まあ、信じてくれたからこの羞恥心は無駄にはならなかったからいいとするか。

普通だったとしてもではないが信じてもらえそうに無いとんでも話ではあるからな。

自分がエロゲーのメインヒロインに記憶を持ったまま転生していて、それだけではなく魔法使いを自称する変態禿げ教師に襲われて、気がついたら世界を渡っていました！

しかもそこは前世の自分の住んでいた所で、目の前には前世の自分

がぶっ倒れていた。

「……どんな三流SF小説だよって話だよな。」

「うん、信じて言われても「ないわ」の一言で片付けられてしまつのは仕方がない事だよな。」

「だからって黒歴史を語ってブーメランとかもうね……。」

「しかしまあ、メインヒロインを攻略できないわけだな。そのメインヒロインが俺の転生体だったとは」

「主人公には出会わなかったけどな。あの変態仮面の武とは同じ中学だったけど」

「妙な納得顔をしている武弘に、親や友人、そして武は本当に変態だったことを語っていく俺。」

「しかしさあ」

武弘が眉間に皺を寄せ、難しい顔をしながら俺に話を切り出してきた。

「沙紀はこれからどうするの、帰るあては？無かった場合はどこで生活するの？」

「……ホントにどうしよう。」

「……」

「……」

.....

丸一日話しあった結果、この世界にいる間はこちらの世界の親に養子として引き取ってもらおうという方向で意見が一致し、次の日の朝一番の新幹線で実家に向かうことが決定した。

戸籍も身分証明できる物も無い俺は、道中で万が一の事態があるといけないので武弘にも同行してもらおうことになった。

翌日、 県行きの新幹線に乗り込んだ俺たちは、駅に行く途中のコンビニで買ったまったく同じ弁当とお茶を口に流し込みながら、昨日と同じ様にストラバ世界の話で盛り上がっていた。

「しかし悪いな、料金や弁当まで全部出してもらって」

「気にするな、お前は俺で俺はお前で・・・なんだろ？なによりさ、自分の生まれ変わりだってわかっているのにあの沙紀ちゃんと一緒に居られるだけで胸が熱くなってくるんだよ！」

鼻息を荒げながら、こちらに身を乗り出して興奮しながら捲くし立てる武弘。

「これだから男は・・・」

「えっ？」

「いや、一度は言ってみたかったから」

出迎えてくれたのは今年で59歳になるこちらの世界の母親だった。少し白髪が混じった髪をおかっぱに切り揃え、童女のような装いをしているが目尻にできている皺を見れば、これまでどれほどの苦勞をしてきたのかが見て取れる。

父親は俺が中学に上がった年に交通事故で亡くなり、それからはこの母親が女手一つで俺を育て上げ、無事大学も卒業して一人立ちしてからも何かと世話を焼いてくれているのだ。

「まあ、あなたが沙紀ちゃんね！武弘から大体の事情は聞いているわ。こんな可愛い子が武弘の生まれ変わりなんて。ささ、詳しい話は家の中で」

母親に促されて家に入る俺たち。

・・・懐かしいな。

庭にある松の木も、玄関に置いてある置物も。

なによりそこから離れてみないとわからない実家の匂い。

武弘＋藤堂沙紀としての16年間で脳裏の片隅に追いやられていた記憶が一気に蘇り、不覚にも涙が零れ落ちそうになった。

俺は藤堂沙紀なのだが、今この瞬間だけは神山武弘としての感情が表に出てきて「ただいま」と無意識のうちに呟いていた。

後から家の中に入ってきた武弘も懐かしいのか目を細めて微笑んでいる。

・

・

・

客間に案内され、挨拶もそこに武弘から聞かされているであろう話を俺の口から直接元母親に説明していく。

「……………」
手立てが見つかるまでここに置いてもらえると助かるのですが」

「やあねー、あなたは元とはいえ武弘なんでしょ？ だったら私の子供みたいなものよ。そんな畏まった口の利き方をしなくてもいつもの通りにしていればいいのよ」

「そう言ってもらえると、やっぱりうれしいかな。ただいま……
でいいのかな、母さん」

「お帰り沙紀ちゃん。もし、帰る方法が見つからなくてもずっとここに居ていいのよ。ああ、なんだかワクワクしてきちゃった。私昔からずっとながが欲しかったのよね！」

それから長々とくだらない話を武弘も交えて三人で話し時間は過ぎていった。

そして外も暗くなってきたいい時間となり、明日仕事のある武弘は「俺はこれで」と言って帰っていった。

俺といえは今日からこの家で暮らすこととなった。

つまりはこちらの世界の母親の養子となり、藤堂 沙紀改め神山 沙紀としてストラバ世界に帰るその時までは.....。

こちらに居る間、実家で食っては寝るのニート生活を満喫しようと思っていたのだが、母親の「16歳ならちゃんと学校に通いなさい！」という鶴の一声でその夢は消え去った。

えっ？居候もどきの分際でやけに立派な身分じゃないかって？

案ずることなかれ、俺の生活費は全て武弘が出してくれることになっているのだ。

前世の俺はかなり稼いでいたので、人の一人や二人などでビクともするはずもなく。

ついでに役所への手続きなども全部武弘任せ。

前世の俺には苦勞掛けっ放しになるけど所詮は俺だからいいよね？

- - -

高校は実家から程近い、前世の俺が通っていた県立の高校に通うことになった。

今は12月で編入するまでにたっぷりと時間があったので、服や小物などの買い揃えるために母親と近くのデパートへ買出しに出かけたのだが.....。

「これも着てみて！その次はこれで！！！！ああ、可愛いわ。一度で

いいからこうやって娘と一緒に買い物してみたかったのよね」

暴走した母親が俺を着せ替え人形にして、大量に買った服や下着は手で持っていていられなくなったので、業者に頼んで配送してもらったほどだ。

服売り場だけで3時間も拘束されていた俺はもうグツタリ。

しかし、母親が本当にうれしそうにしている姿を見ると・・・。

今までずっと一人で寂しかったのかも知れないな。

よし、武弘にはちゃんと親孝行するように釘を刺しておかないと。

人間なんていつポックリ逝ってしまうかもわからないんだ。

できる時に親孝行しておかないと絶対後悔するだろうから。

何もできずに死んでしまった俺のように・・・。

・・・

・・・

・・・

そんなこんなで冬休みも終わり、ついに登校初日を迎えた。

紺色のブレザーに身を包んだ俺は、鏡の前で変なところがないか入念にチェックをする。

この短い期間に母親からの女性としての身だしなみを叩き込まれ（ストラバ世界ではジーンズなどを好んで着用していた）、変なところがあるとすぐに修正されてしまうのでチェックは念入りなのだ。

一通り準備を終え、家の前で母親とタイマーをかけたデジカメで記念撮影を終えた俺は、普通だった通学路をゆっくり歩きながら、町の

変わった所と変わってない所を記憶と照らし合わせながら間違い探しを楽しんでいた。
新しくできた店や建物もあれば、潰れて更地になっていたりする所もある。

そして学校に到着。

あの頃とまったく変わっていない高校にノスタルジーを感じつつ、校内に入って靴をスリッパに履き替えて職員室に向かう。

職員室の扉を叩いて学校が始まる前に会ったクラス担任の下へ。

担任と軽く挨拶を交わし、俺のクラスまで案内してもらおう。

「これから君を紹介するから自己紹介で緊張しないように」

と俺に残して担任は教室の中へ。

担任が教室の中へ消えてから1分ほどで中から俺を呼ぶ声がかかる。

「それじゃあ神山さん、入ってきてください」

扉の前で待機していた俺は、少し緊張しながら扉を開け中に入るとそこは……。

まさに視線の剣山。

ざわつく教室、色めきたつ男子にどこかがっかりしたような女子と反応は真っ二つのよう。

やっぱりこの時期の編入は珍しいか……。

俺は教壇の前に歩いていき、黒板に白いチョークでカツカツと音をたてながら自分の名前を書いていく。

書き終わってからクラスメイトの方に向き直り、一礼をして挨拶と自己紹介を。

「始めまして、編入生の神山 沙紀です。訳があつてこの時期に編入することになりましたが、皆さんとは同じ歳です。至らぬところが多々あると思いますがどうぞよろしくお願いします」

静まり返る教室。

そんな折、一人の男子生徒が興奮したように立ち上がり、こちらを指差しながら口を開いた。

「美人でおかしな時期に編入ってどこのエロゲだよと思つたら、ストラバの藤堂 沙紀ちゃんじゃないか！ついに二次元が現実に追いついた！！！」

どうやら俺に平穩な日常というものは存在しないらしい。
ガツデム！！！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3882q/>

エロゲに転生ってマジですか？そうですか

2011年7月31日13時22分発行